

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅲ

越堂たたら跡 整備事業報告書



令和6年（2024）3月

出雲市

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅲ

越堂たたら跡 整備事業報告書



令和6年(2024)3月

出雲市

序

田儀櫻井家は、出雲市多伎町奥田儀を本拠地として江戸時代初期から約250年間にわたりたたら製鉄を営み、最盛期には出雲地方で一二を争うほどの生産量を誇る鉄師にまで成長を遂げました。また、製鉄業に限らず田畑の開墾や道路の開削などにも尽力し、地域経済の発展にも大きく貢献しました。現在、田儀櫻井家のたたら製鉄遺跡は、地元の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会の協力によって良好な状態で保たれ、調査研究が進んでいます。

平成15年(2003)11月、旧多伎町が開始した総合調査は、平成17年(2005)3月の市町村合併後も出雲市に継承され、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の発掘調査と史料調査を両輪として研究が進められてきました。これらの成果によって遺跡の歴史的価値が認められ、平成18年(2006)1月に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡が国指定史跡となり、さらに平成21年(2009)2月には越堂たたら跡と聖谷たたら跡が追加指定を受けました。現在では史跡や関連遺跡の調査研究のほか、史跡の整備や活用にも積極的に取り組んでいます。

本書は、平成30年度(2018)から実施した越堂たたら跡整備事業の内容をまとめたものです。越堂鉦は、田儀櫻井家が日本海沿岸で操業した沿岸部のたたら場で、約150年もの長期間稼働したことが知られています。また、山間部と沿岸部でたたら製鉄を営む経営戦略を独自に展開した田儀櫻井家の基幹たたらとして重要な役割を担っていました。本事業ではこれまでの調査研究の成果を活かして越堂たたら跡の整備を行い、その内容を本書にまとめることができました。本書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術ならびに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、ご指導やご協力をいただきました田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会の委員の方々、文化庁、島根県教育庁文化財課や関係者の皆様に対して心より謝意を表するとともに、普段から遺跡の保存・維持活動および調査研究にご協力いただいている地元の方々や保存会の皆様に深く感謝いたします。

令和6年(2024)3月

出雲市長 飯塚俊之

例 言

1. 本書は史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の越堂たたら跡（島根県出雲市多伎町口田儀910番51外）における整備事業の内容をまとめた報告書である。
2. 本書で報告する事業内容の実施年度は下記のとおりである。
 - 現地簡易整備 平成30年度（2018）・令和元年度（2019）
 - 整備基本計画 令和2年度（2020）（整備内容の検討は平成24年度[2012]から継続して実施）
 - 現地本格整備 令和3年度（2021）・令和4年度（2022）
 - 施設等整備 令和5年度（2023）
 - 報告書作成 令和5年度（2023）
3. 今回の整備対象面積は約1,706㎡（現地整備：約367㎡ 施設整備：約1,339㎡）である。
4. 事業は以下の体制で実施した。
 - 事務局 藤原英博（市民文化部部长 令和元・2年度）
 - 三代 均（同 部長 令和3年度）
 - 岡 真悟（同 部長 令和4・5年度）
 - 木村 亨（同 次長兼文化財課課長 平成30年度・令和元年度）
 - 片寄友子（同 次長兼文化財課課長 令和2～4年度）
 - 森山賢次（同 次長兼文化財課課長 令和5年度）
 - 大梶智徳（文化財課課長補佐 平成30年度・令和元年度、主査 令和2・3年度）
 - 三原一将（同 主査 令和5年度）
 - 景山真二（同 課長補佐 平成30年度～令和元年度）
 - 吾郷尚志（同 課長補佐 令和4・5年度）
 - 原 俊二（同 課長補佐 令和2・3年度）
 - 梶谷淳司（同 係長 平成30年度～令和2年度）
 - 渡部竜男（同 係長 令和3年度）
 - 飯塚明美（同 係長 令和4・5年度）
 - 須賀照隆（同 係長 令和4・5年度）
 - 富岡英之（同 主任 令和元年度）
 - 山田浩子（同 主任 令和2～4年度）
 - 安田晋也（同 主任 令和3・4年度、主幹 令和5年度）
 - 幡中光輔（同 主事 平成30年度～令和2年度、主任 令和3～5年度）
 - 川崎亮太（同 主事 令和4・5年度）
 - 広瀬耕治（多伎支所副支所長 平成30年度、多伎行政センター市民サービス課課長 令和元～3年度）
 - 石橋健治（多伎行政センター市民サービス課課長 令和4・5年度）

5. 本書の編集は、職員の協力を得て幡中が行った。
6. 事業の実施および本書の刊行にあたり、史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会（平成22年1月設置）において、下記の委員の方々からご指導を賜った（敬称略、所属・役職は令和5年度現在）。

専 門 坂井秀弥（公益財団法人大阪府文化財センター理事長、元 奈良大学文学部教授、委員長）
田中義昭（元 島根大学法文学部教授）（令和4年12月まで）
和田嘉宥（米子工業高等専門学校名誉教授）
角田徳幸（雲南市教育委員会文化財課課長、元島根県教育庁古代文化センター長）
会下和宏（島根大学総合博物館教授）（令和5年1月から）

地 元 河上 清（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会副会長）
玉川惠一（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会理事、元 多伎地域土木委員会会長）
梶谷宗克（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会理事、元 田儀地区連合自治会会長）
山崎幸一（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会会長、副委員長）

7. 事業の実施にあたって、次のの方々および機関からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略、所属は当時、順不同）。

文化庁、島根県教育庁文化財課、島根県教育庁古代文化センター、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県立古代出雲歴史博物館、出雲市立海辺の多伎図書館、多伎文化伝習館、多伎コミュニティセンター、手引ヶ丘公園 風の子楽習館、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会 中井將胤（文化庁文化資源活用課）、永井ふみ（文化庁文化財第二課）、勝部智明・是田 敦・仁木 聡・稲田陽介・今福拓哉（島根県教育庁文化財課）、松尾充晶（島根県教育庁古代文化センター）
西尾克己（出雲市文化財保護審議会委員）、永瀬 学（出雲市市民文化部、元委員）、北脇正巳（出雲市都市建設部、元委員）、田中正實（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会、元副委員長）

8. 本書の図版などに掲載した越堂たたら跡関連の写真は、幡中が撮影した。その他のたたら場跡や業務・工事関連写真などは職員が撮影したほか、各請負業者の撮影写真を使用した。また、次のの方々や機関などから3次元測量および写真撮影の許可や協力、写真データの提供および掲載の許可、史跡標識の題字やカツラの木の提供をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略）。

雲南市教育委員会、奥出雲たたらと刀剣館、奥出雲町定住産業課、公益財団法人糸原記念館
公益財団法人可部屋集成館、公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団
島根県教育庁古代文化センター、多伎藝神社、多伎文化伝習館
東京大学 工学・情報理工学図書館 工2号館図書室
萩市教育委員会、萩市商工観光部文化財保護課、安来市教育委員会、安来市和銅博物館
井原建幸、角田徳幸、川上晴夫、高橋宏樹、玉川惠一、恒松道保、鳥屋原敏夫
原 禎幸、山崎久和

9. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北、レベルは海拔高を示す。

10. 事業で実施した主な業務・工事は下表のとおりである。

越堂たたら跡整備事業の主な業務・工事一覧

	主な業務・工事等	請負業者
平成30年度(2018)	現地簡易整備工事	株式会社山下工務所
	現地遺跡説明看板設置	株式会社テクノシステム
令和2年度(2020)	整備基本計画策定業務	株式会社寺本建築都市研究所
	現地整備状況測量・図化等業務	TDM テック
	高殿南側掘削工事	株式会社山下工務所
令和3年度(2021)	設計関連資料作成業務	株式会社寺本建築都市研究所
	現地地盤整備・看板整備工事	株式会社山下工務所
令和4年度(2022)	整備実施設計業務	株式会社寺本建築都市研究所
	現地整備状況測量業務	株式会社TDM テック
	山内復元イラスト作成業務	有限会社地域未来
	現地整備工事(製鉄が・天秤ふいご復元製作等)	有限会社高橋工務店
令和5年度(2023)	ガイドンス施設整備工事等監理業務	株式会社寺本建築都市研究所
	床釣り土層立体剥ぎ取り等展示製作施工業務	株式会社スタジオ三十三
	立体遺構映像制作業務	株式会社TDM テック
	映像展示用動画制作業務	有限会社トランスアクション
	整備状況空撮測量業務	株式会社TDM テック
	ガイドンス施設建築工事	浜村木材有限会社
	ガイドンス施設電気設備工事	株式会社庄司電工
	ガイドンス施設機械設備工事	有限会社新宮設備
	ガイドンス施設地盤整備工事	ピー、ピー、ダブリュ株式会社
	ガイドンス施設芝張り・植生シート等設置工事	ピー、ピー、ダブリュ株式会社
	ガイドンス施設用地側溝整備工事	株式会社山下工務所
	ガイドンス施設案内看板設置工事	ピー、ピー、ダブリュ株式会社
	視認用史跡名称看板設置工事	株式会社安井組

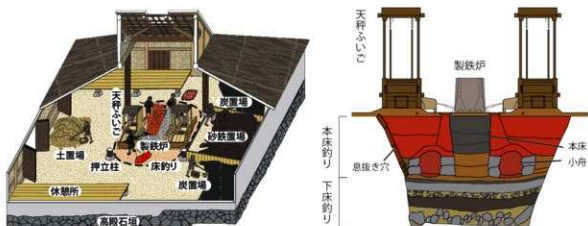


商取引などの際に文書に使用された印。家紋や屋号、たたら場の名前のほか、田儀櫻井家の11代目当主運右衛門直順が祖先の姓「塙」を名乗った印もある。(可部屋櫻井家の祖は大坂夏の陣で活躍した塙団右衛門直之といわれている)

田儀櫻井家が使用した印判

凡 例

1. 本書での「たたら」に関する表記について、固有名詞（遺跡以外）に用いる場合は「鉦」（ex. 越堂鉦）を使用し、遺跡を指す場合は「たたら跡」（ex. 越堂たたら跡）、普通名詞として使用する場合には「たたら」（ex. たたら製鉄）とする。
2. 本書で使用する高殿と製鉄炉地下構造である床釣りの部位名称は、下図（上）のとおりである。
3. 本書で取り上げる田儀櫻井家たたら製鉄遺跡（国史跡含む）の位置は、下図（下）のとおりである。



本書で使用する高殿（左）・床釣り（右）の各部位の名称



田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布と国史跡の位置

目次

第1章	事業に至る経緯と経過	1
	第1節 事業に至る経緯	1
	第2節 事業の経過	10
第2章	遺跡の位置と環境	17
	第1節 地理的環境	17
	第2節 歴史的環境	18
第3章	田儀櫻井家のたたら製鉄	27
	第1節 田儀川流域周辺の製鉄関連遺跡	27
	第2節 田儀櫻井家の製鉄経営と独自戦略	35
第4章	越堂たたら跡の整備計画	39
	第1節 基本理念と基本方針	39
	第2節 整備基本計画	43
	第3節 実施設計	54
第5章	越堂たたら跡の整備内容	55
	第1節 調査成果の概要	55
	第2節 簡易整備	65
	第3節 現地整備	69
	第4節 ガイダンス施設整備	85
第6章	総括	121
	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡整備の方向性と活用の可能性	121
第7章	結語	129

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	越堂たたら跡周辺の遠景(左:南東から 右:北西から)・1	第42図	銚子製鉄炉(依1933より)・46
第2図	田儀櫻井家の系譜・2	第43図	菅谷鉾の高殿内部・46
第3図	保存会による宮本鍛冶山内遺跡内の草刈り・3	第44図	銚子製鉄炉の天秤ふいご(依1933より)・46
第4図	保存会による宮本鍛冶山内遺跡のガイド・3	第45図	大板山たたら製鉄遺跡の透過式看板・46
第5図	保存管理計画・4	第46図	大板山たたら製鉄遺跡の史跡標識・47
第6図	総合ガイドブック・4	第47図	越堂たたら跡の遺跡説明看板・47
第7図	整備基本構想・4	第48図	菅谷鉾の高殿外観(雲南市)・49
第8図	整備内容の検討状況(第15回委員会)・5	第49図	金屋子神社民俗館外観(安来市)・49
第9図	現地簡易整備の視察状況(第15回委員会)・5	第50図	和鋼博物館外観(安来市) (写真提供:安来市和鋼博物館)・49
第10図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡のゾーニング・7	第51図	奥出雲たたらと刀剣館外観(奥出雲町) (写真提供:奥出雲町定住産業課)・49
第11図	越堂たたら跡の史跡指定範囲・12	第52図	大板山たたら館外観(山口県萩市)・50
第12図	越堂たたら跡の史跡指定範囲と隣接地・13	第53図	ガイダンス施設整備地(簡易立地前)・50
第13図	『田儀村誌』掲載の越堂鉾山内建物配置図・14	第54図	ガイダンス施設配置イメージ図(基本計画段階)・50
第14図	幕末～明治初年の越堂鉾山内と田儀港(南東から)・14	第55図	ガイダンス施設外観イメージ図(基本計画段階)・50
第15図	幕末～明治初年の越堂鉾山内(北西から)・15	第56図	越堂たたら跡の床釣り(左)と土層立体剥ぎ取り(右)・51
第16図	幕末～明治初年の田儀港(南から)・15	第57図	大板山たたら館の映像展示の液晶モニター・51
第17図	現地整備見学会の状況・16	第58図	越堂たたら跡の3次元モデル映像・51
第18図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺主要遺跡位置図・19	第59図	ガイダンス施設・越堂たたら跡現地および 関連文化財の見学動線計画(基本計画段階)・53
第19図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布・25	第60図	JR田儀駅前の看板・53
第20図	田儀川流域周辺の主要遺跡と田儀櫻井家 たたら製鉄遺跡の分布・28	第61図	島根県立古代出雲歴史博物館の回廊・53
第21図	宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡の分布と範囲・29	第62図	看板設置位置の検討(第23回委員会)・54
第22図	屋敷谷たたら跡全景・30	第63図	ガイダンス施設展示イメージ図・54
第23図	屋敷谷たたら跡の製鉄炉・30	第64図	建物配置予定地周辺の地盤調査状況・54
第24図	若ヶ原奥たたら跡全景・30	第65図	実施設計の検討(第24回委員会)・54
第25図	聖谷奥1遺跡全景・30	第66図	『田儀村誌』掲載の越堂鉾山内建物配置図と調査位置・55
第26図	宮本鍛冶山内遺跡の大鍛冶場跡・32	第67図	越堂たたら跡周辺全体オルソ図(調査完了後)・58
第27図	朝日たたら跡の床釣り・32	第68図	越堂鉾の高殿内部の復元・59
第28図	越堂たたら跡の床釣り・32	第69図	越堂鉾の床釣り模式図・59
第29図	越堂たたら跡高殿全景・32	第70図	越堂たたら跡の主な発掘調査成果オルソ図 (平成25～29年産)・59
第30図	梅ヶ谷尻たたら跡の床釣り・33	第71図	越堂たたら跡高殿周辺全景・60
第31図	加賀谷たたら跡の金屋子神社・33	第72図	高殿内部の遺構・60
第32図	海のたたら(越堂たたら跡遠景)・36	第73図	押立柱4の礎石と墨書土器・60
第33図	山のたたら(朝日たたら跡遠景)・36	第74図	高殿南面石垣の造り替え痕跡と暗渠施設・60
第34図	田儀櫻井家が経営したたたら場・鍛冶屋の採集 期間(左)と産鉄の流れ(右)(左は角田2022に追加)・36	第75図	東小舟(南側)と火渡六・息吹き六・60
第35図	廻船による資源調達(①鉄・②木炭)と産鉄の主な販路・37	第76図	東小舟(北側)と床釣りの造り替え痕跡・60
第36図	出雲市の歴史文化基本構想および文化財保存活用 地域計画と保存管理計画・40	第77図	東小舟(南側)内部煙道・60
第37図	越堂たたら跡整備の基本理念と基本方針・40	第78図	東小舟(北側)内部壁口・60
第38図	越堂たたら跡現地整備完成イメージ図・44	第79図	地中レーダー探査による下床釣りの推定・61
第39図	ガイダンス施設整備完成イメージ図・44	第80図	試掘確認調査のトレンチ位置(上)と土層 堆積柱状図(中)・土層堆積状況(下)・62
第40図	越堂たたら跡現地整備計画平面図・45	第81図	製鉄具(左から打簾・種輪・釜が大きい・釜が小さい)・63
第41図	越堂たたら跡の製鉄炉・天秤ふいご 復元製作イメージ図・46		

第 82 図	神像 (左) と初花 (右)……………63	第 121 図	関連文化財説明看板図面 (S=1/40)……………81
第 83 図	越堂たたら跡 (手前) と権現山 (奥) (北西から)……………64	第 122 図	関連文化財説明看板 (左上: 山内道路石垣 右上: 金屋子神社跡 右下: 西小路 右下: 如來坐像) (令和 4 年度)……………82
第 84 図	田儀川沿いの水路 (南西から)……………64	第 123 図	現地誘導看板図面 (1) (S=1/40)……………83
第 90 図	山内道路に伴う石垣 (西から)……………64	第 124 図	現地誘導看板図面 (2) (S=1/20)……………84
第 86 図	亀山山麓の如來坐像 (正面から向かって右)……………64	第 125 図	現地誘導看板 (左上: ガイダンス施設付近 右上: 高輪橋側 左下: 如來坐像付近 右下: 越堂たたら跡現地) (令和 4 年度)……………84
第 87 図	越堂たたら跡現地簡易整備平面図・見通し断面図……………66	第 126 図	現地整備・ガイダンス施設全景 (左: 北から 右: 南西から)……………85
第 88 図	道跡説明看板内容 (上: 上段板面 下: 下段板面)……………67	第 127 図	ガイダンス施設全景 (左: 北から 右: 西から)……………85
第 89 図	道跡説明看板図面 (S=1/40)……………67	第 128 図	ガイダンス施設平面図 (上: S=1/800 下: S=1/600)……………87
第 90 図	道跡説明看板設置完了状況 (平成 30 年度)……………68	第 129 図	建物平面図 (上) (S=1/200)・天井伏図および 屋根伏図 (下) (S=1/200)……………88
第 91 図	道跡名称看板 (保存会設置) (令和元年度)……………68	第 130 図	建物断面図 (上) (S=1/80)・屋根間 (下) (S=1/20)……………89
第 92 図	道構表示設置工事状況 (平成 30 年度)……………68	第 131 図	建物立面図 (上) (S=1/150)・建具関連図面 (下)……………90
第 93 図	道構表示 (平成 30 年度)……………68	第 132 図	建物建築工事状況 (1)……………91
第 94 図	道構名称看板 (平成 30 年度)……………68	第 133 図	建物建築工事状況 (2)……………91
第 95 図	道構名称看板差し替え仕様……………68	第 134 図	建物完成状況 (1)……………91
第 96 図	道構名称看板図面 (S=1/20)……………68	第 135 図	建物完成状況 (2)……………91
第 97 図	越堂たたら跡現地整備完了状況 (左: 北西から 右: 南西から) (令和 4 年度)……………69	第 136 図	建物電気設備平面図 (S=1/100)……………92
第 98 図	越堂たたら跡現地整備平面図・見通し断面図……………70	第 137 図	建物給排水衛生設備 (上)・換気および消火設備 (下) 平面図 (S=1/100)……………93
第 99 図	高殿南側地盤整備工事状況 (令和 2 年度)……………71	第 138 図	建物電気設備関連図面……………94
第 100 図	高殿南側地盤整備完了状況 (令和 2 年度)……………71	第 139 図	電気設備設置状況 (左: 展示室照明 右: ドーム型カメラ)……………94
第 101 図	史跡標識 (令和 3 年度)……………71	第 140 図	機械設備設置状況 (左: 給排水衛生設備 右: 消火設備)……………94
第 102 図	史跡標識図面 (S=1/40)……………71	第 141 図	地盤整備・用地側溝・看板設置工事平面図 および地盤整備工事断面位置 (S=1/600)……………95
第 103 図	説明プレート内容案 (左: 第 21 回委員会と 設置位置検討 (右: 第 22 回委員会)……………72	第 142 図	地盤整備工事断面図 (1) (S=1/300)……………95
第 104 図	説明プレート設置工事状況 (令和 3 年度)……………72	第 143 図	地盤整備工事断面図 (2) (S=1/300)……………96
第 105 図	説明プレート (令和 3 年度)……………72	第 144 図	地盤整備工事施設構造図 (S=1/50)……………97
第 106 図	説明プレート図面 (S=1/40)……………72	第 145 図	地盤整備工事舗装平面図 (上) (S=1/400)・ 構造図 (1) (中) (S=1/300) 構造図 (2) (下) (S=1/300)……………98
第 107 図	真砂土舗装施工状況 (令和 3 年度)……………73	第 146 図	地盤整備工事真砂土範囲平面図 (上) (S=1/600)・ 植栽工平面図 (下) (S=1/600)……………99
第 108 図	製鉄が・天秤ふいごの設置位置確認 (左) と 設置状況 (右) (令和 4 年度)……………73	第 147 図	地盤整備工事状況 (1)……………100
第 109 図	製鉄が・天秤ふいご復元製作 (左上: 南から 右上: 南東から 左下: 南西から 右下: 北西から) (令和 4 年度)……………74	第 148 図	地盤整備工事状況 (2)……………100
第 110 図	製鉄が・天秤ふいご復元製作図面 (1) (S=1/60)……………74	第 149 図	地盤整備工事状況 (3)……………100
第 111 図	製鉄が・天秤ふいご復元製作図面 (2) (S=1/60)……………75	第 150 図	地盤整備状況 (左: 既水補強 右: カプラの木補強)……………100
第 112 図	製鉄がの製作状況 (左: メタルラスタ下地 右: モルタル塗り) (令和 4 年度)……………76	第 151 図	いごむし場からの限界 (左: 池に接する 右: 池に接しない)……………101
第 113 図	製鉄がの柱礎土仕上げ (左) (令和 4 年度) と 菅谷製鉄が (右)……………76	第 152 図	用地側溝整備状況……………101
第 114 図	天秤ふいごの部材 (左: スギ材) と 加工状況 (右) (令和 4 年度)……………76	第 153 図	視認用史跡名称看板……………102
第 115 図	防腐剤を含浸処理した天秤ふいごの部材 (左) と 組み立て状況 (右) (令和 4 年度)……………76	第 154 図	視認用史跡名称看板図面 (S=1/200)……………102
第 116 図	復元イラスト透過式看板 (令和 4 年度)……………78	第 155 図	施設案内看板 (建物前)……………103
第 117 図	復元イラスト透過式看板図面 (S=1/40)……………78	第 156 図	施設案内看板 (多目的止場横)……………103
第 118 図	道構表示の追加 (土層立体的な取り位置を表示) (南西から) と道構名称看板の更新 (南東から) (令和 4 年度)……………79	第 157 図	施設案内看板図面 (建物前) (S=1/100)……………103
第 119 図	道構説明看板の差し替えと埋設表示プレート図面……………79	第 158 図	施設案内看板図面 (多目的止場横) (S=1/100)……………104
第 120 図	ガイダンス施設・越堂たたら跡現地および 関連文化財と看板設置位置……………80	第 159 図	展示全体平面図 (1)・エリア別平面図 (F) (S=1/100)……………105
		第 160 図	展示立面図 (1) (S=1/60)……………106

第161図	展示立面図(2)(S-1/60)……………107	第178図	床釣り土層立体剥ぎ取りパネル(上)・ 図面(下)(S-1/30)……………117
第162図	入口サイン立面(上)(S-1/18)・ 図面(下)(S-1/40)……………108	第179図	床面イラストマップ施工状況……………118
第163図	入口サイン……………109	第180図	床面イラストマップ(田儀櫻井家たたら製鉄 遺跡周辺マップ)……………118
第164図	越堂たたら跡出土品展示状況(入口サイン 展示ケース内)……………109	第181図	窓サイン(左)と設置状況(右:正面 左下:如來坐像を望む 右下:越堂たたら跡高地を望む)……………119
第165図	映像展示(左:徹夜解説!越堂たたら跡 右:3次元映像でみる越堂たたら跡)……………110	第182図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡の ゾーニングと特性……………121
第166図	映像再生装置設置状況……………110	第183図	越堂たたら跡ガイダンス施設と展示状況……………122
第167図	展示パネル設置状況(1)……………110	第184図	越堂たたら跡の現地整備状況……………123
第168図	展示パネル設置状況(2)……………110	第185図	現在の越堂たたら跡周辺(左)と幕末~明治初年の 越堂山内の景観(右)……………123
第169図	展示パネルデザイン(1)……………111	第186図	宮本観治山内遺跡全景(左)と田儀櫻井家 本宅跡背面石垣(右)……………124
第170図	展示パネルデザイン(2)……………112	第187図	田儀櫻井家墓地・智光院(左)と金屋子神社(右)……………124
第171図	ダンボールクラフト(北前船)展示状況……………113	第188図	朝日たたら跡展示棟(左)と床約り遺構展示(右)……………125
第172図	地元ゆかりの品(ダンボールクラフト) 展示ケース図面(S-1/20)……………113	第189図	菅谷鉦高殿(左)と高殿内部(右)……………127
第173図	廻船問屋関連品・模型展示状況……………114	第190図	櫻井家住宅(左)と林原家住宅(右)……………127
第174図	廻船問屋関連品展示状況……………114	第191図	和銅博物館(左)(写真提供:安東市和銅博物館)と 奥出雲たたらと刀剣館(右) (写真提供:奥出雲町定住産業課)……………127
第175図	高殿内部・床約り模型展示状況……………114	第192図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡(史跡)と出雲地方 周辺のたたら製鉄関連施設の位置関係……………128
第176図	高殿内部・床約り模型解説イラスト(上)・ 展示ケース図面(下)(S-1/20)……………115		
第177図	床約り土層立体剥ぎ取り(左上:現地剥ぎ取り状況 右上:製作完了状況 左下:土質解説パネル 右下:展示状況)……………116		

挿表目次

第1表	史跡指定・計画策定・刊行物などに関する 主な出来事……………4	第4表	史跡および遺跡別の現状と課題……………8
第2表	整備検討委員会での越堂たたら跡整備に関する 主な検討内容(整備活用基本構想策定以降)……………6	第5表	越堂たたら跡の主な整備内容一覧……………10
第3表	ゾーン別にみた史跡の現状と課題……………8	第6表	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備事業 内容一覧(平成24年度以降)……………11
		第7表	歴史的環境の参考文献一覧……………25・26

図版目次

図版1	整備完了状況	図版13	現地整備(令和4年度)(2)
図版2	遺跡遠景(1)	図版14	現地整備(令和4年度)(3)
図版3	遺跡遠景(2)	図版15	現地整備(令和4年度)(4)
図版4	遺跡遠景(3)	図版16	ガイダンス施設整備(令和5年度)(1)
図版5	遺跡周辺全体図	図版17	ガイダンス施設整備(令和5年度)(2)
図版6	遺跡全景(1)	図版18	ガイダンス施設整備(令和5年度)(3)
図版7	遺跡全景(2)	図版19	ガイダンス施設整備(令和5年度)(4)
図版8	遺構全体図	図版20	ガイダンス施設整備(令和5年度)(5)
図版9	現地整備全体図	図版21	ガイダンス施設整備(令和5年度)(6)
図版10	簡易整備(平成30年度)	図版22	越堂たたら跡周辺
図版11	現地整備(令和3年度)	図版23	口田儀周辺(1)
図版12	現地整備(令和4年度)(1)	図版24	口田儀周辺(2)

第1章 事業に至る経緯と経過

第1節 事業に至る経緯

1 田儀櫻井家の沿革と越堂鉦

越堂たたら跡は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかで日本海沿岸部に位置するたたら場跡であり、出雲市多伎町口田儀（当時の神門郡口田儀村）に所在する（第1図）。田儀櫻井家は仁多郡奥出雲町（当時の仁多郡上阿井村）を中心にしたたたら製鉄業を営んだ櫻井家の分家であり、櫻井家の3代目当主で可部屋櫻井家⁽¹⁾の初代である櫻井三郎左衛門直重が、江戸時代初期に出雲市多伎町奥田儀（当時の神門郡奥田儀村）で居宅を構えて鉄山を開発したことに始まる。直重の嫡男である幸左衛門直春が寛文中期から延宝期（1665年から1678年頃）に可部屋櫻井家から分家して田儀櫻井家の初代当主となり奥田儀に移って本格的に製鉄業を開始し（山崎2008）、12代目当主の勝之助直明が明治23年（1890）に奥田儀を後にするまで、約250年間にわたってこの地でたたら製鉄を行ってきた（第2図）。

2代目弥右衛門正信や3代目三郎左衛門直且は、多伎町域や佐田町域、大田市域の山々を次々と購入し、たたら製鉄業の事業拡大を進めた。この時期は天秤ふいごが発明・導入されてたたら場の生産性が大きく向上したため、各地の鉄師も同様に事業の拡大を図っていた。この頃には現在の多伎町奥田儀の宮本において山内が成立していたことが確認されている。

4代目宗兵衛清矩の時期には、田儀櫻井家は享保10年（1725）に松江藩が実施した「鉄方御方式」で出雲国内に定められた9鉄師のうちの1つとなった。そして多伎町域および佐田町域の山々や立木を購入し、鉄山の規模を拡大させた。聖谷たたら跡（多伎町奥田儀）には清矩が造立した地蔵が残され、この頃に経営されたと考えられる。また元文元年（1736）には宮本山内に金屋子神社を創建した。

5代目甚三郎順之も佐田町域の山々を購入して鉄山の拡大に努めた。その一方、沿岸部に立地する越堂鉦については、明和8年（1771）に石見国横道村の弥平太から順之が買い請けたと考えられているが、文献史料によると越堂鉦の山内が確認できるのは延享2年（1745）であり（鳥谷2004）、田儀



第1図 越堂たたら跡周辺の遠景（左：南東から 右：北西から）

櫻井家の名義による操業は明和6年(1769)からとなっている(鳥谷2008)。そのため、明和6年以前から田儀櫻井家が越堂鉦の経営に携わっていた可能性が考えられる(藤原2009)。

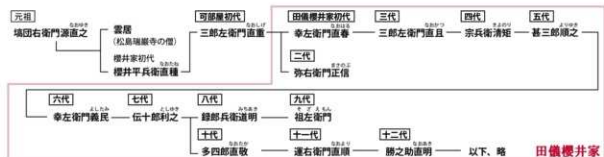
6代目幸左衛門義民の時期には、宮本山内を中心に多くの製鉄業の従事者を抱えていたことが記されている。この頃に幕府の田沼意次が鉄座を設置したため鉄価格が急激に下落したほか、砂鉄や木炭の価格が高騰し、財政面で大きな打撃を受ける。続く7代目伝十郎利之、8代目録郎兵衛道明、そして9代目祖左衛門の時期にも経営が軌道に乗らず、享和3年(1803)に松江藩の管理の下で経営を行う「御主法入」となった。また越堂鉦や日ノ平鉦(大田市山口町)が相次いで火災に見舞われたが、祖左衛門の時期には徐々に経営が上向きになっていたようである。

田儀櫻井家が最盛期を迎えるのは、10代目多四郎直敬および11代目運右衛門直順の時期である。直敬は若くして家業を継ぎ、質素儉約に努めて製鉄業を安定させていった。藩主や役人に宿を提供する御用宿を勤める一方、新たな田畑の開墾など地域の活性化に貢献しており、松江藩から生涯郡役人格を与えられた。直敬は佐田町一窪田にあった智光院を田儀櫻井家の菩提寺として文政4年(1821)に宮本山内に移転勧請したほか、多伎藝神社など寺社への寄進を行った。

11代目運右衛門直順も直敬と同じく質素儉約や田畑の耕作を続けつつ、家業に注力し、製鉄業の発展に大きく貢献した。また、松江藩からは生涯郡役人格のほか、代々郡役人格、生涯名字御免や藩主への御目見えなど手厚い待遇を受ける。幕末の長州戦争では食糧調達や陣宿の手配などを行い、褒章を受けている。直順は嘉永5年(1852)頃に智光院本堂横にある田儀櫻井家の歴代当主の墓地を大幅に改修して整備しており、また智光院や近隣の寺社などに寄進を積極的に行っている。

この時期に沿岸部の越堂鉦は鉄鉄を大量に生産し、文政6年(1823)の産鉄量から見ても田儀櫻井家が経営するなかで幹幹的なたたら場であった(鳥谷2004・2006)。越堂鉦で生産された鉄鉄は、田儀櫻井家の本拠地である宮本鍛冶屋(宮本鍛冶山内遺跡)へと運ばれ割鉄として加工される一方、近接する田儀港(当時の田儀浦)の廻船を利用して販売された(鳥谷2008)。出雲国の各鉄師が飛躍的に増産を遂げる幕末頃の産鉄量の変遷(鳥谷2011)を見ると、田儀櫻井家は主要鉄師のなかで一二を争うほどの産鉄量を誇り、越堂鉦での大量の鉄生産が田儀櫻井家の躍進を後押ししたと考えられる。

12代目勝之助直明は、明治維新による政治体制の変革に伴って多額の寄付を行い、また各地での災害にも援助を行うことで褒章を受けている。その一方で、明治維新後の安価な西洋鉄の流通や洋式高炉の国内での生産によりたたら製鉄は次第に斜陽化したため、生糸改良会社の設立や蚕種製造業、銀行設立など多角的な経営に乗り出すが、成功には至らなかった(渡辺1996)。田儀櫻井家所有のた



第2図 田儀櫻井家の系譜

たら場・鍛冶屋および山林は明治11年(1878)に東京蓬萊社の所有となるが、明治15年(1882)の宮本鍛冶屋での大火に関する記録に越堂鉦が記載されていることから、越堂鉦は少なくとも明治15年までは操業が続いており(藤原2009)、約150年間もの長期間にわたり稼働したことが分かる。

こうした情勢のなか、明治23年に直明はたたら製鉄業を断念して奥田儀の地を去り、田儀櫻井家のたたら製鉄は終焉を迎えることになるが、明治15年以降に越堂鉦がいつ頃まで操業されていたのかは今後の検討すべき課題である⁽²⁾。

2 史跡指定と整備検討委員会

(1) 史跡指定へのあゆみ

田儀櫻井家が奥田儀を去った後は、山内に残った人々は炭焼きや養蚕などを生業に山間部の小さな集落として生活を維持していたが、平成9年(1997)に最後の住人が転出してからは無住の地となった。こうした状況のなか、平成6年(1994)11月にはかつて栄えた宮本の地を活性化させようと奥田儀地区の住民を中心に宮本史跡保存会が組織され、金屋子神社の祭礼の復活や遺跡説明パンフレットの作成、説明板の設置など、宮本鍛冶山内遺跡を中心に保護や活用に積極的に取り組んでいた。こうした活動は、平成24年(2012)年3月に地元を中心とした100名を超える会員により結成された田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会に引き継がれ、史跡の保護活動が実施されている(第3・4図)。

市町村合併前の旧多伎町は、遺跡の価値を明確にするため考古学・歴史学・民俗学・建築学などの研究者からなる調査委員会を組織し、総合的な基礎調査を進めた。その成果は「田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書」として平成16年(2004)年8月に刊行され、その後の調査整備事業の起点となった(第1表)。平成17年(2005)の市町村合併を経て新たな出雲市が誕生したが、旧多伎町が進めてきた遺跡の調査と保存を継承して推進し、基礎調査の成果が近世たたら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として評価され、平成18年(2006)年1月26日に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡が近世たたら製鉄遺跡として全国で2番目となる国史跡に指定された。

(2) 史跡の追加指定

田儀櫻井家に関連する製鉄遺跡の立地や土地利用条件は多種多様で、遺跡群の保存や管理を図るうえで考慮すべき事項を多く含んでいた。そのため、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の価値付けや構成要素



第3図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡内の草刈り



第4図 保存会による宮本鍛冶山内遺跡のガイド

を明確にし、なおかつ将来的に適切な保存や管理を進める基本的な方針を定めることを目的に、平成20年(2008)3月に「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画」(第5図)を策定した。

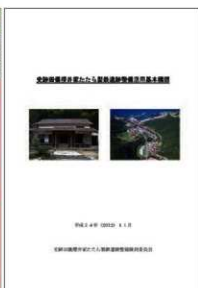
史跡の保存活用管理計画の策定と併行して、越堂たたら跡、聖谷たたら跡などの発掘調査や文献史料の調査に着手し、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—」(平成20年3月刊行)や「田儀櫻井家 たたら史料と文書目録」(平成21年〔2009〕年3月刊行)、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成19～21年度の調査—」(平成22年〔2010〕3月刊行)などに成果がまとめられ、遺跡の歴史的な価値付けを明確にした。これらの調査研究などによる遺跡の歴史的評価の高まりを受け、平成21年2月12日に聖谷たたら跡と越堂たたら跡が国史跡の追加指



第5図 保存管理計画



第6図 総合ガイドブック



第7図 整備基本構想

第1表 史跡指定・計画策定・刊行物などに関する主な出来事

		史跡指定・計画策定・刊行物などに関する主な出来事
平成16年(2004)	8月	田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書 刊行
平成18年(2006)	1月	宮本鍛冶山内遺跡・朝日たたら跡 国史跡指定
平成20年(2008)	3月	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書(平成16～18年度の調査) 刊行
	3月	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画 策定
平成21年(2009)	2月	越堂たたら跡・聖谷たたら跡 国史跡指定(追加)
	3月	田儀櫻井家 たたら史料と文書目録 刊行
平成22年(2010)	1月	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会 設置
	3月	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書(平成19～21年度の調査) 刊行
平成23年(2011)	3月	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡総合ガイドブック 刊行
平成24年(2012)	11月	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想 策定
令和2年(2020)	3月	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ(田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究) 刊行
令和3年(2021)	3月	越堂たたら跡整備基本計画 策定
令和4年(2022)	3月	越堂たたら跡—発掘調査と文献調査・文書目録—(史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ) 刊行

定を受けた。なお、史跡指定により田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は市民にも認知されつつあったが、史跡を含めて広範囲にわたる遺跡群の内容を手軽に知る手段がなかったことを受け、「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡総合ガイドブック」(第6図)を作成した(平成23年[2011]3月刊行)。

(3) 整備検討委員会の設置

国史跡の追加指定によって4つの史跡が東西約10km、南北約8kmの広範囲に点在する状況となった。これにより各史跡を中心に他の遺跡についても調査研究を進めて総合的に評価することで、田儀櫻井家を持つ歴史的価値をより明確にできる機運が高まったといえる。しかしそれと同時に、広域化した史跡の整備・活用を今後どのように進めるのかという新たな課題に直面することになった。

この課題に積極的に取り組むため、出雲市文化財課では「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会」(委員長：坂井秀弥氏)を平成22年1月に設立した。史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会では、保存管理計画の内容に基づいて各史跡を中心に田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の整備や活用を実践するにあたり、その中長期的な計画をまとめて各史跡の整備活用方針を具体的かつ明確に検討し、今後の具体的な整備活用計画をまとめた「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」(第7図)を平成24年11月に策定した。これによって、史跡を中心とした田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の中長期的な整備や活用の方向性と事業計画が明確になり、現在まで整備活用基本構想の計画内容に沿って越堂たたら跡整備などの事業を進めてきた(第8・9図・第2表)。

3 史跡の現状と課題

(1) 整備活用基本構想と史跡のゾーニング

整備活用基本構想では、広域化した史跡の整備・活用を進めるための一つの方策を打ち出した。それが史跡のゾーニングによる調査・整備の中長期的な実施計画である。

史跡のゾーニングでは、各史跡の特徴ごとにエリア分けをして段階的に調査や整備を進めていくという指針を明確にした。具体的には、田儀櫻井家の拠点である宮本鍛冶山内遺跡とその周辺を「中核ゾーン」、沿岸部の越堂たたら跡と交易拠点の田儀浦を含む口田儀のまちなみを「導入ゾーン」、朝日たたら跡など佐田町域周辺に広がる山間部のたたら場などを「佐田ゾーン」として位置づけ、段階的に調査・整備を実施する方針を固めたのである。



第8図 整備内容の検討状況(第15回委員会)



第9図 現地簡易整備の視察状況(第15回委員会)

第2表 整備検討委員会での越堂たたら跡整備に関する主な検討内容（整備活用基本構想策定以降）

開催日程		越堂たたら跡整備に関する主な検討内容
第5回	平成24年(2012)11月2日	導入ゾーン（越堂たたら跡・口田儀まちなみ）整備活用基本計画の検討
第6回	平成25年(2013)12月25日	
第7回	平成26年(2014)8月8日	
第8回	平成27年(2015)2月2日	
第9回	平成27年(2015)8月7日	
第10回	平成28年(2016)2月2日	越堂たたら跡現地簡易整備内容（遺跡説明看板・遺跡名称看板・遺構表示）の検討
第11回	平成28年(2016)9月30日	
第12回	平成29年(2017)1月31日	
第13回	平成29年(2017)9月29日	
第14回	平成30年(2018)2月22日	
第15回	平成30年(2018)9月28日	
第16回	平成31年(2019)2月22日	
第17回	令和元年(2019)9月27日	導入ゾーン整備活用基本方針の検討
第18回	令和2年(2020)2月21日	
第19回	令和2年(2020)9月24日	越堂たたら跡整備基本計画の検討
第20回	令和3年(2021)3月4日	
第21回	令和3年(2021)10月12日	越堂たたら跡現地整備内容（史跡標識・説明プレート）の検討
第22回	令和4年(2022)2月2日	
第23回	令和4年(2022)10月4日	越堂たたら跡現地整備内容(製鉄炉と天秤ふいごの復元製作・現地誘導案内看板・関連文化財看板など)の検討
第24回	令和5年(2023)2月27日	
第25回	令和5年(2023)10月10日	越堂たたら跡ガイドランス施設整備内容の検討
第26回	令和6年(2024)2月26日	

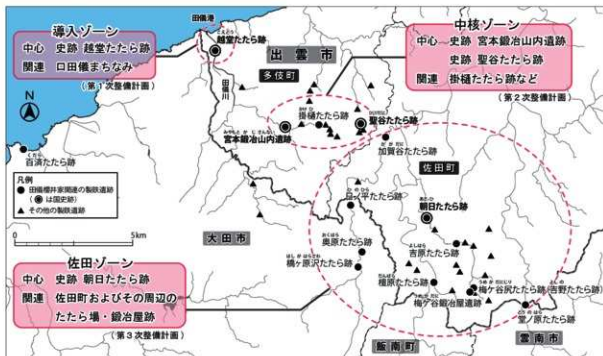
(2) 史跡の現状と課題

整備活用基本構想のなかで史跡のゾーニングをすることで、それぞれの現状と課題が浮き彫りになり、また各ゾーンの構成要素である史跡および遺跡の現状と課題についても確認することができた。なお、整備活用基本構想で明確にした史跡の現状と課題については、平成20年3月策定の保存管理計画で把握した史跡の現状を基礎としてまとめられている。

ここでは、保存管理計画や整備活用基本構想で確認された史跡の現状と課題について、これまでの調査や整備内容を踏まえて整理することで、越堂たたら跡の整備の位置づけを明確にする。

史跡全体の現状と課題

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は東西約10km、南北約8kmの広範囲に4箇所史跡が点在する。また、史跡を含めて現在15箇所で田儀櫻井家のたたら製鉄に関連するたたら場・鍛冶屋跡が確認されており、出雲市域のほか、隣接する大田市域や雲南市域にまで遺跡の範囲が広がっている。



第10図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡のゾーニング

整備活用基本構想では、こうした広域化の課題を踏まえて史跡のゾーニングを行い、計画的に調査や整備をする方針を明確にしている。史跡の現状と課題（第3・4表）について、調査や整備に伴い現地説明会などを積極的に行ってきたため、史跡全体の認知度は向上しているが、個別の史跡の内容や役割については十分に浸透しておらず、個別の史跡の認知度を向上させる必要がある。

また、地元による史跡の保護活動はこれまで継続的に実施されているが、活動の拠点となる場所がないのが現状である。活動拠点を整備して継続的な史跡の保護活動を支援することが求められる。

導入ゾーンの現状と課題

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入ゾーンは、沿岸部の越堂たたら跡と口田儀のまちなみで構成されている。広域に展開する田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかでは、国道9号に隣接してアクセスが容易であり、なおかつ利便性が高い。中核ゾーンや佐田ゾーンはいずれも山間部にあり、その場所へのアクセスが困難であるため、導入ゾーンは史跡全体の導入部として重要な位置づけになる。

こうした現状を踏まえると、史跡全体の導入部として、中核ゾーンの宮本鍛冶山内遺跡や聖谷たたら跡、佐田ゾーンの朝日たたら跡などにスムーズな誘導ができる整備内容が重要な課題となった。

越堂たたら跡の現状と課題

田儀櫻井家の基幹的なたたら場として製鉄経営を支えた沿岸部の越堂たたら跡は、これまでに実施された発掘調査で長期間操業の実態が明らかになり（第5章第1節）、長期間操業の痕跡が反映された製鉄が地下構造の床釣りの土層立体剥ぎ取りを行うなど、遺構の詳細な記録・保存を行っている。

発掘調査で確認した高殿（製鉄炉を覆う建物）の遺構の平面的な位置は、平成30年度（2018）に実施した簡易整備（第5章第2節）で把握できるが、たたら場操業の様子は現地での把握が困難であるほか、長期間操業した実態を示す床釣りの土層立体剥ぎ取りなどを適切に展示できる場所がない。現

第3表 ゾーン別にみた史跡の現状と課題

	現 状	課 題
史跡全体	東西約10km、南北約8kmに4箇所の史跡が点在。史跡全体の認知度はあるが、個別の史跡の認知度は低い。地元史跡保護活動などを支援する拠点が無い。	広域的な史跡のなかで計画的な調査・整備が必要。個別の史跡の認知度を向上させ、地元史跡保護活動の拠点となる施設が必要。
導入ゾーン	沿岸部に立地。国道9号に近くアクセスが容易。越堂たたら跡（史跡）・口田儀まちなみで構成。	史跡の導入部として、山間部の史跡などへ誘導する役割を果たすことができる整備が必要。
中核ゾーン	山間部に立地。アクセスが困難。宮本鍛冶山内遺跡（史跡）・聖谷たたら跡（史跡）および掛桶たたら跡で構成。	景観の保全や遺構の保存を図りつつ、史跡への案内ができる整備を検討。
佐田ゾーン	山間部に立地。アクセスが困難。朝日たたら跡（史跡）のほか、登ノ原たたら跡など佐田町域周辺所在の複数のたたら場・鍛冶場跡で構成。	景観の保全や遺構の保存を図りつつ、史跡への案内ができる整備を検討。

第4表 史跡および遺跡別の現状と課題

		現 状	課 題	
導入ゾーン	越堂たたら跡（史跡）	立地条件	国道9号沿いに立地。史跡指定地内の高殿付近は公有地だが周辺は民有地が多い。	必要に応じて史跡指定地内の公有地化を検討。
		遺構状況	高殿内部の遺構や製鉄炉の床釣りが残存。山内の形成初期や金屋子神社の実態が不明。	山内の形成初期や金屋子神社の調査を検討。
		整備状況	現地で簡易整備（遺跡説明看板・遺跡名称看板・遺構表示）を実施。たたら場操業の様子は現地で把握が困難。長期間操業を示す遺構の展示場所がない。	たたら場操業の様子が分かる現地整備が必要。長期間操業を示す遺構の展示施設が必要。
	口田儀まちなみ	立地条件	国道9号沿いに立地。越堂たたら跡に近接。	近世の面影を残す景観の保全に地元や関係機関の協力を得るほか、保護が必要な文化財は登録有形文化財として登録などの措置を検討。
		遺構状況	近世の徳船問屋の垣敷地、海や川に通じる小路、波除けの石垣などが残存。	口田儀まちなみへの案内板や説明板などの設置を検討。
		整備状況	整備は未実施。	
中核ゾーン	宮本鍛冶山内遺跡（史跡）	立地条件	史跡指定地の大半が民有地。	遺構の保存に必要な部分は公有地化を検討。
		遺構状況	製鉄関連遺構や生活関連遺構、信仰関連遺構など山内全体の遺構が良好な状態で残存。鍛冶場の変遷など未解明の部分がある。	鍛冶場の変遷など未解明部分の調査を検討。
		整備状況	金屋子神社や智光院、田儀櫻井家墓場などの保存修理を実施。現地で鍛冶場跡などの様子が確認できない。	金屋子神社や智光院など現存する建造物の維持管理方法を検討。鍛冶場跡などの現地整備を検討。
	聖谷たたら跡（史跡）	土地条件	史跡指定地は国有地（国有林地）内に所在。	景観の保全や遺構の保存が適切になされるように地元や関係機関と調整。
		遺構状況	製鉄炉の床釣りが残存。山内石垣や4代目当主宗兵衛清矩が造立した地蔵の石籠が残存。	
		整備状況	整備は未実施。	史跡への案内板や説明板などの設置を検討。
掛桶たたら跡	土地条件	遺跡は民有地（企業有地）内に所在。宮本鍛冶山内遺跡に近接。	景観の保全や遺構の保存が適切になされるように地元や関係機関と調整。	
	遺構状況	製鉄炉の床釣りが残存。		
	整備状況	整備は未実施。	遺跡への案内板や説明板などの設置を検討。	
佐田ゾーン	朝日たたら跡（史跡）	立地条件	史跡指定地全域が公有地。	史跡指定範囲の拡大など必要に応じて公有地化を検討。
		遺構状況	高殿内部の遺構や製鉄炉の床釣りが残存。たたら場の操業時期を確定する資料が希少。山内の遺構の残存状況は不明。	たたら場の操業時期や山内の遺構の残存状況を把握するための調査を検討。
		整備状況	高殿全体を覆う展示棟を設けて製鉄炉の床釣りの状況を露出展示。露出展示でカビの繁殖が認められる。	カビの繁殖を抑える遺構保護の措置や展示方法の改善などを検討。
	佐田町域周辺のたたら場・鍛冶場跡	立地条件	多くの遺跡が民有地内に所在。	景観の保全や遺構の保護が適切になされるように地元や関係機関と調整。
遺構状況		各遺跡の分布調査などで山内の石垣や石列、金屋子神社や墓場などを確認。製鉄炉の床釣りなどの遺構の残存状況は不明。	必要に応じて製鉄炉の床釣りなどの遺構の残存状況を把握するための調査を検討。	
整備状況	整備は未実施。	各遺跡への案内板や説明板などの設置を検討。		

地でたたら場操業の様子を実際に見学できる整備や、長期間操業を示す遺構（床釣り土層立体剥ぎ取り）の展示場所を設けることが越堂たたら跡の整備の課題となった。

（3）越堂たたら跡の整備の位置づけと方向性

越堂たたら跡の現地整備は、たたら場操業の様子を現地で見学できる整備を行うことで、沿岸部で操業されて田儀櫻井家の製鉄経営に重要な役割を果たした越堂鉦の理解を深めることができる。

また越堂たたら跡の調査成果とともに、山間部の史跡を紹介できる機能を持つ施設を越堂たたら跡周辺に設けることで山間部の史跡の見学が促進され、地元の史跡保護活動の拠点としての活用も見込まれる。これらの点を総合すると、越堂たたら跡周辺にガイダンス施設を設置することで、越堂たたら跡や導入ゾーン、そして史跡全体が持つ課題を克服することが可能になると考えられる。

註

- （1）可部屋は製鉄業を開始した櫻井家の屋号であり、田儀櫻井家は9代目当主祖左衛門から屋号を可部屋から宮本屋に改めた（鳥谷2004）。なお、櫻井家の祖は大坂夏の陣で活躍した塙田右衛門直之といわれている。
- （2）『訂正増補 田儀村沿革史』（河上1928）には、田儀櫻井家が製鉄経営から手を引いた後も明治30年（1897）まで操業が行われたことが記されている。

参考文献

河上昌敏 1928 『訂正増補 田儀村沿革史』

鳥谷智文 2004 「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会 19～38頁

鳥谷智文 2006 「近世後期松江藩における鉄師の基礎的考察」『島根史学会会報』第43・44合併号 島根史学会 30～50頁

鳥谷智文 2008 「掛樋・越堂・聖谷たたら文献調査」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—』出雲市の文化財報告1 出雲市教育委員会 106～111頁

鳥谷智文 2011 「近世後期における出雲の鉄師」『たたら製鉄と近代の幕開け』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録 島根県立古代出雲歴史博物館 56～57頁

藤原雄高 2009 「田儀櫻井家の鉦・鍛冶屋の変遷」『田儀櫻井家 たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8 出雲市教育委員会 101～113頁

山崎一郎 2008 「松江藩領神門部における田儀櫻井家の鉄山経営—十七世紀後期～十八世紀前期を中心に—」『たたら製鉄・石見鉦山と地域社会 近世近代の中国地方』清文堂 29～51頁

渡辺勝治 1996 『田儀櫻井家年代記』自費出版

第2節 事業の経過

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、平成15年度(2003)から調査や整備を実施している。ここでは、越堂たたら跡の整備活用事業の経過を整理する(第5表)。また、平成24年(2012)11月に策定した整備活用基本構想以降の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備事業全体の事業内容を第6表にまとめた。なお、越堂たたら跡の史跡指定範囲は第11図に示している。

(1) 平成24～27年度

平成24年11月に策定した整備活用基本構想において、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかで越堂たたら跡を含む導入ゾーンから整備に着手する方針を固めている。そのため、平成24年度から整備検討委員会で導入ゾーンの整備活用基本計画の検討を進めた。

(2) 平成28・29年度

平成29年度(2017)の越堂たたら跡発掘調査の完了段階では、整備計画が本格的に具体化するのには数年先となる計画であったため、本格的な整備開始前に越堂たたら跡の現地を簡易的に整備して見学者に対応する必要があり、現地の簡易整備の内容について整備検討委員会のなかで検討を進めた。

(3) 平成30年度・令和元年度

平成30年度(2018)は、越堂たたら跡の現地の簡易整備を実施した。発掘調査で確認した本床や小舟、湯溜まり状遺構のほか、高殿内の砂鉄置場や炭置場の位置をレンガで表示し、床釣りの掘形や押立柱は石材や木材で表現した(第5章第2節)。また遺跡説明看板や遺構説明看板の内容を整備検討委員会で検討するとともに、出雲市内の中学校の社会科教員から意見や助言を得た。

令和元年度は、越堂たたら跡現地の簡易整備状況を踏まえて本格的な整備の方針の提示を目的に「導入ゾーン整備活用基本方針」を令和2年(2020)2月に策定した。また、越堂たたら跡の現地が国道9号および歩道の地盤面から約2m低いため、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会が中心となり遺跡名称看板(高さ約3.5m)を設置し、国道9号側からの越堂たたら跡現地の視認性を向上させた。

(4) 令和2年度

令和2年度は導入ゾーン整備活用基本方針の内容に沿い、越堂たたら跡の製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を中心とした現地整備、および調査成果を中心に紹介するガイダンス施設を史跡指定範囲隣接地(第12図)に整備する計画を整備検討委員会で検討した。そして「越堂たたら跡整備基本計画」

第5表 越堂たたら跡の主な整備内容一覧

年 月 日	主な事項
平成30年度(2018)	遺構表示の実施・遺跡説明看板の設置 発掘調査成果解説パンフレット作成
令和元年度(2019)	遺跡名称看板の設置
令和2年度(2020)	地盤整備(高殿南側) 整備基本計画策定・整備基本計画書作成
令和3年度(2021)	史跡標識・説明プレートの設置 地盤整備(高殿内)
令和4年度(2022)	製鉄炉および天秤ふいご復元製作・透明プレート・関連文化財説明看板・現地誘導看板の設置 ガイダンス施設整備等実施設計
令和5年度(2023)	ガイダンス施設建物の建築・電気設備・機械設備工事および地盤整備・側溝整備・芝張り等設置・看板設置工事・展示製作施工 ガイダンス施設案内パンフレット作成・整備事業報告書作成

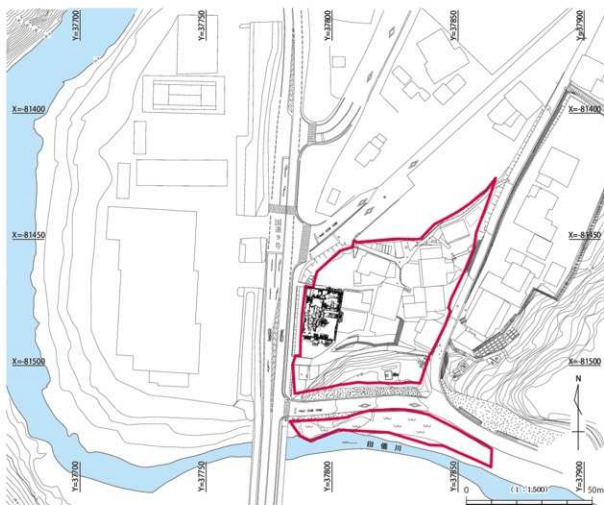
(5) 令和3年度

令和3年度には整備基本計画書をもとに、地元の協力を得ながら多伎地域自治協会連合自治会や田儀地区越堂自治会を対象に説明会を実施した。現地整備は、国指定史跡の名称や指定日などを表示する史跡標識と製鉄炉および天秤ふいご復元の概要を示した説明プレートの設置を行ったほか、高殿内の地表面を真砂土舗装した。

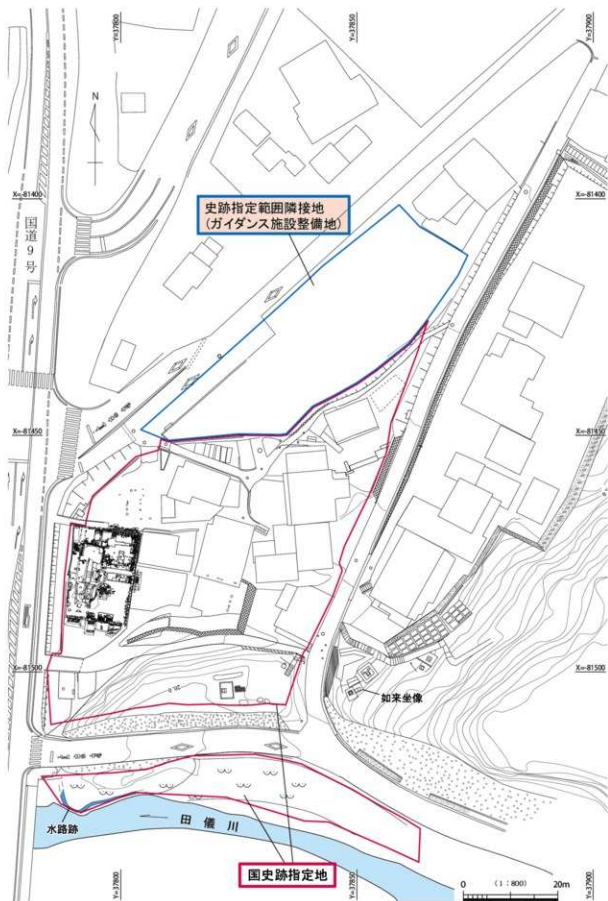
現地整備の製鉄炉と天秤ふいごの復元は、発掘調査の成果や越堂鉦と同じ「海のたたら」である石見地方の備谷鉦(江津市)の調査記録をもとに設計図面の作成を進めた。また同時に、令和5年度(2023)のガイダンス施設の整備を見据えて実施設計に係る準備資料を作成・整理した。

(6) 令和4年度

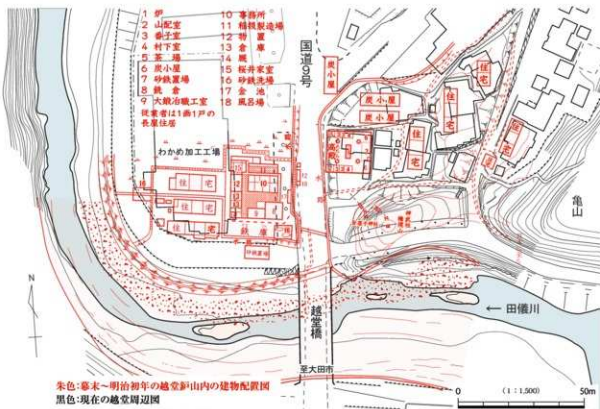
令和4年度(2022)は、越堂たたら跡の現地に製鉄炉と天秤ふいごを復元した。また、プレート越しに見ると製鉄炉と天秤ふいごの操業の様子が分かる復元イラスト透過式看板を作成した。その他、越堂たたら跡の関連文化財説明看板を作成し、ガイダンス施設から越堂たたら跡現地、周辺の関連文化財に誘導する現地誘導看板を設置した。また、ガイダンス施設の展示内容やパンフレットなどに活用するため、『田儀村誌』(渡辺ほか編1961)掲載の幕末から明治初年の越堂鉦山内建物配置図(第13図)をもとに山内景観や田儀港の復元イラストを作成した⁽¹⁾(第14～16図)。なお、現地整備状況



第11図 越堂たたら跡の史跡指定範囲



第12図 越堂たたら跡の史跡指定範囲と隣接地



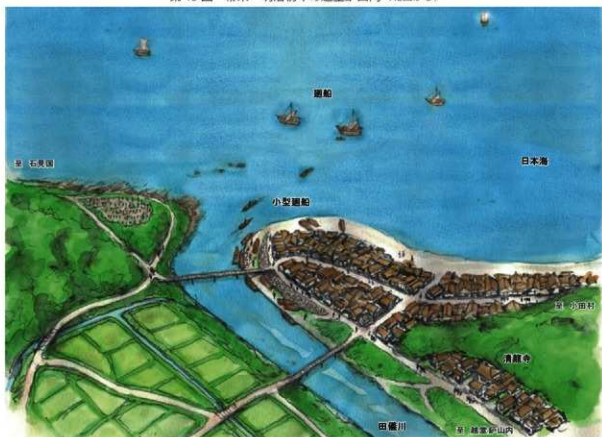
第13図 『田儀村誌』掲載の越堂鉱山内建物配置図



第14図 幕末～明治初年の越堂鉱山内と田儀港 (南東から)



第15図 幕末～明治初年の越堂鉦山内（北西から）



第16図 幕末～明治初年の田儀港（南から）



第17図 現地整備見学会の状況

の記録は、3次元レーザー測量を実施した。

ガイダンス施設の整備については、施設整備の実施設計を進めたほか、ガイダンス施設の展示内容についても整備検討委員会で検討を重ねた。

(7) 令和5年度

令和5年度は、現地整備が令和4年度3月に完成したことを受け、一般の方々および地元の多伎町内の住民を対象とした現地整備見学会を令和5年6月18日に開催し、50名の参加があった(第17図)。

その後、関係各所との調整を行いながらガイダンス施設整備を進め、建築工事や電気設備・機械設備工事などを実施したほか、ガイダンス施設を地元の史跡保護活動や地域の歴史学習の拠点として活用しやすいように用地内の地盤整備や側溝整備工事などを行った。なお、見学者を越堂たたら跡の現地やガイダンス施設にスムーズに誘導するため、国道9号沿いに視認用史跡名称看板を設置し、施設周辺には案内看板を配置した。

また建築工事を進めるとともに建物内部の展示計画を具体化し、展示の中心となる床釣りの土層立体剥ぎ取りの製作や高殿内部・床釣り模型および展示パネルなどの製作、地元ゆかりの品を含めた展示品などの準備を進めた。

整備が完了した後は、越堂たたら跡全体の空中写真撮影や整備後の測量を行ったほか、これまでの越堂たたら跡の整備内容をまとめた整備事業報告書を作成した。

注

(1) 復元イラストの作成は杉原幹雄氏(有限会社地域未来)、内容の監修は角田徳幸氏に依頼した。

参考文献

出雲市 2021『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡 越堂たたら跡整備基本計画書』
波辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

越堂たたら跡は鳥根県東部地域のなかでも西寄りに位置する出雲市多伎町口田儀に所在し、周辺には田儀櫻井家が営んだたたら場跡や鍛冶場跡が数多く存在する。これらの遺跡は出雲市多伎町や佐田町のほか、隣接する雲南市域や大田市域にまで広がって分布しており、田儀櫻井家の製鉄経営が広域にわたり展開していたことを示している。

多伎町の山系は南北に走り、東から西に向かうにつれて急峻となり、沿岸部近くまで迫っている。この山系に沿って田儀川、小田川、久村川が日本海に注ぐ。越堂たたら跡は現在の田儀港付近に注ぐ田儀川流域にあり、港から直線距離にして約700m程度の場所に立地する。また田儀川およびその支流の宮本川を通じて宮本鍛冶山内遺跡とつながっている。田儀港は田儀櫻井家のたたら製鉄において製鉄の原材料の調達や鉄素材および鉄製品などの搬出を担う流通の要であり、田儀川は田儀港への物資の輸送経路として重要な位置を占める河川であった。

佐田町は中国山地の脊梁部と日本海沿岸部との間に位置し、標高約400mから600mの山間部で、神戸川の中流域にあたる。神戸川は佐田町に接する飯石郡飯南町を起点とし、三瓶山の西麓を流れて出雲平野に至り、日本海に注いでいる。三瓶山は約10万年前からこれまでに7回程度の噴火が確認されており、そのうち縄文時代における2回の噴火で発生した大量の火砕物や洪水によって神戸川を下り、扇状地を急激に発達させて三角州が肥大し、現在の出雲平野を生み出したと考えられる(中村2006a・2006b)。製鉄遺跡は、山間部にある段丘や谷底の氾濫原などのわずかな平地地を利用して展開しているが、付近には製鉄の原材料となる木炭の生産や鉄穴流しによる砂鉄採取のための各資源が豊富に存在し、たたら場を営むための好条件を備えていたと考えられる。

大田市域東部には、三瓶山から流れる三瓶川や大原川が日本海に注ぐ河口に広がる沖積平野が存在する。沖積平野には汽水湖の波根湖が広がっていたが、中世から干拓と新田開発が進められ、昭和26年(1951)に干拓が完了して農地化している。こうした河川や、かつての波根湖に挟まれるように鳥井丘陵などの比較的低い丘陵が存在しており、海岸や河川と平野部、そして丘陵が一体となった地勢に恵まれた地域であった。なお、海岸沿いには田儀櫻井家が経営に携わった時期があるたたら場跡の百済たたら跡が存在しており、近接する現在の久手港との関連が推測される。

参考文献

- 中村唯史 2006a 「神戸川デルタの地形発達」『鳥根県立三瓶自然館研究報告』第4号 鳥根県立三瓶自然館 25～29頁
- 中村唯史 2006b 「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第45巻第5号 日本第四紀学会 407～420頁

第2節 歴史的環境

ここでは越堂たたら跡を中心とした田儀櫻井家たたら製鉄遺跡が展開する出雲市多伎町、佐田町および大田市域東部の歴史的環境を概観する。なお本文中の番号は第18・19図の遺跡番号に対応する。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、多伎町内の日本海沿岸付近にある砂原遺跡(25)で石器の発見が報告されている(松藤編2013)。近接する砂原I遺跡(26)では、約5万年前の三瓶火山から噴出した三瓶雲南テフラと三瓶池田テフラの可能性のある火山灰層、そして約3万年前から2万8千年前の南九州の始良カルデラに由来する始良Tn火山灰層が確認された(今岡・勝部2010編)。

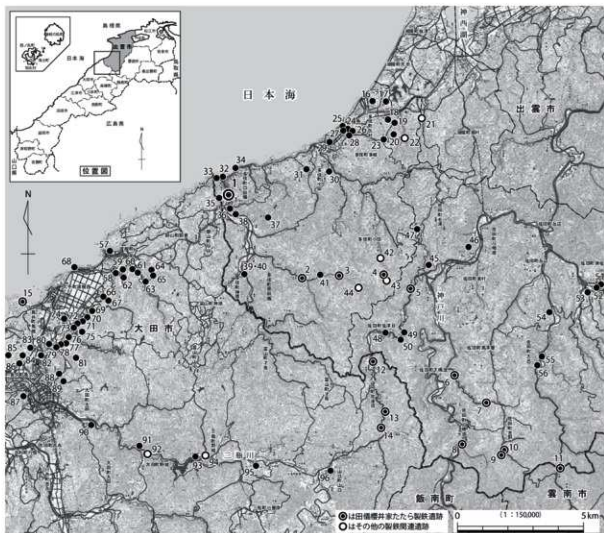
縄文時代の草創期から早期の遺跡は多くないが、多伎町内の菅沢遺跡(31)周辺の菅沢地区で尖頭器が採取され(松尾編2004)、大田市域東部の中尾H遺跡(78)や三瓶川中流域の引ノ子遺跡(92)でも尖頭器が出土している(遠藤編1989、是田編2017)。また菅沢地区では、黒曜石製の石鎌や搔器、磨製石斧なども採取されており(松尾編2004)、山間部の屋形遺跡(多伎町、41)でも黒曜石製の石鎌や剥片が確認されている(阿部・江角編2004)。前期から中期の遺跡も総じて少なく、中尾H遺跡や檀原遺跡(佐田町、8)などで土器が出土した程度にとどまる(角田・宮本編1997、内田編2013b)。

後期になると各地で遺跡数が増加し、この地域での人々の活動が活発になる。多伎町・佐田町内では菅沢遺跡のほか、朝日遺跡(6)や塚脇遺跡(51)、茶屋谷遺跡(55)などで後期初頭から中葉にかけての土器や石器が確認されている(杉原ほか編1983、田中編1998・2001、内田編2013a)。なお、茶屋谷遺跡では数基の土坑が見つかっており、周辺に集落が存在した可能性が高い。一方、大田市域東部の波根川流域では、中灘遺跡(57)、波根川遺跡(61)、高原遺跡(63)などでこの時期に比定できる土器や石器が確認できる(大國ほか編2005、渡辺・糸川2012、内田編2013b、林ほか編2015、是田編2017)。同じく大田市域東部の江谷川や支流の市井谷川流域周辺にも遺跡が展開し、荒瀬遺跡(73)、門遺跡(76)、市井深田遺跡(77)、中尾H遺跡などで遺物が出土した(内田編2013b、是田編2014・2017、林編2016)。なかでも中尾H遺跡からは後期初頭から前葉の土器や石器が大量に出土し、また数箇所の礫群とともに大型石棒や線刻石などの特殊な遺物も確認されるなど、この地域の中核を担う拠点的な集落であったことが予想される。そのほか三瓶川流域でも遺跡が確認され、中流域の夏焼遺跡(大田市、91)では後期初頭の土器や石器などが採取されている(遠藤編1989)。

晩期には確認できる遺跡が減少し、三瓶川上流域の神田遺跡(大田市、96)、佐田町内の塚脇遺跡などで晩期中葉から後葉にかけての土器が数点確認できるにとどまる(田中編1998、大國・中田編1999)。その他、下流域付近の丘陵上に所在する御堂谷遺跡(大田市、84)では時期不明の落とし穴が存在し(仁木ほか編2019)、この地が狩猟の場として利用されていたことが分かる。

弥生時代

弥生時代には本格的な水稲農耕へと生業の中心が移っていくが、縄文時代晩期に引き続き、弥生時代前期から中期にかけては確認できる遺跡数が少ない。多伎町内では矢谷遺跡(18)から前期後半の土器が出土しており、器面に靱の圧痕が付着している(松尾編2004)。大田市域東部の平野部の栗林



- | | | | |
|-----------------|---------------|---------------|--------------|
| 1 越堂たたら跡 | 25 砂原遺跡 | 49 下佐津目銅山精錬所跡 | 73 荒横遺跡 |
| 2 宮本鍛冶山内遺跡 | 26 砂原I遺跡 | 50 三味崎坑銅山精錬所跡 | 74 竹原古墳 |
| 3 掛種たたら跡 | 27 砂原古墳 | 51 塚脇遺跡 | 75 岩山城跡 |
| 4 聖谷たたら跡 | 28 後谷横穴墓群 | 52 尾崎横穴墓群 | 76 門遺跡 |
| 5 加賀谷たたら跡・鍛冶屋跡 | 29 小田古墳 | 53 塚山古墳群 | 77 市井深田遺跡 |
| 6 朝日遺跡・朝日たたら跡 | 30 富士ヶ城跡 | 54 八幡古墳 | 78 中尾H遺跡 |
| 7 吉原たたら跡・鍛冶屋跡 | 31 菅沢遺跡 | 55 茶屋谷遺跡 | 79 奥市井遺跡 |
| 8 檀原遺跡・檀原たたら跡 | 32 □田儀番所跡 | 56 坂本古墳 | 80 諸友大師山横穴墓群 |
| 9 梅ヶ谷鍛冶屋跡 | 33 □田儀台場跡(1) | 57 東瀬遺跡 | 81 段山城跡 |
| 10 梅ヶ谷尻たたら跡 | 34 □田儀台場跡(2) | 58 松田谷横穴墓群 | 82 栗林B遺跡 |
| 11 堂ノ原たたら跡・鍛冶屋跡 | 35 鶴ヶ城跡 | 59 天王平庚寺跡 | 83 尾ノ上遺跡 |
| 12 日ノ平たたら跡 | 36 経塚山古墳群 | 60 上川内遺跡 | 84 都賀谷遺跡 |
| 13 奥原たたら跡 | 37 妻害山城跡 | 61 波根川遺跡 | 85 鳥井南遺跡 |
| 14 橋ヶ原沢たたら跡 | 38 経塚山横穴墓群 | 62 西池洞穴 | 86 半明遺跡 |
| 15 百済たたら跡 | 39 原の古墳 | 63 高原遺跡 | 87 鶴山遺跡 |
| 16 正南横穴墓群 | 40 三嶋家墓地 | 64 旭山城跡 | 88 城山古墳 |
| 17 雲州久邑長沢塚跡 | 41 屋形遺跡 | 65 旭山遺跡 | 89 松山城跡 |
| 18 矢谷遺跡 | 42 茗ヶ原奥たたら跡 | 66 大西大師山遺跡 | 90 立花横穴墓群 |
| 19 久村鉦山跡採鉦場 | 43 聖谷奥I遺跡 | 67 大西大師山横穴墓群 | 91 夏焼遺跡 |
| 20 久村鉦山跡採鉦場 | 44 屋敷谷たたら跡 | 68 鶴走城跡 | 92 引ノ子遺跡 |
| 21 姉谷鉦山跡 | 45 伊秩城跡 | 69 鈴見B遺跡 | 93 灰取遺跡 |
| 22 赤松鉄穴 | 46 吉栗山城跡 | 70 神谷遺跡 | 94 久谷たたら跡 |
| 23 華蔵寺 | 47 鋸山朝山跡 | 71 涼見E遺跡 | 95 下多根遺跡 |
| 24 砂原小山横穴墓群 | 48 中佐津目銅山精錬所跡 | 72 城ヶ谷遺跡 | 96 神田遺跡 |

第18図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺主要遺跡位置図

B遺跡(82)では、2条の自然流路内で前期前半の土器や石器がまとめて出土したほか、同時期頃の環状杭列も見つかっており、また包含層中からは3箇所の穿孔を持つ板状木材が確認された(矢部編2016)。前期後半には丘陵部の御堂谷遺跡で多くの遺物が出土し、この時期に高地性の集落が存在した可能性がある(仁木ほか編2019)。同じ丘陵上の尾ノ上遺跡(83)では前期後葉から後期中葉頃の大溝が確認され(大庭編2019)、御堂谷遺跡との関連が注目される。三瓶川下流域の丘陵部の鶴山遺跡(大田市、87)でも前期後葉から中期の遺物が出土している(大國編1982b)。

また御堂谷遺跡では、中期後半から後期前半頃に竪穴建物跡や加工段が多数存在し、断続的ながらも集落が存続した様子が分かる(仁木ほか編2019)。同じ丘陵上には、同時期頃の竪穴住居跡や段状遺構が数多く見つかった鳥井南遺跡(大田市、85)があり、環濠の可能性がある大溝も確認されているため(大國ほか編2018、野島編2018)、かなりの規模の集落が存在したと思われる。中期後半以降には東灘遺跡、高原遺跡、荒瀬遺跡など大田市域東部の各地で一定量の遺物の出土が確認され(大國ほか編2005、内田編2013b、是田編2014)、周辺に複数の集落が展開したことを想起させる。

古墳時代

古墳時代に入ると各地で古墳が造営されるが、この地域では前期から中期の古墳はあまり多くはない。多伎町内では経塚山古墳群(36)が古くから知られ、昭和26年(1951)に行われた方墳の発掘調査では、竪穴式石室の様相を呈した箱式石棺が確認され、滑石製の勾玉や管玉などの副葬品が出土している(松尾編2004)。佐田町内では6基の箱式石棺が確認された塚松山古墳群(53)から鉄剣などが出土した(田中ほか編1987)。大田市域東部の竹原古墳(74)がこの頃に比定される可能性が高く、葎石が存在している(近藤編1975、大國1980)。また、竹原古墳に近接する涼見E遺跡(大田市、71)では、葎石の存在が想定される2基の方墳が見つかっており(久保田ほか編2016)、この地域でも連綿と古墳が造営されていたことを示唆する。

後期になると、古墳や横穴墓が各地で築かれるようになる。多伎町内では横穴式石室を持つ原の古墳(39)が後期の古墳として知られるほか、箱式石棺もしくは横穴式石室が造られていたとみられる砂原古墳(27)や、実態が不明な小田古墳(29)なども存在する(松尾編2004)。佐田町内では玄室と羨道の区別がない無袖式の横穴式石室の八幡古墳(54)や、終末期に比定できる須恵器が出土した坂本古墳(56)などが確認できる(田中編1989)。大田市域東部では、横穴式石室を持つ城山古墳(88)が確認されている(大國・稲田編1984)。古墳に比べて横穴墓は数多く築かれており、多伎町内には須恵器が出土した砂原小山横穴墓群(24)をはじめ、正南横穴墓群(16)、後谷横穴墓群(28)、経塚山横穴墓群(38)が知られる(松尾編2004)。佐田町内にも、16基以上が群集し、出雲東部の石棺式石室から派生した意字型横穴墓に類する横穴墓や、出雲西部に多い天井部に肋骨状加工痕のある横穴墓を持つ尾崎横穴墓群(52)などが認められる(田中編1988a)。大田市域東部には横穴墓群が密集しており、合計で4支群16基が確認された諸友大師山横穴墓群(80)、耳環や勾玉、石製紡錘車などが出土した松田谷横穴墓群(58)、切妻整正家形の天井部を持つ大型の横穴墓である西迫横穴(62)などが古くから知られている(近藤編1975、大國1980、大國編1982a・1983、仁木ほか編2019)。その他、20基近くの横穴墓の存在が推定されている大西大師山横穴墓群(67)や、同じ丘陵上で合計

19基が確認された大西大師山遺跡(66)では同様に耳環や管玉、切子玉などが出土している(蓮岡1968、宮本編2016、林・秦編2017)。一方で、三瓶川下中流域にも横穴墓の造営が確認できる。立花横穴墓群(90)は6基以上存在したとされ、頭椎大刀や水晶切子玉などが出土した(遠藤編1989など)。

古墳時代では前期の集落の様子が分かる遺跡は少ないが、大田市域東部において上川内遺跡(60)とその周辺で遺物が確認され(大國編1981)、近接する高原遺跡では前期の土器が多量に出土していることから(内田編2013b)、この周辺にはある程度の規模を持つ集落が存在したと考えられる。中期から後期にかけては集落跡を示す資料が増加する。大田市域東部では、門遺跡や高原遺跡、中尾H遺跡などで土器がまとまって出土した(内田編2013b、林ほか編2015、林編2016)。市井深田遺跡や城ヶ谷遺跡(大田市、72)、御堂谷遺跡、烏井南遺跡などでは竪穴住居跡や加工段などが複数見つかるとともに造り付け竈が確認され、石見地方沿岸部で卓越する土製土脚や移動式竈などとあわせ、当時の生活様式を具体的に知ることができる(星田編2014、久保田ほか編2016、野島編2018、仁木ほか編2019)。また烏井南遺跡では、巨石に伴う祭祀遺構や水辺の祭祀遺構とみられる配石施設のほか、土製模造品などの祭祀関連遺物が大量に見つかり(大國ほか編2018)、この時期の集落における祭祀の様相を具体的に示している。一方で、三瓶川上流域にも中期から後期の集落が存在する。下多根遺跡(大田市、95)や神田遺跡では竪穴建物跡や掘立柱建物跡が確認され、一部には造り付け竈が伴う(大國・中田編1999)。この時期になると生産遺跡も確認され、神谷遺跡(大田市、70)では石見地方で初となる古墳時代終末期から奈良時代の横口付き炭窯が見つかり、鈴見B遺跡(69)では鍛冶炉の可能性のある焼土面や羽口などの鍛冶関連遺物が出土した(久保田ほか編2015・2016)。

奈良・平安時代

奈良時代には律令国家の成立に伴って各地に国・郡制が整備される。733年に奏上された『出雲国風土記』および平安時代に成立した『倭名類聚抄』などによると、出雲国には9つの郡と61の郷、石見国には6つの郡と37の郷があり、多伎町は神門郡多伎郷、佐田町は神門郡余戸里(のちに伊秩郷)と飯石郡須佐郷として登場し、大田市域東部は安濃郡、波瀾郡と刺鹿郡に比定される。この地域は出雲国と石見国の境界に位置し、古代山陰道の一部で出雲国府から石見国府へとつながる正西道が通る交通の要衝であった。多伎町内や大田市域東部でこれらに関する直接的な資料は確認されていないが、菅沢遺跡では古代まで遡る可能性のある道路状遺構が見つかり、当時の驛路や伝路などの可能性も想定できる(内田編2013a)。また、海産物を貢納する際の荷札と推定される木簡が中尾H遺跡から出土しており(内田編2013b)、近隣に波瀾驛家や官衙などが存在したことが分かる。

古代寺院跡についてはこの地域ではあまり確認されていないものの、大田市域東部では奈良時代前期とされる天王平廃寺跡(59)が古くから知られ、塔や金堂を有する寺院であったことが確認されている(近藤編1975、大國1980)。また近隣の高原遺跡では、古代の平瓦や写経に関するものと推測できる木簡が少量出土しており、天王平廃寺跡との関係がうかがえる(内田編2013b、林ほか編2015)。また多伎町の華蔵寺(23)は奈良時代に開かれた天台宗の古刹であり、平安時代中後期の作とされる毘沙門天立像が安置されている(松尾編2004、『久村の歴史』編集委員会編2011)。

この時期の集落跡では、市井深田遺跡で確認された多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が目される

(是田編 2014)。これらの遺構は古墳時代後期から平安時代前期にかけて連続と存続した集落の存在を示しており、周辺では門遺跡や荒横遺跡などでこの時期の遺構や遺物が見つまっているため(内田編 2013b、是田編 2014)、市井深田遺跡を中心に複数の集落が展開していた可能性が高い。また半明遺跡(大田市、86)では平安時代の灌漑水路のほか、平安時代から鎌倉時代初期にかけての鋳鉄製犁先が見つかっており(角田ほか編 2021)、当時の農業生産の様相が分かる。

中世

鎌倉時代の初め頃は朝山氏が出雲平野で勢力を挙げたが、出雲国守護の佐々木氏(のちの塩治氏)が次第に勢力を拡大した。室町時代から戦国時代には尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防が出雲国周辺で繰り広げられ、各地で山城や砦が築かれた。特に出雲国と石見国の国境に位置する多伎町内では多くの山城跡が知られており、尼子氏の配下であったとされる小田氏の居城であった富士ヶ城跡(30)、大内氏が築いて後に尼子氏に攻め落とされたといわれる要害山城跡(37)、尼子氏が西方の防御を固めるために築造した鶴ヶ城跡(35)が著名である(松尾編 2004)。鶴ヶ城は最終的に毛利氏に攻め落とされるが、尼子氏の出雲国西端の守りの要として、それまでの大内氏や毛利氏による侵攻を防いだ。また、佐田町内にも山城跡が多く確認されている。室町時代に足利尊氏の命によって佐々木氏が築城した吉栗山城跡(46)や、山名宗全の家臣であった井筒氏が因幡国から移り地名の伊秩を姓としたとされる伊秩氏の居城で、毛利氏支配下では出雲国の城督の一つであった伊秩城跡(45)などが知られる(田中編 1988b)。石見国の東端部である大田市域東部でも旭山城跡(64)や岩山城跡(75)、段山城跡(81)など多くの山城跡が知られる一方、沿岸部に近接して築かれた水軍の城郭であった鰐走城跡(68)も存在する(錦田編 1997)。鰐走城跡のほか現在の太田市街地を一望できる丘陵部に築かれた松山城跡(89)は、尼子氏の軍事戦略のなかで重要な位置を占めたと考えられる(錦田編 1997)。

この時期の明確な集落跡は確認されていないが、柵列状遺構や段状遺構などが見つかった奥市井遺跡(大田市、79)は集落跡の一部の可能性が考えられる(矢部編 2018)。また、荒横遺跡では木棺墓と考えられる遺構が確認され(是田編 2014)、周辺に墓域が展開したことが予想される。その他、旭山城跡に近接する旭山遺跡(大田市、65)では、陶磁器などのほか中世末に遡るとみられる礎石建物跡が確認され(林編 2016)、この地にかつて寺院が存在したと考えられる。周辺の高原遺跡でも中近世の掘立柱建物跡や石塔の基壇などが見つかっており(是田編 2017)、その関連性が注目される。

中世期には山間部で銅山開発が進み、佐田町内には銀山谷銅山跡(47)などが知られている。この時期には多くの銅山が開かれて昭和年代まで断続的に営まれ、精錬所も三味線坑銅山精錬所跡(50)、下佐津目銅山精錬所跡(49)、中佐津目銅山精錬所跡(48)などが確認されている(田中編 1988b)。銅山開発では、多伎町出身の銅山師である三嶋清右衛門が著名であり、出雲市大社町の鷺浦にある鷺銅山を発見して開発したほか、博多の豪商である神谷春禎に乞われて大田市域西部の石見銀山の再開発にも協力したとされる。多伎町内にある三嶋家墓地(40)には、清右衛門の供養塔と伝わる石塔が残されている(松尾編 2004)。銅山開発とともに鉄の生産も山間部を中心に盛んになり、多伎町内の屋敷谷たたら跡(44)や佐田町内の檀原遺跡では、製鉄炉や精錬鍛冶炉などが確認されている(角田・宮本編 1997、宮本編 2002、石原編 2010)。そのなかで、茗ヶ原奥たたら跡(42)は製鉄炉の構造など

詳細は不明であるが、中世末から近世の野だたらと推測されている（石原ほか編 2005）。

近世

江戸時代になると幕藩体制が確立され、最盛期を迎えた石見銀山は幕府直轄地となり、その出入りを厳重に警備するために出雲国と石見国の国境付近である多伎町の口田儀番所（32）が設置された（松尾編 2004）。石見銀山の開発とともに製鉄業も活性化し、たたら製鉄が中国地方各地で盛んに行われ、製鉄炉を中心に置いて4本の押立柱で支えられた建物構造を有する高殿たたらが成立する。

その他の生産遺跡としては、多伎町内で近世後期の雲州久呂長沢焼窯跡（17）が存在し、全国各地で陶磁器の生産が始まった時期に操業され、山陰地方で最も早い時期の磁器窯として知られている（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

また、幕末期には日本近海に外国船が出没するなど高まる軍事的緊張により松江藩は日本海沿岸に台場を設け、多伎町内では口田儀台場跡（33・34）などが知られている（松尾編 2004）。

近代

明治時代には急速に近代化が進行して産業が発展するとともに、それまでの封建的な規制が緩んで全国的に窯跡が増加する。城ヶ谷遺跡では連房式登窯が上下に重なって2基確認され（久保田ほか編 2016）、近現代における石州瓦・石見焼の生産遺跡として重要である。

昭和初期には国内で鉄鉱資源の需要が高まり、多伎町内で昭和15年（1940）から採鉱場や選鉱場など近代的な設備を備えた久村鉱山（19・20）が操業される（仁木・福田編 2019）。また近接する湖陵町の姉谷鉱山（21）でも砂鉄採掘が行われ、これまでに複数の坑道が確認されているなど、近代的な久村鉱山とは対照的に人力作業で採掘した小規模な鉱山としての実態を示している（東山ほか 2018）。久村鉱山は最盛期には多くの精鉱を生産したが、終戦と同時に操業を停止し、昭和24年（1949）には過度経済力集中排除法により閉山を余儀なくされた（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

近世・近代の田儀櫻井家のたたら製鉄

近世から近代に活躍した田儀櫻井家は、多伎町奥田儀を拠点として、佐田町内のほか、隣接する雲南市域や大田市域東部にもたたら場や鍛冶屋を設け、広く製鉄経営を展開した。田儀櫻井家は江戸時代初期にこの地域に居宅を構えて鉄山を開発し、寛文中期から延宝期（1665年から1678年頃）には本格的に製鉄業を開始した（山崎 2008）。そして明治23年（1890）までの約250年間にわたり製鉄業を営み、最盛期には出雲国でも有数の鉄師に成長するとともに、地域経済の発展にも貢献した。

多伎町内の山間部には田儀櫻井家の本拠地で、生産関連遺構や生活関連遺構のほか、田儀櫻井家の菩提寺の智光院や金屋子神社、歴代当主やその子女の墓地である田儀櫻井家墓地が現存する宮本鍛冶山内遺跡（2）のほか、発掘調査によって製鉄炉地下構造である床釣りなどが確認された掛桶たたら跡（3）や聖谷たたら跡（4）が存在する（石原編 2008、幡中編 2020）。

佐田町内や雲南市域、大田市域の山間部にも田儀櫻井家が経営した多くのたたら場跡、鍛冶屋跡が存在し、佐田町内では加賀谷たたら跡・鍛冶屋跡（5）、朝日たたら跡（6）、吉原たたら跡・鍛冶屋跡（7）、檀原たたら跡（8）、梅ヶ谷尻たたら跡（吉野鉦）（10）、梅ヶ谷鍛冶屋跡（9）が知られ、佐田町と雲南市域の境には堂ノ原たたら跡・鍛冶屋跡（11）、大田市域東部の山間部には日ノ平たたら

跡(12)、奥原たたら跡(13)、橋ヶ原沢たたら跡(14)が確認できる(鳥谷2004、藤原2009)。このうち、朝日たたら跡、檀原たたら跡、梅ヶ谷尻たたら跡、日ノ平たたら跡は発掘調査で製鉄炉の床釣りの様相が明らかにされ(杉原ほか編1983、大國・遠藤編1987、杉原編1992、角田・宮本編1997)、朝日たたら跡では高殿周辺から陶磁器などが確認されている(田中編2001)。吉原たたら跡や梅ヶ谷尻鍛冶屋跡、堂ノ原たたら跡は測量調査などが実施され、高殿や鍛冶場の位置のほか、たたら製鉄の山内における製鉄関連遺構の残存状況が明らかにされている(石原編2010)。

山間部で田儀櫻井家のたたら場が設けられる一方で、沿岸部でもたたら製鉄が営まれた。多伎町の越堂たたら跡(1)は田儀櫻井家の製鉄業を支えた基幹的なたたら場跡である。越堂釜は約150年間操業され、近接する田儀港(当時の田儀浦)の廻船を利用して周辺地域や因幡国・伯耆国・石見国などから製鉄の原材料の砂鉄や木炭を搬入し、生産した鉄鉄などを全国へ出荷した(鳥谷2004、藤原2009)。山内の様子は建物配置図で知られていたが(渡辺ほか編1961)、発掘調査では概ね配置図の位置に製鉄炉の床釣りが認められ(石原編2008)、高殿全体の発掘調査により長期間の操業で床釣りや高殿石垣が複数回改修されたことが判明した(幡中2017、幡中編2022)。大田市域東部の百済たたら跡(15)は越堂たたら跡と同じく沿岸部のたたら場跡だが、詳細な実態は不明である(藤原2009)。

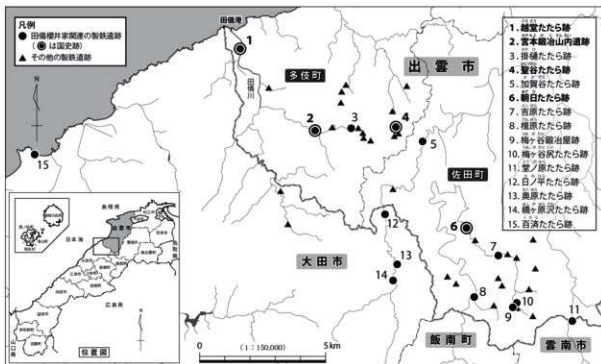
その他、田儀櫻井家との関連性は不明であるが、三瓶川中流域の引ノ子遺跡や灰取遺跡(大田市、93)では、近世から近代の陶磁器や鉄滓、近世の建物跡や石垣などが確認され、高殿や製鉄炉の床釣りなどが見つかった久谷たたら跡(大田市、94)との関係性が注目される(遠藤編1989・1990)。

田儀櫻井家は製鉄の原材料となる砂鉄や木炭を港の海運によって他地域から調達するとともに、山間部のたたら場の近隣で炭窯の構築や鉄穴流しを行って原材料を生産したと考えられる。例えば、聖谷たたら跡に近接する聖谷奥1遺跡(多伎町、43)では近世の炭窯跡が見つかっており、年代測定の結果から聖谷釜が操業された時期と重なる可能性が示されている(原山編2012)。また多伎町東部にあたる久村地区では、赤松鉄穴(22)が田儀櫻井家によって開発されて砂鉄の供給地となっており(『久村の歴史』編集委員会編2011)、この地域の製鉄関連遺跡として注目される。

幕末から明治初年頃に最盛期を迎えた田儀櫻井家は、引き続きたたら製鉄の経営を続けるが、開国による海外の安価で均質な輸入鉄の流通などの影響で逼迫し、生糸改良会社設立や蚕種製造業、銀行設立などの多角的な経営で再建を目指す成功には至らなかった(渡辺1996)。また本拠地の宮本で山内が火災に見舞われるなどの事態が重なり、明治23年に田儀櫻井家のたたら製鉄は終焉を迎えた。

これまでに見てきたように、田儀櫻井家が活躍した多伎町周辺は、律令期以来、出雲国と石見国の境界付近になり、中世期には特に石見銀山をめぐって各地の有力大名による様々な攻防の舞台となる。続く近世の幕藩体制においては、幕府直轄地となった石見銀山のある石見国との自由な往来が制限されることとなった。幕藩体制の厳しい統制化でもこの地に製鉄業を興し、地域や国境を越えて広範囲にわたりたたら製鉄を営んだ田儀櫻井家は、最盛期には出雲国において一二を争うほどの収益を誇るまでの発展を見せ、松江藩から様々な待遇を受けるまでに成長する。

こうした田儀櫻井家における一連のたたら製鉄の経営は、封建社会における様々な規制や制限を乗り越えて成り立つ当時の経済活動の力強さを如実に物語っているといえよう。



第19図 田原櫻井家たたら製鉄遺跡の分布

第7表 歴史的環境の参考文献一覧

編著	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・掲載文献・掲載頁	発行機関
阿部智子・江角ひろみ編	2004	屋形遺跡	林道宮本常谷銅施設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1	多伎町教育委員会
石原 聡ほか編	2005	若ヶ原東たたら跡	林道宮本常谷銅施設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	出雲市教育委員会
石原 聡編	2008	田原櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—	出雲市の文化財報告1	出雲市教育委員会
石原 聡編	2010	田原櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成19～21年度の調査—	出雲市の文化財報告12	出雲市教育委員会
今岡一三・勝部智明編	2010	砂原市磨古墳群・砂原1遺跡	一般国道多伎インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
内田律雄編	2013a	菅沢遺跡	一般国道9号(多伎朝山道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
内田律雄編	2013b	門遺跡 高野遺跡1区 中尾日遺跡	一般国道9号(朝山大田道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	島根県教育委員会
遠藤浩巳編	1989	引ノ子遺跡・辰取遺跡—三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査1—	大田市埋蔵文化財調査報告書9	大田市教育委員会
遠藤浩巳編	1990	久谷たたら跡—三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査2—	大田市埋蔵文化財調査報告書11	大田市教育委員会
大岡晴雄	1980	鳥相沢大田市区域の遺跡	松江考古 第3号 77～82頁	松江考古学協会
大岡晴雄編	1981	上川内遺跡—出長・高野地区—	大田市埋蔵文化財調査報告書1	大田市教育委員会
大岡晴雄編	1982a	大田市松田谷横穴墓	—	島根県教育委員会
大岡晴雄編	1982b	川南遺跡群—大田西部土造地造成事業に伴う発掘調査	大田市埋蔵文化財調査報告書2	大田市教育委員会
大岡晴雄編	1983	湯友大跡山横穴群—三瓶川流域遺跡他詳細分布調査1—	大田市埋蔵文化財調査報告書3	大田市教育委員会
大岡晴雄・植田 信編	1984	三瓶川流域遺跡他詳細分布調査2—大田市内遺跡一覧・地図—	大田市埋蔵文化財調査報告書4	大田市教育委員会
大岡晴雄・遠藤浩巳編	1987	日ノ平たたら跡発掘調査報告書—近世高野たたらとたたら文書—	大田市埋蔵文化財調査報告書6	大田市教育委員会
大岡晴雄・中山健一編	1999	下多根・柳田—三瓶地区(京山中山間地域)総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査—	大田市埋蔵文化財調査報告書第22集	大田市教育委員会
大岡晴雄ほか編	2005	東瀬遺跡—春日谷川遺跡防砂事業に伴う埋蔵文化財調査—	大田市埋蔵文化財調査報告書第32集	大田市教育委員会
大岡晴雄ほか編	2018	鳥井南遺跡発掘調査報告書1—畠山田地区・志田ヶ谷地区・朝山地区・千代田地区・影段原地区—	大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集	大田市教育委員会
大庭俊次編	2019	尾ノ上遺跡 坂田遺跡	一般国道9号(大田朝山道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	島根県教育委員会
角田徳平・宮本正保編	1997	榎原遺跡・谷川遺跡・鍛冶山宅宅跡	志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4	島根県教育委員会

編者	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・掲載文献・掲載頁	発行機関
内田幸彦ほか編	2021	宇明遺跡	一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5	鳥取県教育委員会
原山二郎編	2012	聖谷美1遺跡	出雲市の文化財報告 21	出雲市教育委員会
久保田一ほか編	2015	鈴見B遺跡2区	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥取県教育委員会
久保田一ほか編	2016	城ヶ谷遺跡(1区) 神谷遺跡 涼見E遺跡	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6	鳥取県教育委員会
『久村の歴史』編集委員会編	2011	久村の歴史	—	久村地区連合自治会
尾田 敦編	2014	市井深田遺跡 荒瀬遺跡 鈴見B遺跡1区	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥取県教育委員会
尾田 敦編	2017	高原遺跡(3区)・中尾H遺跡(4区)・門遺跡(2区)	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10	鳥取県教育委員会
近藤 正編	1975	鳥取県埋蔵文化財調査報告書 第1集	—	鳥取県教育委員会
杉原清一編	1992	胸ヶ谷尻たたら跡	—	佐田町教育委員会
杉原清一ほか編	1983	朝日跡	—	佐田町教育委員会
田中進亮ほか編	1987	佐田町の遺跡 東須佐地区	—	佐田町教育委員会
田中進亮編	1988a	尾崎橋六郎発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
田中進亮編	1988b	佐田町の遺跡 窪山地区	—	佐田町教育委員会
田中進亮編	1989	佐田町の遺跡 西須佐地区	—	佐田町教育委員会
田中進亮編	1998	上福明地茶屋遺跡発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
田中進亮編	2001	朝日遺跡発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
島谷智文	2004	田儀櫻井家の沿革	田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書 19～38頁	多伎町教育委員会
仁木 聡・福田子編	2019	久村駅跡一帯駅周辺の調査(旧 株式会社日立製作所安来工場久村駅跡)	一般国道9号(山陽徳多岐道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
仁木 聡ほか編	2019	御堂谷遺跡・諸友大瀬山橋六郎1号穴	一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥取県教育委員会
藤田剛志編	1997	石見の城跡類	鳥取県中近世城跡類分布調査報告書第1集	鳥取県教育委員会
野島光夫編	2018	島井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ一段段形地区Ⅰ	大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集	大田市教育委員会
藤岡正輝	1968	大田市内の遺跡・遺物	大田市誌 十五年のあゆみ 48～59頁	大田市
幡中光輔	2017	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の整備・活用とゾーン計画	遺跡学研究 第14号 82～89頁	日本遺跡学会
幡中光輔編	2020	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ—宮本頼山内遺跡 田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究—	出雲市の文化財報告 42	出雲市教育委員会
幡中光輔編	2022	越きたたら跡—発掘調査と文献調査・文書目録—	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ・出雲市の文化財報告 50	出雲市教育委員会
林 健亮ほか編	2015	高原遺跡(2区)	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥取県教育委員会
林 健亮編	2016	旭山遺跡・中尾H遺跡(3区)	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5	鳥取県教育委員会
林 健亮・森 愛子編	2017	大西大瀬山遺跡(18・19号橋穴基) 城ヶ谷遺跡(2区)	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9	鳥取県教育委員会
奥山信治ほか	2018	出雲市関門町神谷山跡掘削調査報告	古代文化研究 第26号 77～90頁	鳥取県古代文化センター
藤原雄高	2009	田儀櫻井家の跡・鍛冶屋の発掘	田儀櫻井家 たたら史料と文書目録 出雲市の文化財報告 8 101～113頁	出雲市教育委員会
松尾元品編	2004	多伎郷の考古学 ふるさとの史跡を歩く	—	多伎町ライオンズクラブ
松藤和久編	2013	砂原石路遺跡の研究—鳥取県多伎町砂原所在砂原遺跡発掘調査報告書—	—	砂原遺跡学術発掘調査班
宮本正彦編	2002	橋原遺跡(2)—自然科学分析編—	志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14	鳥取県教育委員会
宮本正彦編	2016	大西大瀬山遺跡	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7	鳥取県埋蔵文化財調査センター
矢部保一編	2016	栗林B遺跡—一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	大田市埋蔵文化財調査報告書第33集	大田市教育委員会
矢部保一編	2018	諸友瀬村遺跡・栗川遺跡—一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	大田市埋蔵文化財調査報告書第37集	大田市教育委員会
山崎一郎	2008	松江藩神門部における田儀櫻井家の武山経営	たたら製鉄・石見金山と地域社会 近世近代の中国地方 29～51頁	清文堂
渡辺勝治	1996	田儀櫻井家年代記	—	自費出版
渡辺勝治ほか編	1961	田儀村誌	—	多伎役所掲
渡辺 聡・島川寿幸	2012	波根川遺跡の縄文土器	鳥取県考古学会誌 第29集 31～34頁	鳥取県考古学会

第3章 田儀櫻井家のたたら製鉄

第1節 田儀川流域周辺の製鉄関連遺跡

田儀櫻井家のたたら製鉄は江戸時代初期から多伎町周辺を中心に営まれ、田儀川流域とその支流の宮本川流域には田儀櫻井家の本拠地であった宮本鍛冶山内遺跡と越堂たたら跡が存在する。

田儀櫻井家のたたら製鉄の特質を理解するには、田儀川流域周辺の歴史的環境のほか、田儀櫻井家のたたら製鉄開始以前や経営初期の状況が把握できる製鉄関連遺跡について整理し、田儀櫻井家が製鉄業を営んだこの地の歴史的な背景を明確にする必要がある。

1 田儀川流域周辺の歴史的環境

田儀川流域周辺の歴史的環境は、第20図で示した遺跡を中心に、これまでの調査研究の成果（阿部・江角編2004、松尾編2004、松藤編2013など）をもとに概要を整理する。

旧石器・縄文時代

多伎町内の日本海沿岸付近の砂原遺跡（多伎町砂原）では、旧石器時代の石器の発見が報告されているが、田儀川流域周辺で旧石器時代の明確な遺跡は確認されていない。

縄文時代の多伎町周辺では、菅沢地区（多伎町小田）で尖頭器が採取されており、草創期や早期頃に人々の活動した痕跡が確認されている。宮本鍛冶山内遺跡に近接する屋形遺跡（多伎町奥田儀）でも黒曜石製の石鉄が見つかり、縄文時代から宮本川流域の山間部で人々が活動していたことを示す。その他、田儀川流域で宮本鍛冶山内遺跡と越堂たたら跡の中間地点付近に位置する多伎藝神社（多伎町口田儀）の境内には、晩期から弥生時代前期頃の磨製石斧が信仰の対象として祠に祀られている。

弥生・古墳時代

弥生時代には矢谷遺跡（多伎町久村）で器面に粉の圧痕が付着した前期の土器が見つかったが、その他の遺跡は田儀川流域周辺を含め多伎町内では現在のところほとんど確認されていない。

古墳時代前期の集落跡や古墳は多伎町内であり知られていない。中期には田儀川流域沿いの旧田儀小学校の敷地内にある丘陵に築かれた経塚山古墳（多伎町口田儀）が古くから知られ、勾玉や管玉、璽玉などの副葬品が見つかった。後期になると経塚山古墳と近接する丘陵上に経塚山横穴墓群が築かれるほか、横穴式石室を持つ原の古墳（多伎町奥田儀）が田儀川中流域に築造されており、田儀川流域付近には古墳時代の人々が暮らした集落も同時に存在したと考えられる。その他、多伎町内には複数の古墳や横穴墓群が確認されている。

奈良・平安時代

奈良時代の律令国家の成立に伴い国・郡制が整備された。『出雲国風土記』によると、多伎町周辺は出雲国神門郡多伎郷となり、石見国との国境付近に位置する。多伎郷には都を起点とする山陰道沿いに多伎駅（往来する役人などに馬や食料および寝所を提供する施設）が設けられたほか、国境には剱（往

来する人々の管理や検査を行う施設)が置かれ、宅伎戎(警備や監視を行う軍事施設)は田儀川の河口付近に配置された。この頃から田儀川流域は国境付近として様々な施設が置かれるようになる。

中世

室町時代から戦国時代にかけては、尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防が繰り返され、出雲国と石見国の国境に位置する多伎町周辺では多くの山城が築かれた。尼子氏の配下であったとされる小田氏の居城の富士ヶ城跡(多伎町小田)、大内氏が築いて後に尼子に攻め落とされたといわれる要害山城跡(多伎町口田儀)、尼子氏が西方の防御を固めるために築城した鶴ヶ城跡(多伎町口田儀)が著名である。鶴ヶ城は最終的に毛利氏に攻め落とされるが、それまでの毛利氏による2度の侵攻を防いでおり、重要な軍事拠点であった。なお鶴ヶ城は、越堂鉦山内西側の丘陵上に築かれている。

中世期には山間部で銅山開発が進み、佐田町周辺には多数の銅山跡や精錬所跡などが知られている。銅山開発については、口田儀出身の銅山師である三嶋清右衛門が著名であり、出雲市大社町の鷺浦にある鷺銅山を発見して開発したほか、博多の豪商である神谷寿禎に乞われて大田市城西部にある石見鉦山の再開発に協力したとされている。田儀川流域の原の古墳と隣接する場所には三嶋家墓地(多伎町奥田儀)があり、三嶋清右衛門の供養塔と伝わる石塔が残されている。

また田儀川河口付近にある本願寺(多伎町口田儀)には、室町時代の初め頃に朝鮮半島の高麗で制作された銅造聖観音菩薩座像が保管されている。



第20図 田儀川流域周辺の主要遺跡と田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布

近世

江戸時代になると幕藩体制が確立され、最盛期を迎えた石見銀山は幕府直轄地となり、その出入りを厳重に警備するために出雲国と石見国の国境付近の口田儀に番所が設置された。

幕末期には日本近海に外国船が出没するなど高まる軍事的緊張によって、松江藩は日本海沿岸に台場を設けており、口田儀には2箇所の台場が備えられた。

これまで田儀川流域周辺の歴史的環境を確認してきたが、田儀櫻井家がこの地でたたら製鉄を行う前にも人々の営みが縄文時代から連続と続いていたことが分かる。また、奈良時代の律令国家の成立に伴い、田儀川流域周辺は出雲国と石見国の国境としての役割を担う施設が設置されたが、それ以降の時代も国境付近の重要な拠点としての特質を帯びるようになる。

2 宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡（室町時代～江戸時代初期頃）

田儀櫻井家は江戸時代初期に田儀川支流の宮本川流域における多伎町奥田儀の宮本でたたら製鉄を開始するが、田儀櫻井家がこの地に進出する以前の室町時代から江戸時代初期頃にも製鉄が行われていたことを示す製鉄関連遺跡が存在する（第21図）。また田儀櫻井家のたたら製鉄経営初期に相当する時期の製鉄関連遺跡も見つかっており、ここでは田儀櫻井家の本拠地であった宮本鍛冶山内遺跡周辺の主要な製鉄関連遺跡について調査成果をもとに内容を概観する。

屋敷谷たたら跡（第22・23図）

屋敷谷たたら跡（多伎町奥田儀）は、宮本川上流の屋敷川流域にあり、田儀櫻井家为本拠地を構え



第21図 宮本鍛冶山内遺跡周辺の製鉄関連遺跡の分布と範囲

た宮本鍛冶山内遺跡から2.5kmほど谷奥に入った場所に存在する。平成19年度(2007)に発掘調査が行われ、近世たたら以前の構造を持つ製鉄炉と精錬鍛冶炉が確認され、地下構造の木炭の年代測定から室町時代に操業した可能性が想定される(石原編2010)。田儀櫻井家が奥田儀にたたら製鉄の拠点を設けた理由について詳細は不明であるが、当時の奥田儀の住民が製鉄事業の再興を求める嘆願を仁多郡奥出雲町でたたら製鉄を営む可部屋櫻井家に行い、松江藩の許可を得て製鉄業を始めたと言われる説もある(渡辺1996)。そのため、江戸時代以前にもこの地で製鉄が営まれていたことが、田儀櫻井家の本家である可部屋櫻井家初代の櫻井三郎左衛門直重が進出する契機となった可能性がある。

中世期の製鉄炉や精錬鍛冶炉は、山間部を中心に操業されることが多い。屋敷谷たたら跡も山間部にあるものの、そのなかでも比較的沿岸部に近い位置に営まれており、田儀川や宮本川および屋敷川を経由して沿岸部とつながっている。河川を通じて沿岸部にある田儀港周辺との関連があった可能性があるが、詳細な調査は中世の田儀港の様相を含めて今後の課題である。

茗ヶ原奥たたら跡(第24図)

茗ヶ原奥たたら跡(多伎町小田)は、日本海に注ぐ小田川が上流で分岐する聖谷川の流域にある。茗ヶ原奥たたら跡から約500m上流には聖谷たたら跡があり、宮本鍛冶山内遺跡からは約4kmの位置に所在する。平成16年度(2004)に発掘調査が実施されており、製鉄炉などは見つかっていないが、河岸段丘上を中心に排滓場が広がっている状況が確認されていた(石原ほか編2005)。

排滓場内の炭溜まりから出土した陶磁器の年代から推定すると、戦国時代から江戸時代前期頃に営



第22図 屋敷谷たたら跡全景



第23図 屋敷谷たたら跡の製鉄炉



第24図 茗ヶ原奥たたら跡全景



第25図 聖谷奥1遺跡全景

まれたたたら場が存在した可能性が考えられる。この時期は、田儀櫻井家が奥田儀で製鉄業を始める時期と重なり、田儀櫻井家のたたら製鉄経営初期の様相を検討するうえで重要である。

聖谷奥1遺跡（第25図）

聖谷奥1遺跡（多伎町奥田儀）は、聖谷たたら跡から聖谷川の支流へ約300m進んだ河岸段丘に存在しており、宮本鍛冶山内遺跡からは直線にして約3kmの位置にある。平成22年度（2010）から平成23年度（2011）にかけて発掘調査が行われた。調査のなかで2基の炭窯跡が確認されており、炭窯跡の炭化材の年代から江戸時代中期前半頃に操業された可能性が指摘されている（景山編2012）。

この年代は、聖谷鉦の推定操業時期と比較的近く、聖谷鉦やその周辺のたたら場における製鉄の原材料となる木炭の供給元であったことも想定される。

このように田儀川流域周辺には、田儀櫻井家がたたら製鉄を営む以前とみられる製鉄関連遺跡が確認されており、また田儀櫻井家経営初期のたたら製鉄の様相を知るうえで重要な製鉄関連遺跡も存在する。田儀櫻井家がこの地でたたら製鉄を営むことになった背景やその様相についても、重要な課題として認識し、今後調査研究を進めていく必要がある。

3 田儀櫻井家のたたら場・鍛冶屋跡

（1）史跡の概要とその特徴

田儀櫻井家が操業したたたら場・鍛冶屋跡は全体で15箇所が確認されているが、そのなかで現在国史跡に指定されているのは、宮本鍛冶山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡、越堂たたら跡の4箇所である。宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡は平成18年（2006）1月26日に国史跡に指定され、聖谷たたら跡と越堂たたら跡は平成21年（2009）2月12日に追加指定がなされた。ここでは各史跡の概要とその特徴を整理し、田儀櫻井家のたたら製鉄が持つ歴史的な価値づけを明確にする。

宮本鍛冶山内遺跡（第26図）

宮本鍛冶山内遺跡は山間部の狭い峡谷のなかにあり、たたら製鉄に従事する人々が暮らした場所である。約250年間にわたり、たたら製鉄業を営んだ田儀櫻井家の本拠地として栄えた。この地にたたら場は設けられていなかったが、遺跡内には大鍛冶場跡や小鍛冶場跡などの鍛冶屋に関する生産関連遺構や、田儀櫻井家の本宅跡および従事者の住居跡など生活に関連した遺構、そして智光院・金屋子神社・田儀櫻井家墓地・従事者墓地といった信仰に関連する遺構がまとまって存在しており、遺存状態も良好である。近世のたたら製鉄を営んだ様子を一体的に把握できる全国でも稀有な遺構群として歴史的な評価が高い。また、文献史料では元禄7年（1694）には山内が成立していたことが確認されているが、それ以前に田儀櫻井家はこの地に進出しており、その時期から鍛冶屋などが操業されていた可能性がある。なお、平成16年度から平成18年度にかけて大鍛冶場跡や田儀櫻井家本宅跡などの発掘調査が実施された（石原編2008）。

朝日たたら跡（第27図）

朝日たたら跡は山間部のたたら場跡で、発掘調査が実施されたのは昭和57年（1982）であり、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかでも古くから調査で内容が明らかになっている。操業時期を確定でき

る明確な文献史料はないが、発掘調査の出土陶磁器や自然科学分析により享保から宝暦年間（1716～1763年）頃の操業と推定されている（杉原ほか編1983）。製鉄炉を覆う高殿と製鉄炉地下構造である床釣りの詳細な構造が調査で具体的に明らかになった。また調査後に現地を覆う高殿を模した上屋の展示棟が建設され、床釣りの実物を実際に見学できる数少ないたたら場跡として貴重である。

聖谷たたら跡（第28図）

聖谷たたら跡は朝日たたら跡と同様に山間部で営まれたたたら場跡である。たたら場の周辺には、享保19年（1734）に4代目清矩が造立した地藏（市指定文化財）が存在していた。平成18年および平成19年に行われた発掘調査では、地藏の造立年代と近い時期の陶磁器が出土しており（石原編2008）、聖谷鉦は田儀櫻井家が経営した初期のたたら場である可能性が高いと考えられる。また、床釣りの一部である本床や小舟なども発掘調査で確認されており、田儀櫻井家経営初期のたたら場の構造を知る重要な手掛かりとなった。

越堂たたら跡（第29図）

越堂たたら跡は山間部のたたら場とは対照的に沿岸部に営まれたたたら場跡である。たたら場のすぐ脇には田儀川が流れ、近くの田儀港へと繋がる。山間部のたたら場では、製鉄の原材料である砂鉄や燃料の木炭となる木材を周辺の山林から入手するが、越堂鉦では日本海の高麗により砂鉄や木炭の搬入を行っていた。文献史料によると、越堂鉦の操業期間は少なくとも延享2年（1745）から明治23年（1882）までの約150年もの長期にわたったことが分かっている。なお越堂鉦は明和8年（1771）



第26図 宮本鍛冶山内遺跡の大鍛冶場跡



第27図 朝日たたら跡の床釣り



第28図 聖谷たたら跡の床釣り



第29図 越堂たたら跡高殿全景

に石見国横道村の弥平太から田儀櫻井家が買い請けているが、田儀櫻井家の名義による操業は明和6年(1769)からとなっており、それ以前にも経営に携わっていた可能性が考えられる。田儀櫻井家は幕末から明治初年頃には出雲国で田部家に続く2番目の産鉄量を誇るまでに成長するが、それは多量の鉄(鉄鉄)を生産し、田儀港から廻船によって全国各地へ出荷・販売できた越堂鉦の存在が大きいの。こうして田儀櫻井家の基幹的なたたら場として長期間操業された越堂鉦は、沿岸部のたたら場の実態を示すとともに、田儀櫻井家の鉄生産の歴史を紐解くうえでも重要性が高い。なお、越堂たたら跡は平成18年度および平成25年度(2013)から平成29年度(2017)に発掘調査が実施されており(石原編2008、幅中編2022)、製鉄炉の床釣りや高殿内部の様子が明らかにされたほか、高殿石垣と床釣りに造り替え痕跡が認められ、長期間の操業のなかで大規模な改修が繰り返行われたことが分かっている。

(2) その他の主なたたら場跡

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡では、これまでに触れてきた宮本鍛冶山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡、そして越堂たたら跡の4箇所の史跡のほかにも、多くのたたら場跡や鍛冶屋跡が沿岸部や山間部に存在する。ここでは、それらのなかで特徴的なたたら場跡の様相について触れておきたい。

梅ヶ谷尻たたら跡(第30図)

梅ヶ谷尻たたら跡(佐田町吉野)は、神戸川の支流である高津屋川上流に位置するたたら場跡である。平成3年(1991)の発掘調査で大小2基の製鉄炉の床釣りが確認された(杉原編1992)。これら2基の床釣りは隣接して並列しており、自然科学分析によって規模の小さい床釣りは17世紀後半から18世紀前半、規模の大きい床釣りは18世紀中頃の年代が測定された。前者は中世期の様相を残した床釣りの構造で、後者の近世高殿様式を備えた製鉄炉の床釣りにへど移り変わる様子を如実に示している。また、自然科学分析で導かれた年代は、文献史料に登場する吉野鉦の操業時期とほぼ合致し、その所在地についても一致しているため、梅ヶ谷尻たたら跡は田儀櫻井家が初期に経営した吉野鉦である可能性が高いと考えられている。

なお、近接する梅ヶ谷鍛冶屋跡は、田儀櫻井家が万延元年(1860)から明治11年(1878)頃まで操業しており、田儀櫻井家経営の終盤期にあたる鍛冶屋である。礎石建物跡や石垣のほか、鍛冶場で使用された送風管や鍛冶滓などが現地調査で見つかっている(石原編2010)。



第30図 梅ヶ谷尻たたら跡の床釣り



第31図 加賀谷たたら跡の金屋神社

加賀谷たたら跡 (第31図)

加賀谷たたら跡(佐田町一窪田)は神戸川の支流伊佐川沿いに立地する。文献史料によると、文久2年(1862)から明治11年頃まで田儀櫻井家が操業しており(藤原2009)、田儀櫻井家の終盤期における製鉄経営を支えた。現在は、山内に置かれた事務所元小屋跡とみられる建造物や金屋子神社などが残存しており、当時の山内の様子がよく分かるほか、金屋子神社に関連した祭礼道具などが残されている点でも貴重である(河瀬・山崎2007)。

百済たたら跡

百済たたら跡(大田市島井町)は越堂たたら跡と同じく沿岸部のたたら場跡で、江戸時代には石見銀山領であった。文献史料では、寛政9年(1797)から文化8年(1811)まで田儀櫻井家が操業していたとされ(藤原2009)、田儀櫻井家が松江藩以外の他領において経営に加わっていたたたら場として注目される。現在の石川県金沢市の文献史料には百済鉄の品名が残されており、越堂鋸と同様に日本海の手廻りを利用して製鉄の原材料の搬入や、鉄製品などの出荷や販売を行ったと考えられる。

参考文献

- 阿部智子・江角ひろみ編 2004『屋形遺跡』林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 多伎町教育委員会
- 石原 聡ほか編 2005『茗ヶ原奥たたら跡』林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 出雲市教育委員会
- 石原 聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—』出雲市の文化財報告1 出雲市教育委員会
- 石原 聡編 2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成19～21年度の調査—』出雲市の文化財報告12 出雲市教育委員会
- 景山真二編 2012『聖谷奥1遺跡』林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告21 出雲市教育委員会
- 河瀬正利・山崎順子 2007「出雲市佐田町の加賀谷たたらとたたら祭礼道具」『たたら研究』第46号 たたら研究会 43～54頁
- 杉原清一編 1992『梅ヶ谷尻たたら跡』佐田町教育委員会
- 杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鋸』佐田町教育委員会
- 幡中光輔編 2022『越堂たたら跡—発掘調査と文献調査・文書目録—』史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ・出雲市の文化財報告50 出雲市教育委員会
- 藤原雄高 2009『田儀櫻井家の鋸・鍛冶屋の変遷』田儀櫻井家 たたら史料と文書目録 出雲市の文化財報告8 出雲市教育委員会 101～113頁
- 松尾充品編 2004『多伎郷の考古学 ふるさとの史跡を歩く』多伎町ライオンズクラブ
- 松藤和人編 2013『砂原旧石器遺跡の研究—鳥根県多伎町砂原所在砂原遺跡発掘調査報告書—』砂原遺跡学術発掘調査団
- 渡辺勝治 1996『田儀櫻井家年代記』自費出版

第2節 田儀櫻井家の製鉄経営と独自戦略

1 田儀櫻井家独自の経営体制

田儀櫻井家のたたら製鉄経営は、10代目直敬と11代目直順の時期に最盛期を迎えるが、その背景には田儀櫻井家独自の経営戦略が関係しており、たたら製鉄業を軌道に乗せて出雲国でも屈指の鉄師へと導いた。ここでは、田儀櫻井家のたたら製鉄を特徴づける独自の経営戦略について整理する。

(1) 「山のたたら」と「海のたたら」の同時経営

江戸時代の中国地方は全国屈指の鉄生産地帯であり、その中心地の一つが出雲国の山間部であった。現在の雲南市域を中心に製鉄業で栄えた田部家のほか、仁多郡奥出雲町域周辺では櫻井家や綿原家、卜藏家など多くの有力な鉄師が製鉄業を営んでいた。これらの鉄師は山間部にたたら場や鍛冶屋を設けて長期的な鉄生産を行っており、山間部を拠点とした製鉄業の経営体制を採っていた。山間部に拠点を構えることで、たたら製鉄に必要な砂鉄や木炭などの資源を供給する鉄山からの輸送経費を削減できた。17～18世紀には資源が安定して供給できる場所に概ね20年程度で移転しながら操業していたが、18世紀後半にはたたら場の位置を固定して長期間操業するようになる。

田儀櫻井家は、山間部にたたら場や鍛冶場を設けて鉄生産を行う「山のたたら」を17世紀後半から継続的に操業する一方、18世紀中頃から沿岸部の「海のたたら」の経営にも乗り出して製鉄業を行っていたことに最大の特徴がある(角田2011)。こうした山のたたらと海のたたらを長期にわたって同時経営する手法は全国でも例がなく、田儀櫻井家のたたら製鉄が築き上げた独自の経営戦略といえる(第32・33図・34図左)。山間部と沿岸部のたたら場では、製鉄の原材料の調達方法が大きく異なり、山間部では周辺に資源がなくなると新たな場所にたたら場を移転させるが、沿岸部では近くの港を利用して他地域から砂鉄や木炭を安定して入手でき、同じ場所で長期間の操業が可能になる。

このように、たたら製鉄に必要な砂鉄や木炭などの資源の入手経路が異なる山のたたらと海のたたらを同時に営むことで、一方が経営不振に陥っても、もう一方に鉄生産の主軸を移すといったリスク分散が可能になる点を見越していた可能性がある。また、山間部と沿岸部でたたら製鉄を営むことでそれぞれの地域の経済発展にも大きく貢献している。

(2) 「江戸時代の製鉄コンビナート」の確立

田儀櫻井家が経営した山のたたらでは、田儀櫻井家の本拠地にはたたら場を設けずに鍛冶屋(宮本鍛冶屋)を設置し、周辺のたたら場で生産した鉄鉄の多くを集約して割鉄に加工する方式であった(第34図右)。なお、沿岸部に立地する海のたたらである越堂鉦は、割鉄の素材や鋳物の原材料である鋳鉄のもとになる鉄鉄の生産に特化していた。こうして加工・生産された割鉄や鉄鉄は、越堂鉦に近接する田儀港に集められて大坂や北陸、九州など全国各地へと出荷された。

田儀櫻井家は自家廻船を有して直接販売を行うこともあったが、田儀港を構えた口田儀の集落周辺の廻船問屋(鳥屋尾家や井原家など)が自前の廻船に田儀櫻井家の割鉄や鉄鉄を積み込んで出荷していた。田儀櫻井家の製鉄経営を支えた廻船問屋の活躍は、文献史料や多伎藝神社に奉納された多数の船

絵馬から読み取れる。このように田儀港の廻船を利用して割鉄や鉄鉄を各地に輸送することで、山間部のたたら場からの荷馬や人力による陸路輸送と比べて大幅な経費の削減に成功しており、田儀櫻井家のたたら製鉄の流通拠点として田儀港が重要な役割を果たしていた。当時、山間部に拠点を置いた鉄師が松江の鉄問屋を仲介して他国へと販売していたのとは対照的に、田儀櫻井家の場合には自家廻船や廻船問屋の廻船を駆使することで多様な販路を独自に開拓しており、他の鉄師とは異なる販売戦略を持っていたことが分かる（仲野 2008）。

このように、聖谷鉦や朝日鉦などの山間部に設けた山のたたらで産出された鍛冶素材を宮本鍛冶屋で割鉄に加工して集積するとともに、海のたたらとして沿岸部に立地する越堂鉦で日本海の手廻りにより搬入した各地の資源をもとに大量の鉄鉄を生産し、それらが運び込まれた田儀港でつながる体系的な製鉄の流通体制は、さながら「江戸時代の製鉄コンビナート」と呼べるもので、当時の最先端を行く経営手法であった（楠中 2017）。

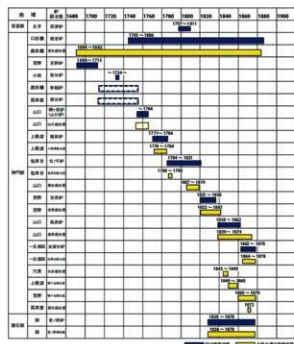
田儀櫻井家は山のたたらと海のたたらを同時に経営し、両者を田儀港の廻船による物流で結び付け、



第 32 図 海のたたら（越堂たたら跡遠景）



第 33 図 山のたたら（朝日たたら跡遠景）



第 34 図 田儀櫻井家が経営したたたら場・鍛冶屋の操業期間（左）と産鉄の流れ（右）（左は角田 2022 に加筆）

そして日本海の手運を利用して多様な販路を開拓する独自の経営体制を確立した。この経営体制は成功を収めて田儀櫻井家は躍進を遂げ、田儀櫻井家の最盛期にあたる幕末から明治初年頃には全国で屈指の産鉄量を誇っていた出雲国のなかで一二を争うまでに成長した。

2 田儀櫻井家の販路拡大と越堂鉦の位置づけ

これまで田儀櫻井家のたたら製鉄経営の独自戦略について整理してきたが、そのなかで重要な役割を担ったのが越堂鉦と田儀港であった。そこで、史跡のなかで「導入ゾーン」として設定した構成要素の中心となる越堂鉦の位置づけについて、田儀港を拠点とした田儀櫻井家の産鉄の販路を含めて確認しておきたい。

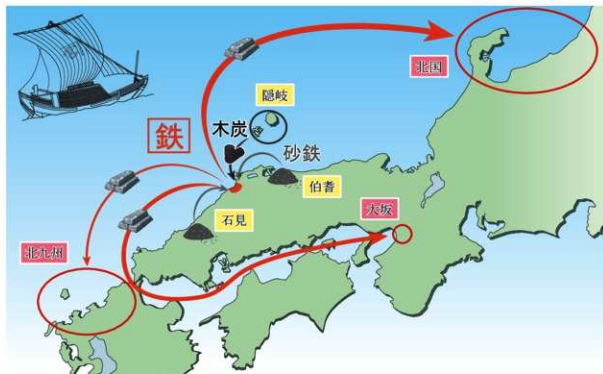
(1) 田儀櫻井家の産鉄の販路

田儀櫻井家の産鉄は田儀港の廻船で全国各地に運ばれた(第35図)。幕末から明治期の廻船問屋による廻船の寄港地は、出雲国や石見国などの地元のほか、能登国・越後国・越中国などの北国が多く、次いで長門国・周防国、伯耆国、備後国、摂津国、肥前国などが挙げられる(野坂2009)。

このうち北国への販売品は鋼や割鉄が大きな比重を占めており(仲野2004)、幕末期には加賀藩が財政基盤の確立のために能登国での製塩事業を奨励したため鋳物師による塩釜生産が発展し、生産に使う良質な鉄鉄の需要が増大したことと関連すると推測されている(野坂2009)。

(2) 販路拡大にみる越堂鉦の位置づけ

このように大規模な鉄鉄の需要に応えるには安定した供給が求められるが、越堂鉦では日本海の手運によって石見国および伯耆国の砂鉄や隠岐国の木炭など、他地域から鉄鉄に必要な資源を確保しており、資源が枯渇することなく良質な鉄鉄の生産が可能であった。



第35図 廻船による資源調達(砂鉄・木炭)と産鉄の主な販路

田儀港の廻船を利用した資源調達を背景に長期間操業された越堂鉾は、安定した鉄鉄の持続的な供給が可能であり、さらに日本海の海運によって輸送経費を削減できたため、経済的にも優れていた。こうした利点が田儀櫻井家の多様な販路の開拓を後押ししたと考えられる。

当時の社会情勢を背景に、鉄生産に特化していた越堂鉾は大量の鉄鉄を産出し、近くの田儀港の廻船を利用して北国を中心に各地へ供給するなど販路を拡大していったと考えられ、田儀櫻井家独自のたたら製鉄の経営体制を支えた基幹的なたたら場として重要な位置を占めていたといえる。

参考文献

- 角田徳幸 2011「たたら吹製鉄の地域的展開」『山陰におけるたたら製鉄の比較研究』鳥根県古代文化センター 107～160頁
- 角田徳幸 2022「田儀櫻井家のたたら経営と越堂鉾」『越堂たたら跡—発掘調査と文献調査・文書目録—』史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ・出雲市の文化財報告 50 出雲市教育委員会 217～232頁
- 仲野義文 2004「田儀櫻井家の産鉄流通について」『田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会 49～60頁
- 仲野義文 2008「越堂鉾の鉄流通について」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—』出雲市の文化財報告 1 出雲市教育委員会 112～115頁
- 野坂俊之 2009「田儀櫻井家経営「越堂たたら」及び田儀浦の原風景復元」『博古研究』第38号 博古研究会 1～17頁
- 幡中光輔 2017「史跡 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡」『発掘された日本列島 2017 新発見考古速報』共同通信社 40～41頁

第4章 越堂たたら跡の整備計画

第1節 基本理念と基本方針

出雲市は平成29年(2017)1月に文化庁行政全体の基本構想として「出雲市歴史文化基本構想」を策定し、出雲市における文化財の保存・活用の基本理念および基本方針を設定した。そのなかで田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、関連文化財群のテーマ「たたらや鉱山とともに生きた足跡」の構成要素として盛り込まれた。また、文化財の保存・活用に関する目標や中長期的に取り組む具体的な基本計画および実施計画として「出雲市文化財保存活用地域計画」を令和3年(2021)7月に策定した。

出雲市歴史文化基本構想では、基本構想を最上位の計画として、その下に各文化財の個別具体的な保存活用(管理)計画が位置づけられており、平成20年(2008)3月に策定した「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画」はその部分に該当する。保存管理計画のなかでは、史跡の保存管理および整備活用に関する基本理念としての考え方を整理しており、その内容を史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の保存管理・整備活用を統括する基本理念として位置づけた(第36図)。

これら出雲市歴史文化基本構想および史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画の基本理念などを踏まえて、これまで確認した越堂たたら跡の位置づけを反映させ、越堂たたら跡の整備計画における基本理念を設定した。

1 出雲市の文化財の保存・活用の基本理念と基本方針

出雲市歴史文化基本構想は、「神話と風土記の世界が今に息づく出雲」をもとに、その歴史文化を地域で守り、生かし、未来へ伝えることを基本理念として掲げている。基本理念に沿って具体的な取り組みとして実行するため、以下の基本方針を定めている。

- 市民一人ひとりが、歴史文化に地域ならではの価値を再発見し、大切にす
- 関連する文化財をつなぎ、出雲ならではの歴史文化の価値や魅力を高める
- 周辺環境を含めて、文化財を守り、生かし、文化の薫り高い地域をつくる
- 文化財を活かした多様な活動・交流のある地域をつくる
- 行政分野の連携および協働のまちづくりを進める

2 史跡全体の保存管理・整備活用の基本理念

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画のなかで定められた、史跡全体の保存活用・整備活用を統括する基本理念としての基本的な考え方は、以下のとおりである。

製鉄関連遺跡群の総合的な保存と継承

わが国の近世たたら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として、宮本鍛冶山内遺跡とその周辺に広く分布する一連の遺跡群における遺構などの恒久的な保存を図り、後世に継承する。

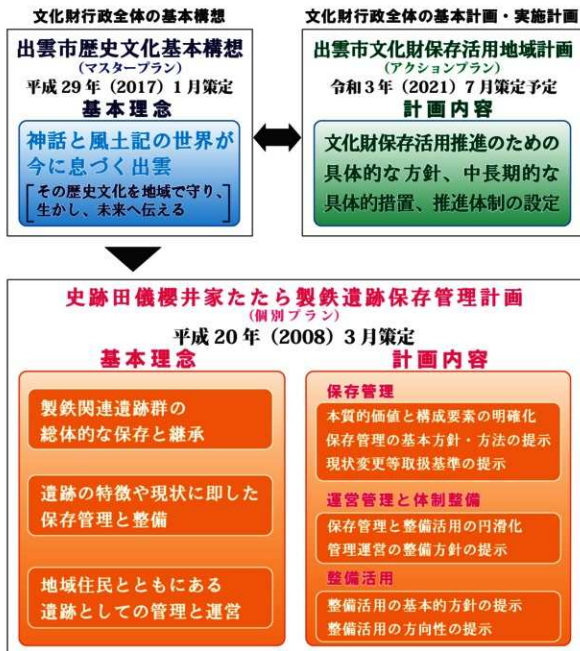
田儀櫻井家たたら製鉄遺跡として今後保存が必要な地域については、所有者等の同意と協力のもとに追加指定などの保存・保全策を講じる。

これらの保存や保全に必要な各種調査や研究を継続的および体系的に実施する。

遺跡の特徴や現状に即した保存管理と整備

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の各遺構は、地上に表出したものや地下に埋蔵されたものがあり、その遺存状況も様々である。また、遺跡群の立地や土地利用も多種多様であることから、それぞれの遺跡の状況などに応じ、住民生活にも配慮した適切な保存管理を行う。

整備は遺構の保存を前提として、保存のための整備を必要に応じて行うとともに、遺跡群の総合的な理解に必要な活用のための整備を効果や個々の遺跡の状況などから判断して段階的に実施する。



第 36 図 出雲市の歴史文化基本構想および文化財保存活用地域計画と保存管理計画

地域住民とともにある遺跡としての管理と運営

宮本鍛冶山内遺跡のこれまでの保存活動の経緯や、遺跡の大半が民有地であることなどから、地域住民と行政との協働による管理や運営を実施する。そのために必要な体制整備や住民参加システムなどを検討する。

3 越堂たたら跡整備の基本理念

出雲市歴史文化基本構想の基本理念とその方針の基層にあるのは、その地域ならではの文化財の価値を見出して、それを未来に継承することであり、それを実行するためには、地域住民と共にある遺跡の整備が必要であることが、史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画における基本理念から読み取れる。これらを前提として、地域経済の発展に大きな影響を与えた田儀櫻井家の役割や、田儀櫻井家のたたら製鉄における越堂たたら跡の位置づけを踏まえ、越堂たたら跡の整備の基本理念を以下のように設定した。

地域の発展に貢献した田儀櫻井家とたたら製鉄の重要性を学べる歴史学習の起点

田儀櫻井家は、「山のたたら」と「海のたたら」を同時に操業する独自のたたら製鉄経営を展開して、山間部や沿岸部のそれぞれの地域における経済発展に貢献したほか、田畑の開墾など地域の活性化にも大きな足跡を残してきた。

こうした田儀櫻井家のたたら製鉄経営などを通して地域とのつながりを再確認するとともに、当時の地域経済を支えたたたら製鉄の重要性を学べる場として地域や学校での歴史学習の起点となり、地域の歴史を未来へ継承していける越堂たたら跡の整備を目指す。

江戸時代の製鉄コンビナート体制を支えた海のたたらが体感できる場としての魅力発信

たたら製鉄に関する遺構が良好な状態で確認され、現在も残されている遺跡は少なく、国指定史跡となっているたたら製鉄遺跡は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を含め全国で3例にとどまる。

越堂たたら跡の発掘調査で明らかになった、江戸時代の製鉄コンビナート体制を支えた「海のたたら」の実態を実際に見学して体感することができる唯一無二の場所として整備することで、出雲市内や島根県内のみならず、全国に向けてその魅力を発信する。

史跡を保護し歴史文化を継承する地元住民の継続的な活動を支える拠点づくり

史跡を含む田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、これまで宮本史跡保存会や田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会を中心とする地元の人々の献身的かつ積極的な保護活動が行われてきたことによって歴史的な価値が継承されてきた側面が大きい。

また田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会は、出雲市内外からの見学者に遺跡のガイドや見学会を継続して行っており、史跡としての田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を活用して魅力を発信するために必要不可欠な存在となっている。こうした地元の継続的な取り組みを支援する拠点となるように越堂たたら跡の整備を進めることとした。

4 越堂たたら跡整備の基本方針

越堂たたら跡整備の基本理念をもとに設定する基本方針は、史跡のゾーニングを行った「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」（平成24年〔2012〕11月策定）のなかでその枠組みが整理された。その後「導入ゾーン整備活用基本計画」（平成28年〔2016〕2月策定）および「導入ゾーン整備活用基本方針」（令和2年〔2020〕2月策定）において、整備の方向性を検討した。

これらの内容を踏まえ、基本理念に沿って越堂たたら跡整備の基本方針を以下の内容で設定した。

たたら場操業当時の様子を再現する越堂たたら跡の現地整備

発掘調査による高殿の床釣りの露出展示は朝日たたら跡で行っており、露出展示との役割分担を明確にするため、越堂たたら跡では発掘調査で明らかになった遺構をもとにたたら場の様子を再現して操業当時の臨場感を演出することを目指す。

これにより、見学者が海辺に近い場所でたたら場を操業した様子を現地で感じ取ることができ、海のたたら場の利点や田儀港とつながる製鉄コンビナートの拠点であった姿を想像できる。

たたら製鉄遺構の迫力を体感できるガイダンス施設の整備

越堂たたら跡の発掘調査では、製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを実施しており、実際の床釣りの遺構がそのままの形で間近に観察できる。土層立体剥ぎ取りを中心に田儀櫻井家の製鉄経営および越堂鉦の特徴が把握できる資料を展示して詳しく見学できるガイダンス施設の設置を目指す。

越堂たたら跡は史跡全体の導入ゾーンとしての役割を担っているため、ガイダンス施設のなかで他の史跡への誘導ができる仕組みも同時に考えていく。また、ガイダンス施設は田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会を中心とした地元住民が史跡の保護や活用の活動拠点として利用でき、なおかつ地域の歴史学習に活かすことのできる展示内容や設備を検討する。

こうした基本理念および基本方針（第37図）を掲げて、越堂たたら跡の現地整備およびガイダンス施設の整備についての具体的な整備基本計画の作成に着手した。



第37図 越堂たたら跡整備の基本理念と基本方針

第2節 整備基本計画

1 整備計画の概要

(1) 越堂たたら跡の現地整備計画の概要

現在の越堂たたら跡は西側4分の1が国道9号下に埋没している。また現地の地盤面は国道9号および歩道よりも約2m低いが、平成30年度(2018)の簡易整備(第5章第2節)の立体的な遺構表示や令和元年度(2019)の遺跡名称看板の設置により現地の視認性は確保されている。

その一方で、現地の簡易整備は遺構表示が中心であり、たたら場の操業の様子を見学することは困難となっている。そのため、簡易整備に伴う遺構表示を活かしながらも、たたら場の操業に関連する構造物を立体的な復元製作によって再現することで、見学者に対して操業当時のたたら場の様子を具体的に想起させ、臨場感を訴求できることにつながると考えられた。

こうした状況を踏まえ、越堂たたら跡の現地整備は、地盤整備を行ったうえで製鉄炉や天秤ふいごなどたたら場の操業を具体的にイメージできる立体的な復元製作を中心にを行い、それを補足するための現地説明看板などを設置する計画とした(第38図)。

(2) ガイダンス施設の整備計画の概要

ガイダンス施設については、史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想の内容および史跡の現状と課題(第1章第1節)を踏まえ、史跡のなかで地理的に最もアクセスが容易で利便性が高く、また広域に展開する史跡全体の導入部として重要な役割を担うと考えられる越堂たたら跡周辺に設置することとした。

越堂たたら跡の発掘調査では製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを実施しており、実際の床釣りの遺構をそのままの形で間近に観察できるため、たたら製鉄遺構の迫力が体感できる。こうした床釣りの土層立体剥ぎ取りによる遺構の展示は、全国的にもほとんど実施されていない。床釣りの土層立体剥ぎ取りをガイダンス施設での展示の中心に据え、越堂たたら跡における発掘調査の成果を紹介することで、越堂たたら跡の特徴が具体的に把握できるように計画した。

また、史跡を含めた田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入ゾーンとして、ガイダンス施設では宮本鍛冶山内遺跡や朝日たたら跡などへの誘導ができる展示のほか、越堂たたら跡および田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の理解を深めるために、他の史跡の概要紹介もあわせて行う展示内容を検討した。

さらに越堂たたら跡は、地元住民を中心に組織された田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会が遺跡の草刈りや現地でのガイドを行っているほか、地域の歴史学習の場としても利用されている。こうした地元住民による史跡保護の活動拠点や地域の歴史学習が促進される施設整備を計画した(第39図)。

(3) 看板の整備計画の概要

越堂たたら跡の看板整備は、現地説明看板のほかに越堂たたら跡周辺の看板とガイダンス施設の屋外に設置する看板を計画した。看板の色調や素材についても、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の既存看板の色調に合わせて統一感を持たせた仕様を検討した。



第38図 越堂たたら跡現地整備完成イメージ図



第39図 ガイダンス施設整備完成イメージ図

2 越堂たたら跡現地の整備計画

越堂たたら跡では、発掘調査で確認した遺構表示などを行った簡易整備を基礎としてたたら場の様子を再現するために、遺構表示した本床と小舟の上部に製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を行い、地盤整備も同時に実施する計画とした(第40・41図)。

なお、この現地整備は、国指定史跡であり世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つでもある大板山たたら製鉄遺跡(山口県萩市)の現地整備の状況などを参考にして進めた。

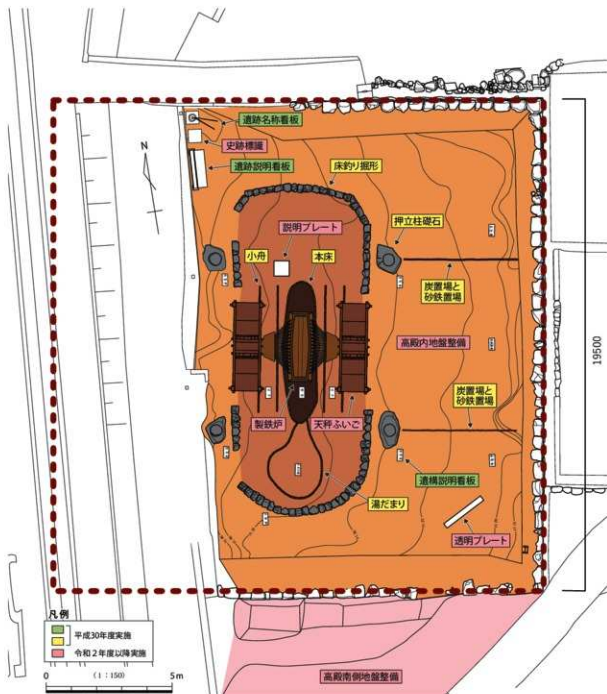
(1) 地盤整備

簡易整備では高殿内の地盤表面は真砂土を敷き詰めたが、真砂土は雨水などにより地表面の土砂が徐々に流れ出し、夏季には草木の繁茂が著しく見学の妨げとなる。地表土の流出や草木の繁茂を防ぐため、高殿内の地表面に透水性のある真砂土舗装などを施工して見学環境を整える必要があった。

また発掘調査で確認した越堂たたら跡の高殿南面石垣は、調査後の埋め戻しで現在一部が確認できなくなっており、高殿南側には造成土などが石垣より高い位置まで堆積していた。これらの造成土などを取り除くことで、見学者が南面石垣を確認して越堂たたら跡の高殿範囲を明確に把握できるため、地盤整備の一環として造成土や埋め戻し土の掘削工事を令和2年度(2020)に実施した。

(2) 製鉄炉の復元

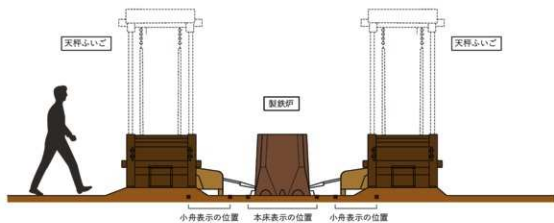
越堂鉦の製鉄炉は残存していないため、当時の正確な寸法は不明だが、製鉄炉の下に設けられた床釣りの一部である本床は発掘調査で寸法が判明しており、そこから規模の推定は可能であった。



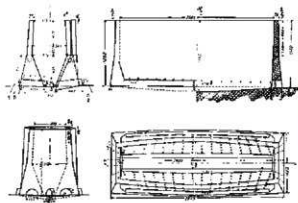
第40図 越堂たたら跡現地整備計画平面図

越堂鉦の製鉄炉の復元には、越堂鉦と同じく日本海沿岸部の「海のたたら」で日本の鉄鋼研究の礎を築いた俄国一博士が明治時代に石見地方で調査した備谷鉦（江津市）の調査記録（依 1933）にある製鉄炉の図面（第42図）や、越堂鉦の高殿と同程度の規模を持ち、全国で唯一高殿が現存する菅谷鉦（雲南市）の高殿内部（第43図）を参考にして復元製作の設計を進めた。なお、菅谷鉦の高殿内部の状況を正確に把握するために3次元測量を実施した⁽¹¹⁾。

製鉄炉の復元製作の素材は、実物の土質感に近い状態を再現できる素材を選定するほか、設置場所である屋外環境のなかで一定の耐久性を持つ素材や加工なども検討することにした。



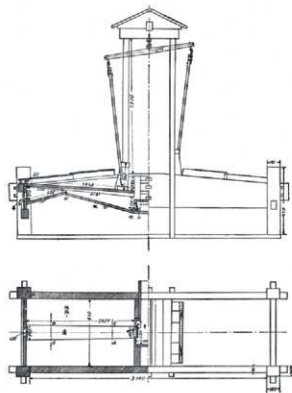
第41図 越堂たたら跡の製鉄炉・天秤ふいご復元製作イメージ図



第42図 備谷鉾の製鉄炉（儀1933より）



第43図 備谷鉾の高殿内部



第44図 備谷鉾の天秤ふいご（儀1933より）



第45図 大板山たたら製鉄遺跡の透過式看板



第46図 大板山たたら製鉄遺跡の史跡標識



第47図 越堂たたら跡の遺跡説明看板

(3) 天秤ふいごの復元

現在の菅谷鉦の高殿内にある水車ふいごは、明治時代後半期に天秤ふいごから代替したものであるため、和鋼博物館（安来市）や奥出雲たたらと刀剣館（奥出雲町）で展示されている天秤ふいごを参照しながら、依国一博士が記録した備谷鉦の天秤ふいごの図面（第44図）をもとに設計を進めた。

天秤ふいごは木製であり、復元製作にあたって木製の部材を中心に素材を選定し、防腐処理を行うなど屋外環境において耐久性を向上させる処置を考慮する必要があった。

また屋外環境では、天秤ふいごの全体的な復元製作を行った場合に、上部構造が風の影響を受けて破損することが懸念され、安全性を優先して土台部分を中心に復元製作を行うことが望ましいと考えられた。土台部分も耐久性を優先した構造で設計し、また製鉄炉への送風管部分の復元製作なども屋外環境における素材の耐久性を考慮しながら検討する必要性を確認した。

(4) 復元イラスト透過式看板と説明プレートの設置

製鉄炉や天秤ふいごの復元で製作できなかった部分は、透過式看板にイラストで表現し、実際に復元製作された部分とイラスト部分を重ねることで臨場感のある操業当時の越堂鉦の姿を体験できる。大板山たたら製鉄遺跡での透過式看板の設置事例（第45図）を参照し、操業の詳しい状況は、復元された製鉄炉や天秤ふいごの近くに設置する説明プレートで確認できるようにする計画とした。

(5) 史跡標識の設置

越堂たたら跡は、平成21年（2009）2月に国史跡として追加指定を受けており、国史跡であることを示す標識や説明板の設置が必要になる（文化財保護法第115条第1項）。大板山たたら製鉄遺跡の史跡標識（第46図）や近隣市内の説明板の設置事例を参照して形状や材質などを具体的に検討した。また設置場所は、簡易整備で設置した遺跡説明看板（第47図）の周辺など目立つ位置を候補とした。

3 ガイダンス施設の整備計画

(1) ガイダンス施設の位置づけ

ガイダンス施設は、田儀櫻井家の基幹たたらとしての役割を担った越堂たたら跡の調査成果について、越堂たたら跡現地では実施できない製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取りを用いた展示や、史跡の導入ゾーンとして他の史跡への誘導や概要の紹介ができる展示内容を目指した。

また多伎町口田儀には文化施設として多伎文化伝習館がある。多伎文化伝習館は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会の事務局も兼ねており、保存会の総会や研修会、および地域学習や関連講座などが開催されている。史跡に造詣の深い方が集まることのできる場所であり、田儀櫻井家に関する資料や民俗資料などが収蔵・展示されている。ガイダンス施設での展示に加え、史跡の研修会や関連講座の開催などソフト面の充実を多伎文化伝習館で補充できるため、多伎文化伝習館と連携する活用策を検討することで、史跡のガイダンス施設としての価値がさらに高まると考えられた。

(2) ガイダンス施設地盤整備の計画

ガイダンス施設整備地の面積は約 1,339㎡である。かつてこの土地は隣接するコンクリート舗装道路よりも地盤が低かったが、簡易的な埋立てが実施され、全体の3分の2ほどの面積が舗装道路と同じ高さで揃えられていた。この状況を可能な限り活かしつつ、周辺にある住宅や民有地との兼ね合いのなかで、水捌けや導水の問題を考慮しながら、地盤改良・コンクリート舗装などの造成を伴う地盤整備の詳細な工法を決定する必要がある。

またガイダンス施設整備地の南東側の水路付近には、越堂たたら跡の史跡指定範囲との間に石垣が存在しており、越堂鉾山内の境界となっていた可能性がある。地盤整備でこの石垣が埋没しないように配慮し、見学が可能な状態を維持できるように検討した。

(3) ガイダンス施設内容の計画

ガイダンス施設の設備

ガイダンス施設は、近接する多伎文化伝習館と連携しながらも、越堂たたら跡の発掘調査で確認した床釣りの遺構の迫力を十分に体感できる設備を持つ方向性が望ましいと考えられた。

施設の内容については、屋内において床釣りの土層立体剥ぎ取りを中心とする展示スペースのほか、トイレや簡易的な倉庫などの便益設備の設置、屋外における駐車場スペースなどを検討した。

また多伎文化伝習館では、屋外での広場などの設備は整備されていない。たたら製鉄に関する体験学習は、製鉄作業の見学や体験など屋外での歴史学習が中心となるため、ガイダンス施設において、体験学習などが実施できる広場を屋外に設けることができれば、屋内での展示内容に加えて歴史学習の幅がさらに広がる可能性を確認した。

ガイダンス施設の外観と形状

越堂たたら跡周辺は集落のなかにあり、ガイダンス施設整備地の周辺も新旧の住宅が建ち並ぶ。ガイダンス施設は周辺の集落景観を考慮した佇まいが求められる。周辺の住宅は木造で屋根に赤瓦や黒瓦が使用されていることが多い。ガイダンス施設の外観を周辺住宅に馴染む色合いにすることで、現在の集落景観を大きく崩さないようにする計画とした。

ガイダンス施設の形状を検討するうえで、出雲市周辺の関連施設の状況を参考にした。菅谷鉾高殿(第48図)は、近世の佇まいを今に伝える柿葺の建物で、伝統的で荘厳な雰囲気を感じ出し、重要な有形民俗文化財としての価値が高い。こうした雰囲気は、越堂たたら跡周辺の集落景観のなかに馴染みやすいが、その一方で、伝統的な建物構造をそのままガイダンス施設の形状に適用すると、集落内に溶け込みすぎて存在感が薄れ、ガイダンス施設としての訴求性が低くなるのが懸念された。



第48図 菅谷鉦の高殿外観（雲南市）



第49図 金屋子神話民俗館外観（安来市）

第50図 和銅博物館外観（安来市）
（写真提供：安来市和銅博物館）第51図 奥出雲たたらと刀剣館外観（奥出雲町）
（写真提供：奥出雲町定住産業課）

その点に関して、建物構造に曲面と方形を取り込んだ現代的な形状の金屋子神話民俗館（安来市）（第49図）は、山間部のなかでガイドンス施設としての存在感を十分に持つ。和銅博物館や奥出雲たたらと刀剣館などの製鉄関連施設（第50・51図）も、現代的な構造を取り入れた形状が採用されている。

また、大板山たたら製鉄遺跡の大板山たたら館（第52図）では、周辺の山間部の景観に馴染みながらも、建材の特性を活かした存在感のある外壁を持つ建物となっている。

これらの事例を参考にとすると、越堂たたら跡のガイドンス施設の建物形状は、周辺の集落景観に配慮した伝統的な建物構造を意識しつつも、現代的な要素を持つ形状や建材の特性を取り入れてガイドンス施設としての訴求性を向上させる必要がある。また建物は越堂たたら跡の高殿にに合わせて設置方位を設定し、外観に本来の高殿建物の風合いが感じられる展示施設にすることとした。これらの検討内容を反映した設置イメージ図など（第53～55図）をもとに形状や外観を仕上げる計画とした。

（4）ガイドンス施設の展示計画

ガイドンス施設の展示は、計画段階で越堂たたら跡の展示、田儀櫻井家関連の展示、そしてその他の史跡などの展示を想定しており、その内容を以下に簡潔に整理した。また展示室の床面中央には、史跡を含めた田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の案内ができるマップ表示の設置を検討した。

越堂たたら跡の展示

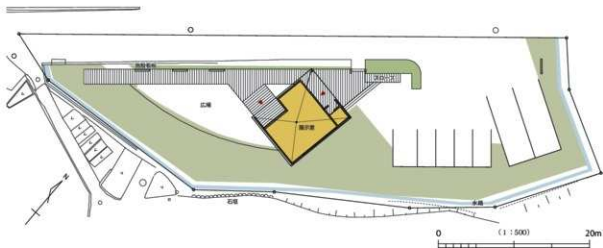
越堂たたら跡の展示は、越堂たたら跡の発掘調査成果をもとにたたら製鉄遺構の迫力を伝える整備



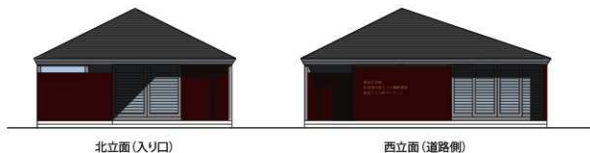
第52図 大板山たたら館外観（山口県萩市）



第53図 ガイダンス施設整備地（簡易埋立前）



第54図 ガイダンス施設配置イメージ図（基本計画段階）



第55図 ガイダンス施設外観イメージ図（基本計画段階）

内容を中心とした展示を目指した。

越堂たたら跡における製鉄炉の床釣りの土層立体剥ぎ取り（第56図）を展示の中心に据え、その床釣りの解説や発掘調査の成果および田儀櫻井家のたたら製鉄経営のなかで越堂鉦が果たした役割などの情報を展示パネルで紹介する。また展示パネルだけではなく、液晶モニターを設置して越堂たたら跡や調査成果などを紹介する動画による映像展示（第57・58図）を実施することを検討した。



第56図 越堂たたら跡の床釣り(左)と土層立体剥ぎ取り(右)



第57図 大板山たたら館の映像展示の液晶モニター

第58図 越堂たたら跡の3次元モデル映像

田儀櫻井家関連の展示

田儀櫻井家関連資料の展示は、越堂鉦などにおける製鉄関連具や地元の田儀地区に残る製鉄関連の道具など、田儀櫻井家やたたら製鉄に関連のある展示を行い、たたら場の操業の様子や田儀櫻井家の製鉄経営とつながりの深い田儀港とその廻船業などへの理解を深めることを目的とした。

こうした田儀櫻井家関連の展示は、出雲市が保管・管理する発掘調査の出土品や田儀櫻井家関連資料のほか、地元には伝わる田儀櫻井家ゆかりの品などを地元の協力を得ながら展示品の候補としており、資料の維持管理の問題も含めて地元と共同で展示内容を検討した。またガイダンス施設の防犯対策上の課題もあり、様々な方向性を踏まえて検討を重ねることとした。

その他の史跡等の展示

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、越堂たたら跡を含めて4箇所が国史跡に指定されており、他の3箇所(宮本鍛冶山内遺跡、朝日たたら跡、聖谷たたら跡)の史跡を紹介することで、田儀櫻井家のたたら製鉄経営の特質について理解を深めることができる。

越堂鉦は「海のたたら」であるが、朝日鉦と聖谷鉦は「山のたたら」である。両者を同時に操業したことが田儀櫻井家のたたら製鉄経営における最大の特質であり、なおかつ江戸時代の製鉄コンビナートと呼べる独自の経営体制を生み出した要因でもあるため、田儀櫻井家関連の展示内容を踏まえて、こうした点を分かりやすく紹介する。また、田儀櫻井家と関連する奥出雲の鉄師にも触れ、出雲国のたたら製鉄における田儀櫻井家の位置づけを確認できる展示を目指した。

4 周辺看板の整備計画

(1) 看板の設置計画

越堂たたら跡の現地整備とガイドランス施設整備のほか、視認用史跡名称看板、関連文化財説明看板、現地誘導看板、施設案内看板などの周辺看板を設置する計画を立て、見学動線を検討した（第59図）。

視認用史跡名称看板

越堂たたら跡は国道9号に隣接しており、多くの見学者は国道9号を利用してこの場所を訪れる。そのため、国道9号を走る車から明確に史跡の名称（国史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡／越堂たたら跡）が確認できる視認用の史跡名称看板を設置する必要があった。

関連文化財説明看板

越堂たたら跡現地周辺には、山内通路の石垣や金屋子神社跡、田儀川沿いの岩盤に掘り込まれた水路跡、山内東側の亀山山麓にある如来坐像（田儀櫻井家の6代目義民が願主）などが確認できる。これらは越堂鉦関連の文化財であり、関連文化財の説明看板を設置して紹介できるように検討した。

現地誘導看板

越堂たたら跡現地の周辺に存在する関連文化財の位置は、場所の案内が無い状況では分かりにくく、見学動線に沿って誘導看板の設置が必要であった。

施設案内看板

ガイドランス施設整備地において、ガイドランス施設を訪れた見学者に施設名称を示す役割を担う看板の設置を検討した。

(2) 看板の色調の検討

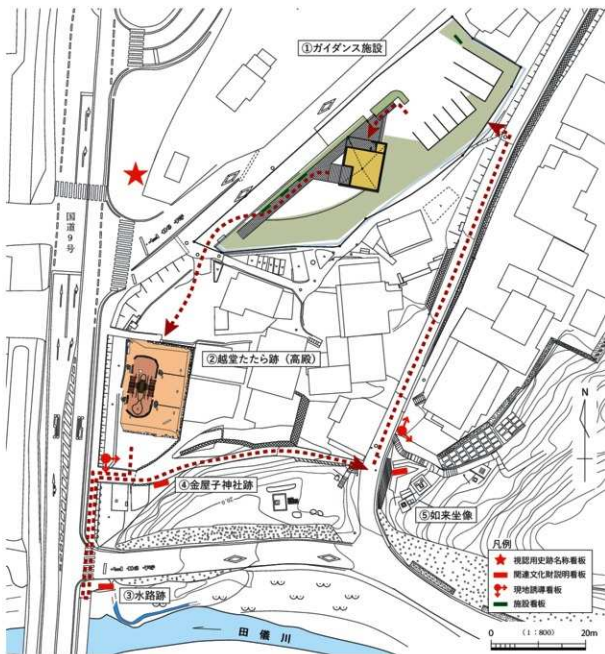
田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の史跡関連看板は、同系統の色調を用いることで史跡全体の統一感を演出することを意識した。宮本鍛冶山内遺跡や越堂たたら跡の既存看板の色調である「茶褐色」を基本として、市内で看板や囲障など大型の構造物（第60・61図）で使用される茶褐色系の素材の使用や、茶褐色系の色調に類似した表面塗装などを採用する方向性で検討した。

註

- (1) 菅谷鉦の高殿内部の3次元測量は、雲南市教育委員会および公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団の協力を得た。

参考文献

- 依 国一 1933『古来の砂鉄精錬法 たたら吹製鉄法』丸善



第59図 ガイダンス施設・越堂たたら跡現地および関連文化財の見学動線計画（基本計画段階）



第60図 J R田儀駅前の看板



第61図 島根県立古代出雲歴史博物館の囲障

第3節 実施設計

1 製鉄炉・天秤ふいご復元製作と看板設置の設計

越堂たたら跡整備基本計画の内容をもとに、製鉄炉と天秤ふいごの復元製作に必要な工事図面を含む設計関連資料の作成を行った。製鉄炉と天秤ふいごの復元製作や周辺看板に係る図面は、史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会で設置位置などを検討しながら補足や修正などを進めた（第62図）。工事図面などは、第5章第3節の現地整備工事のなかで具体的に提示する。

2 ガイダンス施設の実実施設計

ガイダンス施設の実実施設計は、整備基本計画の内容を踏まえつつ、設計関連資料などを作成して整備検討委員会にて議論を深め、建物整備と地盤整備、および展示施工構想（第63図）の設計を行った。なお、建物配置予定地の周辺は、スウェーデン式サウンディング試験機を用いて地盤調査を実施し（第64図）、建物の建築に伴う沈下の可能性が低いことを確認した。

建物と周辺整備の実実施設計は、整備検討委員会で内容を検討し（第65図）、建築住宅課や都市計画課などの協力を得て工事図面の補足や修正を行った。工事図面などは、第5章第4節のガイダンス施設の整備内容で報告する。



第62図 看板設置位置の検討（第23回委員会）



第63図 ガイダンス施設展示イメージ図



第64図 建物配置予定地周辺の地盤調査状況



第65図 実施設計の検討（第24回委員会）

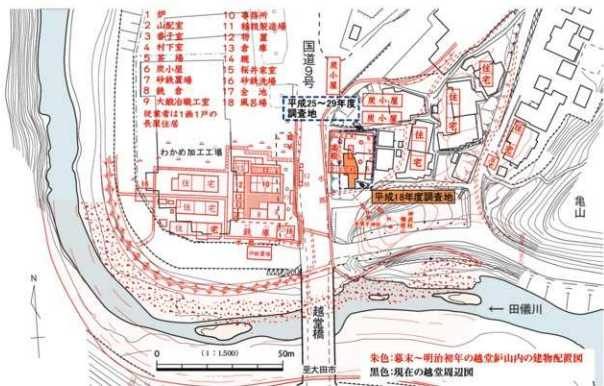
第5章 越堂たたら跡の整備内容

第1節 調査成果の概要

越堂たたら跡は、これまで平成18年度(2006)および平成25年度(2013)から平成29年度(2017)の2度にわたる発掘調査が実施され、その実態解明が進んでいる。第3章では田儀櫻井家のたたら製鉄やその特質、そのなかで越堂鉦の位置づけを確認したが、ここではまず、越堂たたら跡の整備内容の前提となる既往の調査成果について概観する。

1 『田儀村誌』掲載の建物配置図

越堂鉦の詳しい様子が広く知られるようになったのは、多伎村役場が刊行した『田儀村誌』(渡辺ほか編1961)に掲載された越堂鉦山内の建物配置図(第66図)によるところが大きい。建物配置図は幕末から明治初年の様子を描いたものとされ、高殿の位置や高殿内部にある製鉄などの配置のほか、事務所や鉄庫、砂鉄置場や炭小屋といった製鉄関連の建物や住宅、そして金屋子神社の位置が詳細に記されており、当時のたたら製鉄における山内の様子が具体的に把握できる貴重な資料である。配置図に描かれた田儀川沿いの水路や金屋子神社が存在した権現山などは現在も残されている。なお、今回の整備事業の一環として、越堂鉦山内の建物配置図をもとに当時の山内景観や田儀港の復元イラストを作成した(第1章第2節第14～16図)。



第66図 『田儀村誌』掲載の越堂鉦山内建物配置図と調査位置

2 基礎調査（平成15年度）

多伎町が平成12年（2000）に計画した「第4次多伎町総合振興計画」のなかに「宮本史跡公園整備事業」が位置づけられ、田儀櫻井家のたたら製鉄の重要性が広く認識されるようになったが、その一方で遺跡の実態はほとんど知られていなかった。そうした状況を受けて、平成15年度（2003）に多伎町において「宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査事業」が立ち上がり、考古学・歴史学・民俗学・建築学などの各分野の専門家からなる学術的な調査委員会が組織され、総合的な基礎調査を実施した。その成果は基礎調査報告書（田中・松尾編2004）としてまとめられている。この基礎調査の成果によって、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は近世たたら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として評価され、平成18年1月に宮本鍛冶山内遺跡（多伎町奥田儀）と朝日たたら跡（佐田町高津屋）が国史跡に指定された。

基礎調査のなかで、越堂たたら跡周辺は『田儀村誌』に掲載された建物配置図を手掛かりに踏査が実施されており、田儀川の河岸に残る低い丘陵が建物配置図のなかで金屋子神社が造立された権現山である可能性が確認された。その一方で、たたら場の詳細な内容は、建物配置図の正確性を含め、発掘調査などで確認する必要性が指摘された。

3 発掘調査（平成18年度・平成25～29年度）

（1）大殿内の確認調査（平成18年度）

基礎調査の成果を受けて、越堂たたら跡の実態把握や『田儀村誌』に掲載された建物配置図との関係の確認などを主眼に置いた内容確認調査を平成18年度に実施し、その調査成果を報告した（石原編2008）。この確認調査では、発掘調査に先立って建物配置図の内容と現況の地形を照らし合わせて検討しており、金屋子神社が建立された権現山のほか、田儀川沿いの水路や高殿建物の石垣も確認している。こうした状況を勘案して、建物配置図で製鉄炉が示されている地点を含めて高殿内に調査区（約54㎡）を設定し、発掘調査を実施した。

発掘調査では、調査区北半分において防湿や保温を目的とした製鉄炉地下構造である床釣りの一部の本床や小舟、掘形と跡坪壁面の石積みの一部を確認したほか、製鉄炉から流れ込んだ鉄や鉄滓が滞留したとみられる湯溜まり状遺構が見つかり、たたら場の存在が具体的に明らかになった。本床は製鉄炉下に設けられた施設であるが、その位置が『田儀村誌』の建物配置図における製鉄炉の位置と概ね合致するため、建物配置図はかなり正確に当時の越堂鉦山内の様子を描いている蓋然性が高いことが明らかになった。この調査成果によって、越堂たたら跡は平成21年（2009）2月に聖谷たたら跡（多伎町奥田儀）とともに国史跡の追加指定を受けることとなった。

（2）高殿内・周辺全体の確認調査（平成25～29年度）

平成18年度の発掘調査で『田儀村誌』掲載の越堂鉦山内の建物配置図が当時の様子を示す可能性が考えられ、床釣りの存在も確認された。それを受けて、高殿内とその周辺の遺構の残存状況を確認するため、平成25年度から平成29年度に発掘調査を行った（榑中編2022）。

発掘調査では高殿を支える押立柱の礎石などが見つかり、高殿の規模や内部の施設配置が確認できたほか、床釣りの掘形や本床・小舟の詳しい構造が明らかになった(第67～78図)。これらは越堂鉦が稼働した約150年間の作業期間のなかで、越堂鉦操業3・4期(田儀櫻井家経営後半)の高殿の遺構であり、その下層から炭置場や砂鉄置場、礎石列など越堂鉦操業2期(田儀櫻井家経営以前から前半期)の作業面が確認された。さらに高殿外側には、越堂鉦操業1期(田儀櫻井家経営以前)の暗渠施設が高殿全体を廻るように構築されており、また床釣りや高殿南面石垣では複数の造り替え痕跡が見つかるなど、越堂鉦の長期間操業のなかで高殿が何度か改修された様子が具体的に確認できた。

(3) 床釣りの地中レーダー探査(平成29年度)

平成25年度から平成29年度の発掘調査は、越堂鉦操業3・4期の床釣り上部の本床と小舟を含む本床釣り部分までを対象としたが、下部の下床釣りは遺構保護の観点から掘削せず、本床釣り床面からの地中レーダー探査によって下床釣りの構築状況を推定する方法を採用した。地中レーダー探査は、地中に向かって電磁波を送信し、地層や空洞などの境界面で発生する反射波を地表で観測する方法である。反射波は地中の物性境界面を示しているため、設定した測線において連続的に反射波を観測することで、地中構造が推定可能な結果を取得することができる。

探査の結果、3箇所の高さで物性境界面を示す高い反応が得られ、下床釣りに伴う構築面の一部の可能性が考えられた(第79図)。反応のあった最下面の深さは、越堂鉦操業4期の床釣り上面から概ね3.04mであると推定できた。この面が床釣り掘形の床面を示していると仮定すると、発掘調査によって下床釣りの構造が確認されている朝日たたら跡や弓谷たたら跡と同程度の深さとなり、伏樋や坊主石、火落とし穴などの複雑な構造を持つこれらのたたら場と同程度の下床釣りが構築されていた可能性がある。

また、19世紀中頃に田儀櫻井家のたたら製鉄経営で村下や炭坂を任された川上家の文書史料にあるたたら普請や床釣りの修繕の記録には、床釣りの掘り下げが約3.03mであると記されている。そのため、地中レーダー探査で得られた測定値が文書史料の記録と概ね合致することが確認された。

4 試掘確認調査(平成27年度)

越堂たたら跡は、平成24年(2012)に策定された史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想のなかで、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入部として近接地にガイダンス施設設置の方針を示していた。そのため、越堂たたら跡の史跡指定範囲隣接地(ガイダンス施設整備地)(約1,339㎡)に越堂鉦山内に関連する遺構の有無を確認する必要があり、平成27年度(2015)に合計21箇所 2×2 mのトレンチを設定し、重機掘削による試掘確認調査を実施した(第80図上)。なお、史跡指定範囲隣接地において設定したトレンチのなかで最も高い地表面の標高が約9.6m、最も低い地表面の標高は約8.4mであり、最大で1.2m程度の高低差が生じている。

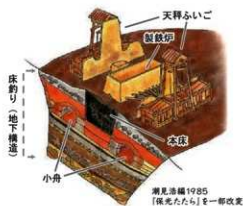
試掘確認調査の結果、越堂鉦山内関連の遺構は確認できなかったが、史跡指定範囲隣接地のなかで越堂鉦山内に隣接する南西側では、概ね標高8.2m前後の位置で鋤床層が存在しており、この範囲に田が広がっていたことが各トレンチの土層堆積状況(第80図中・下)から確認できた。明治初年頃の



第 67 図 越堂たたら跡周辺全体オルソ図 (調査完了後)



第68図 越堂鉦の高殿内部の復元



第69図 越堂鉦の床約り模式図



第70図 越堂たたら跡の主な発掘調査成果オルソ図 (平成25～29年度)



第71図 越堂たたら跡高殿周辺全景



第72図 高殿内部の遺構



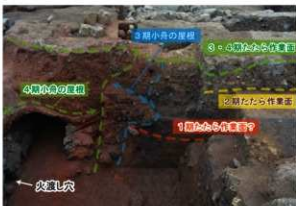
第73図 押立柱4の礎石と墨書土器



第74図 高殿南面石垣の造り替え痕跡と暗渠施設



第75図 東小舟（南側）と火渡し穴・息抜き穴



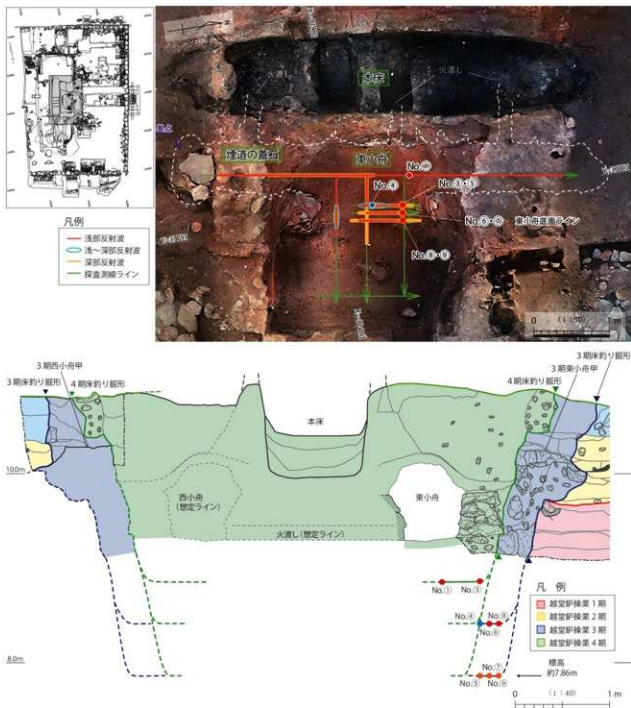
第76図 東小舟（北側）と床約りの造り替え痕跡



第77図 東小舟（南側）内部煙道



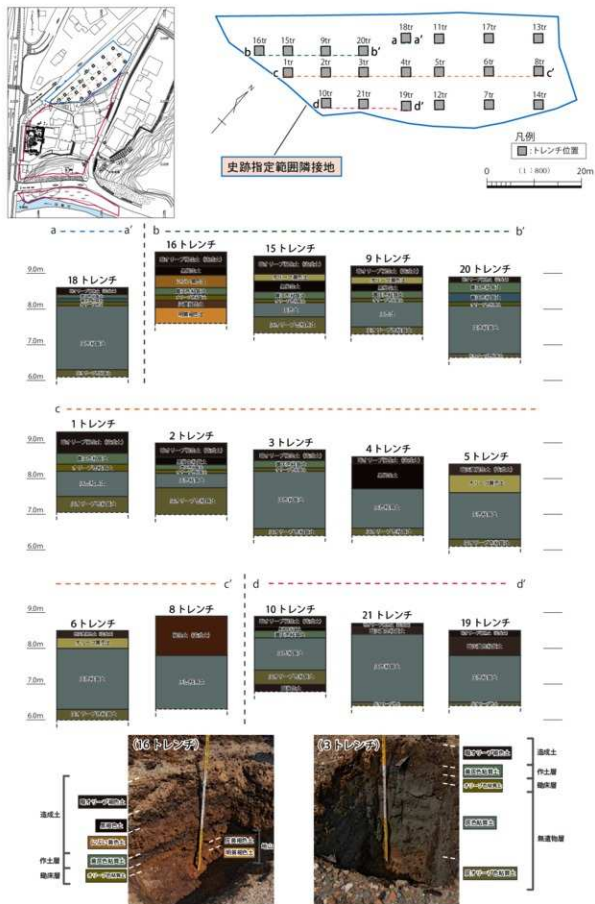
第78図 東小舟（北側）内部焚口



第79図 地中レーダー探査による下床約りの推定

口田儀村の絵図(出雲国第三十四区神門郡口田儀郷図面)には越堂鉦周辺の様子が描かれ、これらの歴史的景観や当時の土地利用の変遷が考察されている(藤原2008)。絵図の内容を確認すると、史跡指定範囲隣接地に該当する場所は、この当時には田であったことを確認した。

そのため、今回の試掘確認調査で認められた鋤床層の正確な時期は不明であるが、たたら場操業当時の田の痕跡を示す可能性が考えられる。その場合、この周辺の当時の地表面は標高8~9m程度であったことが推測され、概ね標高9.5mの越堂鉦の高殿石垣の底面よりもやや低い位置で田が広がっていたという当時の景観が復元できる。



第80図 試掘確認調査のトレンチ位置(上)と土層堆積柱状図(中)・土層堆積状況(下)

5 製鉄関連具の調査

田儀櫻井家のたたら製鉄経営で村下や炭坂を任せられた川上家は、延享期（1744～1748年）頃から越堂鉦山内に代々居住していたと考えられ（庄司2009）、打鉞や種鋤、釜がいなどの製鉄具（第81図）が残されていた。

そのほか、たたら製鉄や鍛冶、鋳物師など金属生産・加工に従事した人々に篤く信仰された金屋子神の可能性のある神像や、越堂鉦などで産出したと推測される初花が川上家で大切に保管されており（第82図）、信仰の対象として祀られていたと考えられる。

6 史跡周辺の文化財

越堂鉦山内には、金屋子神社が造立された権現山（第83図）や、たたら場の砂鉄の水洗や生活用水などに利用されたと考えられる田儀川沿いの水路（第84図）のほかにも、山内通路に伴う石垣や如来坐像など、越堂鉦山内の景観や人々の信仰を今に伝える関連文化財が残されている。

（1）山内通路に伴う石垣

『田儀村誌』掲載の建物配置図には、山内の各施設を結ぶ通路が描かれている。現在、集落の里道として使われている通路の位置が建物配置図の高殿から炭小屋や住宅に続く通路と概ね合致しており、当時の山内における通路の名残をとどめている。通路は石垣を伴っており（第85図）、石垣上部は近現代に改修されたと考えられるが、石垣下部はたたら場が稼働していた時期に構築された可能性が高いと考えられる。

（2）如来坐像

越堂鉦山内の東側にある亀山山麓には、6代目当主の幸左衛門義民が願主として記された如来坐像が確認されている（第86図）。如来坐像は福光石製であり、左手には薬壺を携えていると推測され、薬師如来の可能性がある。背面に「願主／雲岳越道櫻井幸左衛門」と記されており、義民が活躍した18世紀後半頃に造られたと考えられる。如来坐像は、越堂鉦山内を見渡せる場所に鎮座しており、当時の越堂鉦山内で信仰の対象となっていたことが推測される。



第81図 製鉄具（左から打鉞・種鋤・釜がい大・釜がい小）



第82図 神像（左）と初花（右）



第83図 越堂たたら跡(手前)と権現山(奥)(北西から)



第84図 田儀川沿いの水路(南西から)



第85図 山内通路に伴う石垣(西から)



第86図 亀山山麓の如来坐像(正面向かって右)

参考文献

- 石原 聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—』出雲市の文化財報告1 出雲市教育委員会
- 潮見 浩編 1985『保光たたら』保光たたら発掘調査団
- 庄司幸恵 2009「目録解題 智光院文書」『田儀櫻井家 たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8 出雲市教育委員会 194頁
- 田中義昭・松尾充晶編 2004『田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会
- 幡中光輔編 2022『越堂たたら跡—発掘調査と文献調査・文書目録—』史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ・出雲市の文化財報告50 出雲市教育委員会
- 藤原雄高 2008「絵図からみた田儀櫻井家の遺跡」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書—平成16～18年度の調査—』出雲市の文化財報告1 出雲市教育委員会 116～126頁
- 渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場

第2節 簡易整備

越堂たたら跡の発掘調査終了後は遺構保護のために真砂土や掘削土で全体を埋め戻した。この時点で整備事業が本格化するのには数年先となる状況であった。そのため、本格的な整備前に越堂たたら跡の現地を簡易的に整備して見学者へ対応する必要があることを地元との協議のなかで確認した。

越堂たたら跡の簡易整備は、平成28年度（2016）から史跡田儀櫻井家たたら製鉄整備検討委員会や地元協議会のなかで内容の検討を進め、平成30年度（2018）に実施した。ここでは、本格的な現地整備の基礎となった簡易整備の内容（第87図）を報告する。

1 遺跡説明看板と遺跡名称看板の設置

越堂たたら跡の現地を訪れた見学者の理解を促すため、これまでの越堂たたら跡の発掘調査成果および田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の概要が分かる遺跡説明看板を設置した（第88～90図）。看板は全高が1,800mm、板面は幅1,500mm、高さ800mmで、上下2段の板面で構成されるアルミ複合板に付け替え可能なプリントシートで内容を表示し、表面にUVラミネート加工を施した。

越堂たたら跡の整備目的は、越堂たたら跡や田儀櫻井家のたたら製鉄全体の歴史的な価値とその重要性を見学者に分かりやすく紹介するとともに、地域の歴史学習の題材として幅広い世代に親しまれ、地元の史跡保護活動などの拠点となることである。そこで地域の歴史学習に役立てる整備を実現させるため、遺跡説明看板の内容は、整備検討委員会や地元協議会のなかで検討を重ねるとともに、出雲市内の中学校の社会科教員を対象に実施したアンケート調査などの意見を反映させて読み取りやすい内容に仕上げた。

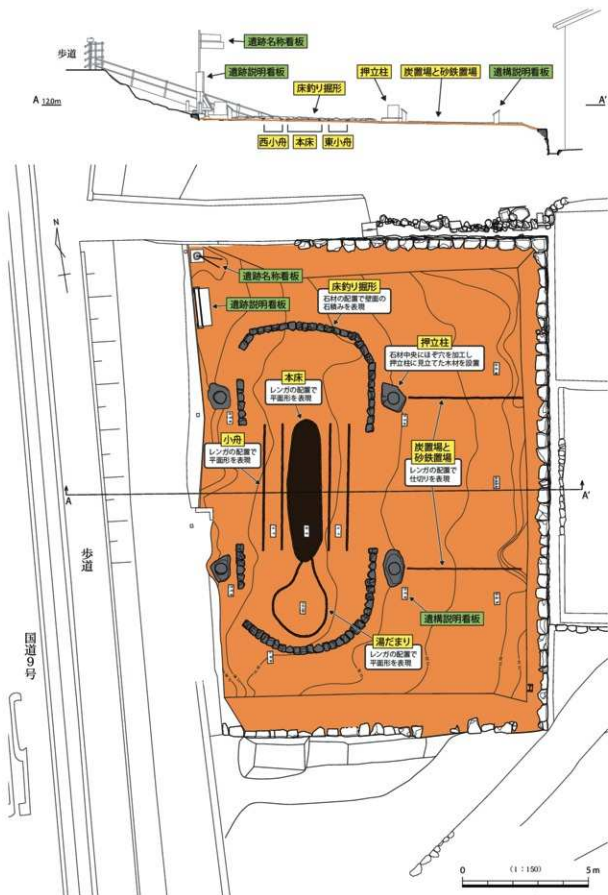
なお、越堂たたら跡の現地は国道9号および歩道の地盤面から約2m低くなっている状況であるため、令和元年度（2019）に田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会が遺跡の名称看板（高さ約3.5m）を設置しており（第91図）、国道9号側から見た越堂たたら跡現地の視認性を向上させている。

2 遺構表示の整備

遺跡説明看板に示した越堂たたら跡の高殿内の様子を実際に現地で確認できるように、遺構の平面形状を中心に現地に表示する整備を行った（第92・93図）。表示した遺構は、床釣り（本床・小舟・床釣り掘形）と湯溜まりの平面形状、炭置場と砂鉄置場の位置、そして押立柱の一部とその礎石である。

本床、小舟、および湯溜まりは、レンガを配置して遺構の平面形状を表示した。炭置場と砂鉄置場の位置は、場所の境界を示す仕切りをレンガの配置で表現している。また床釣り掘形に関しては、発掘調査のなかで床釣り掘形の壁面に石積みを確認しており、それを石材の配置で表示した。

押立柱とその礎石は、立体的な構造物として復元し、表示することにした。押立柱の礎石が確認された位置を中心に礎石の類似石材を配置しており、石材の中央部には発掘調査で確認できた直径約47cm程度のほぞ穴を加工して表現した。ほぞ穴上には押立柱に見立てた木材（高さは約50cm程度）を設置して立体的に認識できるように整備した。

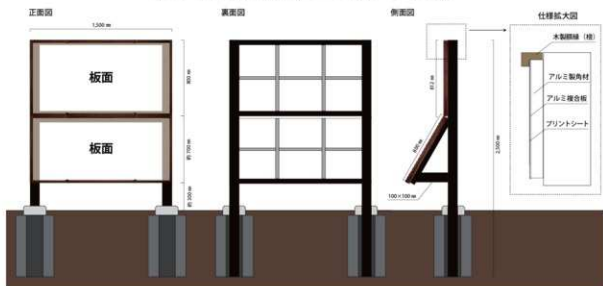


第 87 図 越堂たたら跡現地簡易整備平面図・見通し断面図

これらの方法で設置した遺構表示が、遺跡説明看板で記している名称と対応して確認できるようにするため、それぞれの遺構表示の近くに遺構名称看板を設置した(第94～96図)。遺構名称看板の表示プレートは、板面が幅450mm、高さ250mmのアルミ複合板にプリントシートを貼り付けて名称を表示し、高さ450mmの木柱に取り付けた。なお、アルミ複合板はアルミ枠に差し込んでおり、アルミ複合板を取り替えることで内容の変更や劣化による交換に対応できる仕様にした。



第88図 遺跡説明看板内容(上:上段板面 下:下段板面)



第89図 遺跡説明看板図面(S=1/40)



第90図 遺跡説明看板設置完了状況（平成30年度）



第91図 遺跡名称看板（保存会設置）（令和元年度）



第92図 遺構表示設置工事状況（平成30年度）



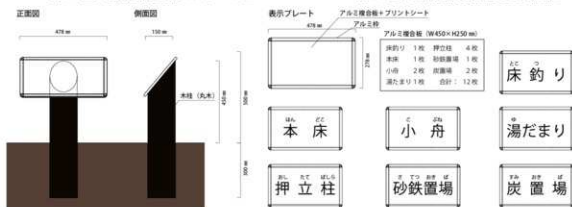
第93図 遺構表示（平成30年度）



第94図 遺構名称看板（平成30年度）



第95図 遺構名称看板差し替え仕様



第96図 遺構名称看板断面（S=1/20）

第3節 現地整備

越堂たたら跡の本格的な現地整備は、越堂たたら跡整備基本計画の内容に沿って令和2年度(2020)から令和4年度(2022)に実施した(第97・98図)。ここでは、その内容について報告する。

1 令和2年度の現地整備

令和2年度は整備基本計画を策定するとともに、現地整備は越堂たたら跡高殿南側の地盤整備を実施した。越堂たたら跡の発掘調査で確認した高殿南面石垣は、調査後の埋め戻しで一部が現地で確認できなくなっており、高殿南側には造成土などが石垣より高い位置まで堆積する状況であった。これらの造成土などを取り除くことで、見学者が南面石垣を確認して越堂たたら跡の高殿範囲を明確に把握できるため、地盤整備の一環として重機や人力で造成土や埋め戻し土の掘削を行った(第99・100図)。掘削によって南側からの視界が開け、高殿南面石垣や高殿全体の見通しが良好になった。

2 令和3年度の現地整備

令和3年度(2021)の現地整備は、国指定史跡の名称や指定日などを表示する史跡標識(第101・102図)、および製鉄炉と天秤ふいごの復元内容の概要を示した説明プレートの設置を行った(第103～106図)。また、その後に高殿内の地盤整備として地表面に真砂土舗装を施工した(第107図)。

(1) 史跡標識の設置

史跡標識の法量は、幅300mm、奥行き300mm、高さ1,800mmの四角柱で、石材は越堂たたら跡周辺の景観に馴染む色合いを持つ来待石を採用した。来待石は、松江市穴道町来待地区で主に産出される凝灰質砂岩であり、古くから出雲地方を中心として石造物に利用されている。

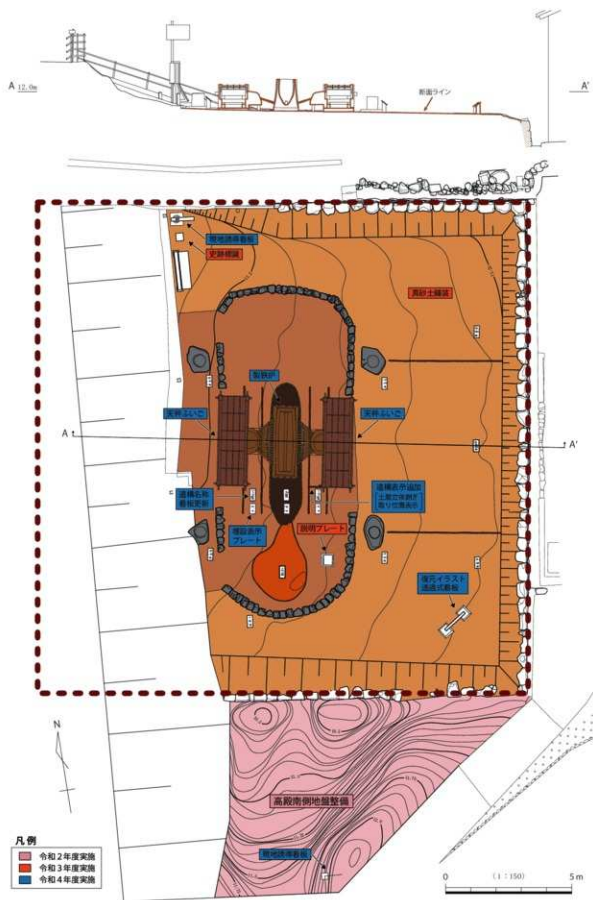
史跡標識の正面は史跡名称、左側面は建立年月日、右側面は史跡の指定年月日を陰刻で表記した。なお、これらの題字は多伎町口田儀にある本願寺の恒松道保住職に依頼した。

(2) 説明プレートの設置

平成30年度(2018)の簡易整備では、調査で確認した湯溜まりの平面形をレンガの配置で表示した。令和4年度に実施予定であった製鉄炉や天秤ふいご土台の復元製作と合わせてたたら操業当時の様子



第97図 越堂たたら跡現地整備完了状況(左:北西から 右:南西から)(令和4年度)



第98図 越堂たたら跡現地整備平面図・見通し断面図



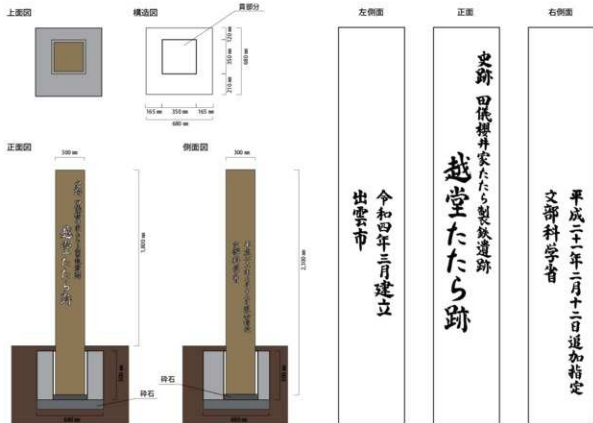
第99図 高殿南側地盤整備工事状況（令和2年度）



第100図 高殿南側地盤整備完了状況（令和2年度）



第101図 史跡標識（令和3年度）



第102図 史跡標識図面（5=1/40）

を再現しており、また見学者の理解を促すために内容を補足して説明するプレートを設置した。

説明プレートの法量は幅 500mm、奥行き 500mm、高さ 450mm であり、石材は史跡標識と同じく来待石製である。説明の表示面は座彫りで、縦 400mm、横 400mm のステンレスプレートを埋め込んだ仕様となっている。ステンレスプレート表面には、プリントシートを貼り付けて UV ラミネート加工を施し、板面の説明内容に変更が生じた場合や経年劣化で退色した場合に備え、貼り替えが容易にできる仕様を採用した。

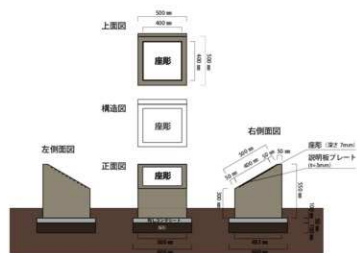


第 103 図 説明プレート内容案 (左: 第 21 回委員会) と設置位置検討 (右: 第 22 回委員会)



第 104 図 説明プレート設置工事状況 (令和 3 年度)

第 105 図 説明プレート (令和 3 年度)



説明プレート内容



第 106 図 説明プレート図面 (S=1/40)

整備検討委員会のなかで、表示内容は製鉄炉から鉄が湯溜まりに流れ出ている状況をイラストで描き、また説明プレート自体は製鉄炉の復元と湯溜まりの遺構表示を見たときにイラストと同じ方向に見えるように湯溜まりの遺構表示付近に設置することを確認した。その他には製鉄炉の地下構造である床釣りの構造や、製鉄炉および天秤ふいご復元にあって越堂鉦と同じ「海のたたら」である日本海沿岸部のたたら場（備谷鉦）の調査記録を参照した点を簡潔に記した。

(3) 真砂土舗装の実施

地盤整備としては、越堂たたら跡現地の見学者が円滑に遺構表示や設置看板などを見学できるように、高殿内の床釣り周辺の地表面において真砂土とコンクリートおよび色粉を混合した真砂土舗装を行った。真砂土舗装の厚みは地盤の勾配を調整しながら50mm前後とした。なお、簡易整備で地表面に埋設したレンガによる遺構表示が埋設しないように調整しながら施工を行った。

2 令和4年度の現地整備

令和4年度の現地整備は、製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を実施し⁽¹⁾、現地に設置した(第108図)。また、高殿南東側から見ると復元した製鉄炉と天秤ふいごの構造やたたら操業の様子が分かる復元イラスト透過式看板を設置した。その他には、越堂たたら跡の周辺にある関連文化財の説明看板、ガイダンス施設から越堂たたら跡現地および周辺の関連文化財に案内する現地誘導看板など、越堂たたら跡の現地周辺に看板を設置した。



第107図 真砂土舗装施工状況(令和3年度)



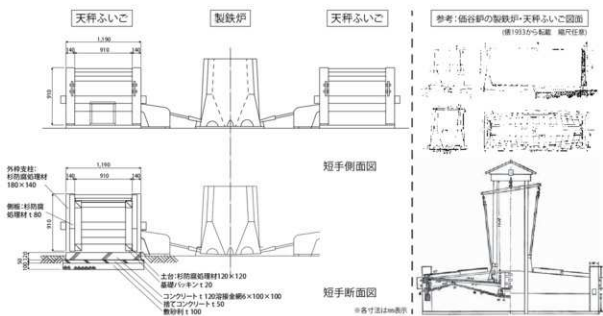
第108図 製鉄炉・天秤ふいごの設置位置確認(左)と設置状況(右)(令和4年度)

(1) 製鉄炉・天秤ふいごの復元製作

越堂たたら跡の現地整備に伴う製鉄炉と天秤ふいごの復元製作（第109図）は、日本海沿岸部の海のとたたらで日本の鋼鉄研究の基礎を築いた依国一博士が明治時代に石見地方で調査した備谷鉿（江津市）の調査記録（依 1933）における製鉄炉や天秤ふいごの図面を基礎としている（第110・111図）。その他には現存する菅谷鉿（雲南市）の高殿内部や和鋼博物館（安来市）および奥出雲たたらと刀剣館

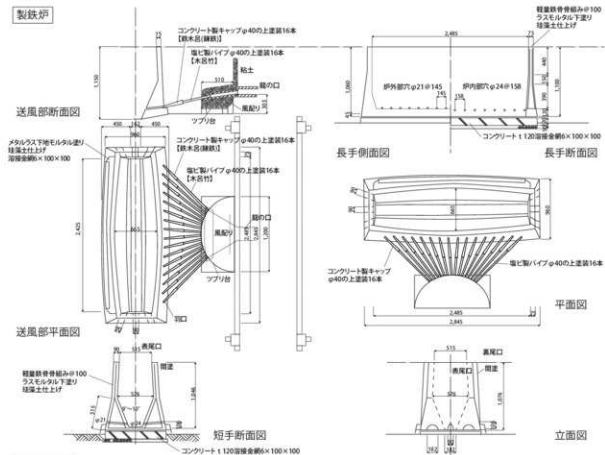


第109図 製鉄炉・天秤ふいご復元製作（左上：南から 右上：南東から 左下：南西から 右下：北西から）（令和4年度）

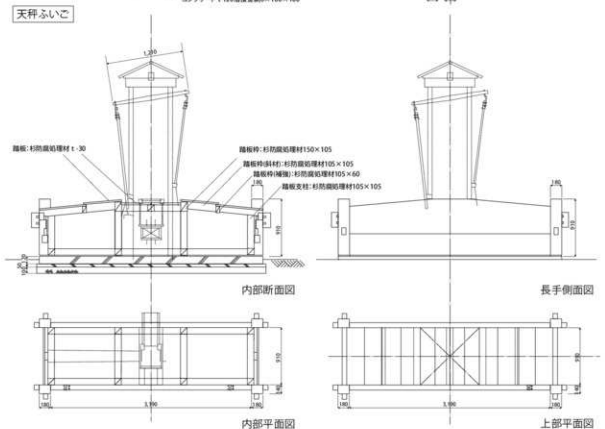


第110図 製鉄炉・天秤ふいご復元製作図面（1）（5=1/60）

製鉄炉



天秤ふいご



第 111 図 製鉄炉・天秤ふいご復元製作図面 (2) (5=1/60)



第112図 製鉄炉の製作状況 (左:メタルス下地 右:モルタル塗り) (令和4年度)



第113図 製鉄炉の珪藻土仕上げ (左) (令和4年度) と菅谷鉦の製鉄炉 (右)



第114図 天秤ふいこの部材 (左:スギ材) と加工状況 (右) (令和4年度)



第115図 防腐剤を含浸処理した天秤ふいこの部材 (左) と組み立て状況 (右) (令和4年度)

(奥出雲町)での展示品を参照しながら復元製作を行った。

製鉄炉

復元した製鉄炉本体の骨組みは、メタルラス下地のモルタル塗りで、表面は珪藻土で仕上げている(第112・113図左)。表面の珪藻土は、製鉄炉本来の土壁に近い色の原材料を選定し、また当時の風合いが表現できるように菅谷鉦の高殿内にある製鉄炉の風合い(第113図右)を参考にしながら表面の珪藻土塗りを施工した。

製鉄炉の形状は、日本海沿岸部に多い鉄押し法で操業されており、山間部で主流となる鋳押し法の製鉄炉よりもやや長細い形状となっているのが特徴である。その点に留意して菅谷鉦の調査記録を参照しながら復元している。また、天秤ふいごから炉内に送風する実物の送風管は鉄木呂と木呂竹で構成されているが、今回の復元製作では耐久性を考慮してコンクリート製のキャップと塩ビ製のパイプを塗装したもので施工した。なお、炉内の底面は雨水が溜まるのを防ぐために中央から南北へ角度をつけて炉の流出孔から排出される構造になっている。

天秤ふいご

製鉄炉を挟んで東西に配置される天秤ふいごの復元製作は、踏台より上の天秤棒などの上部構造は対象とせず、踏板より下部の土台部分を復元した⁽²⁾。天秤ふいごの復元の材質はスギ材を用いており、プラスチック製擬木やスチール製素材などを使用せずに木製で天秤ふいごを復元することで、より実物に近い風合いを演出することを目指した(第114図)。その反面、他の素材に比べて耐久性が低くなる課題があったため、材料のスギ材は防腐剤を含浸処理する方法による防腐処理を施し、屋外の環境に対する耐久性の向上を図った(第115図左)。

材質の木材は、外側から見える部分にはできるだけ釘を使わずに木材の組み合わせで構築するように施工したほか、経年劣化などで部分的に傷みが生じた場合、可能な限りその部材を部分的に取り換えられる構造に加工した(第115図右)。

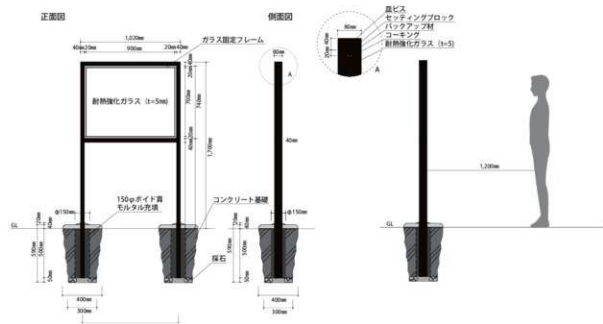
(2) 復元イラスト透過式看板の設置

天秤ふいごの復元製作において、今回の整備で製作対象としなかった上部構造は、イラストの線画で上部構造を透明プレートに描き、透明プレート越しに製鉄炉と天秤ふいごを見ると実際に復元製作された土台部分とイラストの線画が重なって全体が把握できる復元イラスト透過式看板を設置した(第116図)。またイラストには製鉄炉と天秤ふいごのほかに、村下や炭坂、番子などのたたら操業に携わる人物を描き、見学者に操業時の様子が具体的に伝わるように仕上げた。また看板は、イラストの板面に幅900mm、高さ640mmの耐熱強化ガラスを用いており、スチール製の支柱に固定フレームで固定する仕様になっている(第117図)。

なお、近年開発が進むデジタル技術による再現方法も同時に検討されていたが、様々な世代の見学者に幅広く対応でき、一見ただけで直感的に分かる看板の設置を目的としたため、今回は復元イラストの透過式看板を採用した。



第116図 復元イラスト透過式看板 (令和4年度)



第117図 復元イラスト透過式看板図面 (S=1/40)

(3) 遺構表示の追加と遺構名称看板の更新

遺構表示の追加

簡易整備の遺構表示は、発掘調査で確認された湯溜まりの平面形状をレンガの配置で表現した。現地整備にあたり、床釣りの真砂土舗装を行うなかで湯溜まり内部に製鉄炉から流出した高温の鉄鉄を表現するため、湯溜まり内部の舗装を他の真砂土舗装と異なる山吹色で表現した。

また、平成28年度(2016)に実施した床釣りの土層立体剥ぎ取り位置が現地で把握できるように、東小舟の平面形の遺構表示を横断する形でレンガの配置で剥ぎ取り位置を表示した(第118図左)。

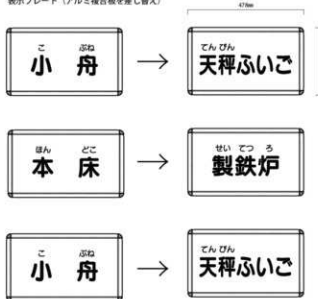
遺構名称看板の更新

製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を設置した場所の南側には、遺構名称看板(本床・小舟)が存在していた。現行の状態では、製鉄炉と天秤ふいごの復元製作が本床と小舟の表示と重なり、見学者の誤解を招く可能性があるため、遺構名称看板の表示プレートのみを本床と小舟から製鉄炉と天秤ふいごに差し替え、プラスチックコーナーで固定したアルミ枠に嵌め込んだ本床と小舟の表示プレートを新たに作成し、埋設表示プレートとして真砂土舗装内に埋設した(第118図右・119図)。

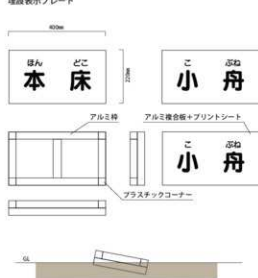


第118図 遺構表示の追加（土層立体剥ぎ取り位置を表示）（南西から）と遺構名称看板の更新（南東から）（令和4年度）

表示プレート（アルミ複合板を差し替え）



埋設表示プレート



第119図 遺構説明看板の差し替えと埋設表示プレート図面

（4）現地周辺看板の設置

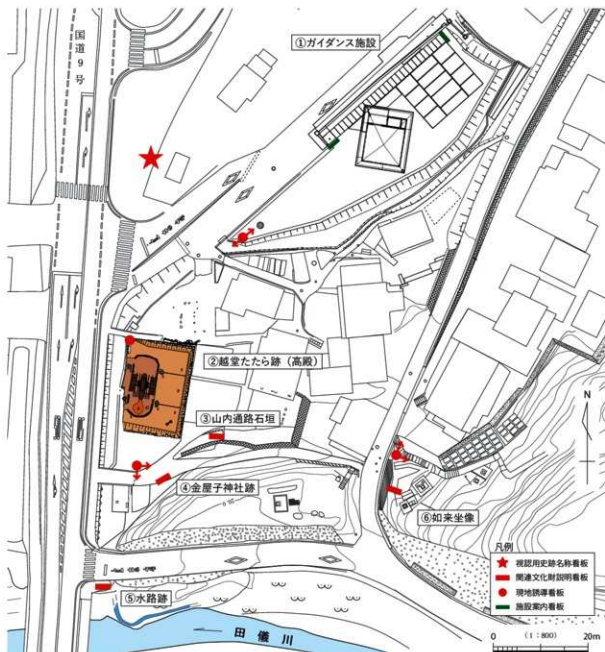
現地周辺看板は、実際の大きさに製作した簡易パネルなどを予め準備し、整備検討委員会において簡易パネルを使用して看板の位置を現地で具体的に検討し、最終的な設置位置（第120図）を確認した。

なお、越堂たたら跡の整備に係る看板の色調は、整備基本計画のなかで既存看板の色調である「茶褐色」を基本とした同色系に統一する方向性としたため、現地周辺の関連文化財説明看板や現地誘導看板についても、支柱やフレームなどは基本的に茶褐色系の素材や塗装を採用した。

関連文化財説明看板

幕末から明治初年の越堂鉦山内の建物配置図（第5章第1節第66図）には、製鉄炉を覆う高殿だけでなく事務所である元小屋や住宅、製鉄の原材料となる砂鉄と木炭を保管した砂鉄置場や炭小屋などが記されているほか、山内での生活や信仰に関する施設が描かれている。

現在越堂たたら跡の高殿南から東側に向かう通路は里道として利用されているが、その里道の位置は配置図にある高殿から炭小屋や住宅に続く通路と合致しており、里道に伴う石垣にはたたら操業当時の古い石垣が一部で残されている。また通路南側にある権現山には、金屋子神社が築かれていたこ

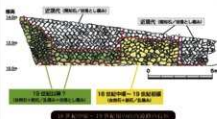


第120図 ガイダンス施設・越堂たたら跡現地および関連文化財と看板設置位置

とが配置図に示されているほか、権現山から道路を挟んで南側にある田儀川沿いには、岩盤を削って造られた水路が存在しており、田儀川から山内に水を引き込み、砂鉄の水洗や生活用水などに使用したと考えられる。また、山内の東側に位置して山内全体が一望できる亀山の麓には如来坐像が安置されている。如来坐像の背面には、「願主／雲劬越道櫻井幸左衛門」と彫られ、田儀櫻井家の6代目当主であった幸左衛門義民が造立したと考えられる。

越堂たたら跡の現地整備とともに、これらの関連文化財の見学を促すため、各地点において説明看板を設置した(第121・122図)。また看板の仕様は、スチール製の支柱に板面が900mm角となるアルミ複合板を取り付けている。またその表面にプリントシートを貼り付けてUVラミネート加工を施しており、経年劣化による交換時期にプリントシートのみ貼り替え可能な仕様になっている。

山内通路の石垣



2245
 鎌倉たたらは、製鉄炉を覆う建物（高屋）を中心に山内（製鉄を営む集落）が形成され、高屋から数小屋や住宅に続く通路がありました。当時の古い石垣が各時期に修理や改修が行われて残っており、通路は遺蹟として現在も使われています。

金屋子神社跡



2246 金屋子神社に奉祀山内神社

2247 金屋子神社

2246
 鎌倉たたらでは、高屋近くの権現山に金屋子神社が奉かれていました。金屋子神社は、たたら製鉄に纏わる金屋子神を祀る社で、たたら製鉄に関わる人々に篤く信仰されました。

田儀川沿いの水路



2248
 鎌倉たたらに属する田儀川沿いに、高屋を削って造られた水路が残されています。田儀川から山内に水を引き込み、製鉄の水流や生活用水などに使用したと考えられます。

如来坐像

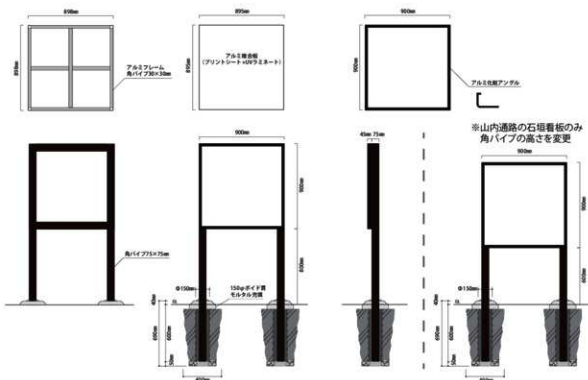


2249 如来坐像(10cm)

2250 如来坐像(10cm)

2251 石の刻文(10cm)

2249
 鎌倉たたら集落にある亀山の間に如来坐像が安置されています。如来坐像の背面には「鎌主/原右衛門経兵衛并奉安御門」と彫られ、田儀棟丹家の六代目当主であった藤井孝左衛門藤兵衛(1735~1785)が建立したと考えられます。



第121図 関連文化財説明看板図面 (S=1/40)



第122図 関連文化財説明看板（左上：山内通路石垣 右上：金屋子神社跡 左下：水路跡 右下：如来坐像）（令和4年度）
現地誘導看板

ガイドンス施設から越堂たたら跡現地、そして周辺の関連文化財へと向かう見学ルートが想定されており、見学者を適切に誘導するために現地誘導看板を4箇所を設置している（第123～125図）。

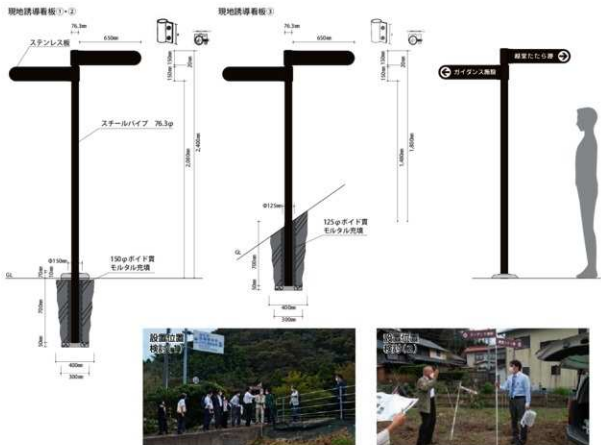
看板は、スチールパイプ本体の両側に各見学場所の案内表示を記したプリントシートを貼り付けて、UVラミネート加工を施したステンレス板を上下に取り付ける仕様で製作した。なお、越堂たたら跡の現地を示す誘導看板は、遺跡名称看板の本体にアルミ複合板を取り付けた。

注

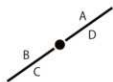
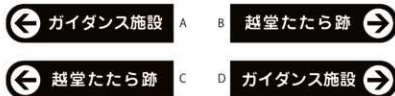
- （1）整備検討委員会では、製鉄がや天秤ふいごを復元製作した後に覆屋を設けて雨風から保護し、劣化を防いで耐久性を持たせる案もあったが、覆屋が実際の高殿内部とは異なるものである場合、高殿構造を熟知していない限り誤解を招くことや、現地は日本海からの海風が強く国道9号に隣接しているため、経年劣化などで傷んだ覆屋が剥がれて国道9号付近に飛散する可能性も指摘された。そのため、最終的に覆屋を設けずに復元した製鉄がと天秤ふいご土台の露出展示を行うこととした。
- （2）操業当時の製鉄がと天秤ふいごは高殿の覆屋内で稼働しており、屋外での設置は想定されていない。土台に比べて耐久性の劣る上部構造を正確に復元した場合、屋外の雨風によりかなり早くに劣化して損傷してしまい、倒壊すると見学者に危険が及ぶ可能性がある。よって今回は天秤ふいごの土台部分のみを復元することとした。

参考文献

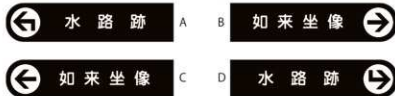
依 国一 1933『古来の砂鉄精錬法 たたら吹製鉄法』丸善



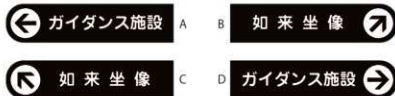
現地誘導看板①



現地誘導看板②



現地誘導看板③



第123図 現地誘導看板図面(1) (5=1/40)

第4節 ガイダンス施設整備

越堂たたら跡の現地整備が令和4年度(2022)に完了した後、令和5年度(2023)にガイダンス施設関連の整備に着手した。具体的には、約1,339㎡の用地内でガイダンス施設整備および地盤整備を行ったほか、ガイダンス施設周辺に看板設置を実施した(第126～128図)。また施設内部が完成した段階で展示製作施工を実施した。ここでは、整備内容を項目ごとに報告する。

1 ガイダンス施設整備

(1) 建築工事(第129～135図)

ガイダンス施設の建築工事は、整備基本計画の内容に沿って実施した実施設計をもとに進めた。ガイダンス施設の建築面積は82.8㎡、延べ床面積72㎡となり、展示室を中心にトイレと外倉庫が付属する構造となる⁽¹⁾。

建物は周辺の集落景観に配慮した建物構造を意識しつつ、現代的な建材の特性を活かすため、建物の屋根はガルバリウム鋼板t-04平葺きの方形屋根で仕上げ、外壁は安定錆を形成して鉄の風合いを生み出す茶褐色の耐候性鋼板(コールテン鋼)t-1.6を用いている。耐候性鋼板は錆の色が茶褐色で全体的な色調が茶褐色に統一されるため、見学者に鉄のイメージを連想させることができ、周囲の景観と調和した形状を保ちながらも製鉄関連施設を想起できる外観を演出した⁽²⁾。



第126図 現地整備・ガイダンス施設全景(左:北から 右:南西から)



第127図 ガイダンス施設全景(左:北から 右:西から)

建物内部の屋根は、空間を広く見せることができ、高殿建物の屋根構造がイメージできる登り梁現し仕上げで進め、天井の板材は杉材 t-9 を用いて構造材現し仕上げである。また入口上部には排煙窓を設置した。

建物内部の壁面は珪藻土塗りて仕上げている。なお珪藻土の色は、当時の高殿内部の風合いを再現するために、実際に現存する菅谷鉦高殿内部の土壁の色を参照して設定した。

また南側の壁面には正方形の窓を設置した。窓は展示室内の明かり採りの役割を果たすとともに、窓から外を眺めると右手に越堂たたら跡現地、左手に田儀櫻井家の6代目当主義民によって造られた如来坐像の場所が確認できるようになっており、窓からの景観によって実物の位置と展示パネルの内容が連動して理解できるようになっている。

建物床面はモルタル金コテ押さえて一部目地を設け、床面中央に敷設する床面イラストマップの周囲は真鍮目地棒を入れている。なお、トイレの床面は磁器質タイル張りである。

建物の扉は、施設内のスペースを有効に活用するほかバリアフリーの観点から、外倉庫の扉以外は引戸となっている。

(2) 電気設備・機械設備工事 (第136～140図)

建物内の電気設備について、展示室内は床釣りの土層立体剥ぎ取りなど凹凸のある展示品が設置されており、これらの展示品を最大限に引き立たせるため適度な明るさを保つ仕様とし、温白色でLEDのスポットライトとダウンライトを併用した。また展示室内の床上3mにはライティングダクトを吊り下げ、展示品を設置した段階で細部の位置を調整できるようにした。

展示室内は高価な展示品の陳列を避けているが、公共施設における防犯対策の一環として展示室内にドーム型のカメラを設置した。カメラの映像は一定期間保存される仕様になっており、展示品の状況確認にも活用できる。

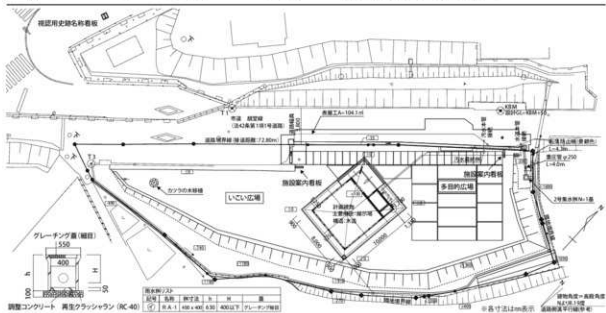
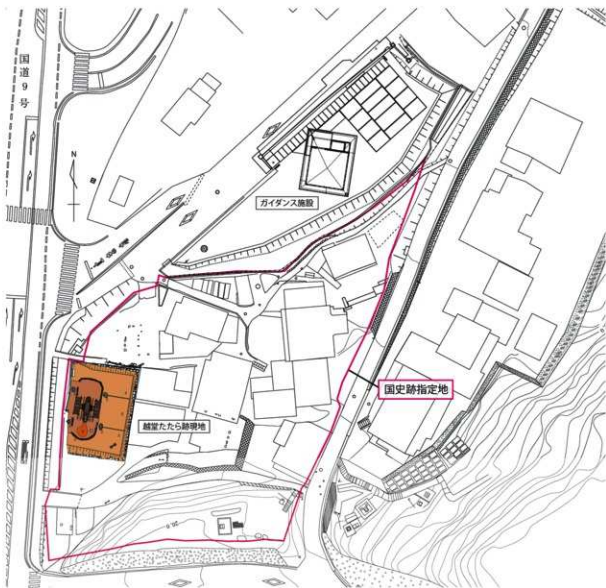
また機械設備として、消火設備のほか、見学者が安心して利用できるようにトイレは車椅子が回転できるスペースを確保した場所に洋風大便器および洗面器、オストメイト対応設備を設置した。

2 地盤整備

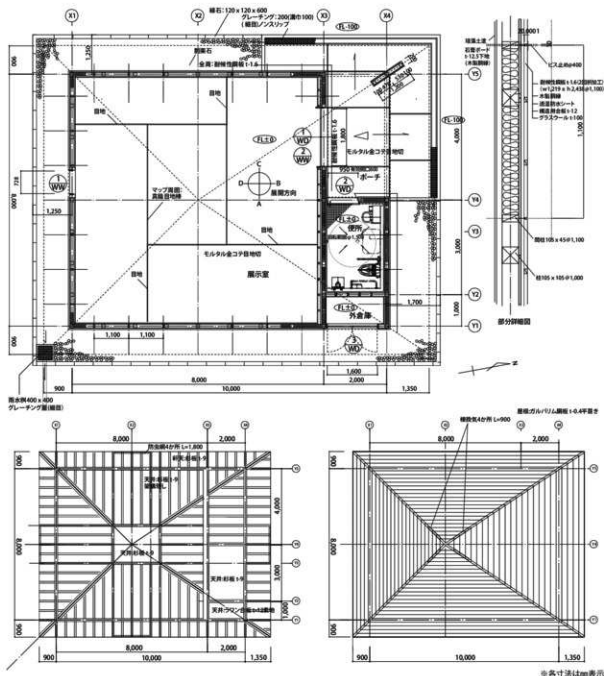
(1) 地盤整備工事 (第141～151図)

ガイダンス施設は、見学者に越堂たたら跡の調査成果を中心としてたたらの魅力を訴求する役割のほか、たたら製鉄の重要性を学べる歴史学習の起点や史跡保護活動の拠点としての性格が強い。そのため、地域におけるたたら製鉄の歴史学習や保護活動の拠点として活用しやすい場所にするため、ガイダンス施設周辺の地盤整備を実施した。

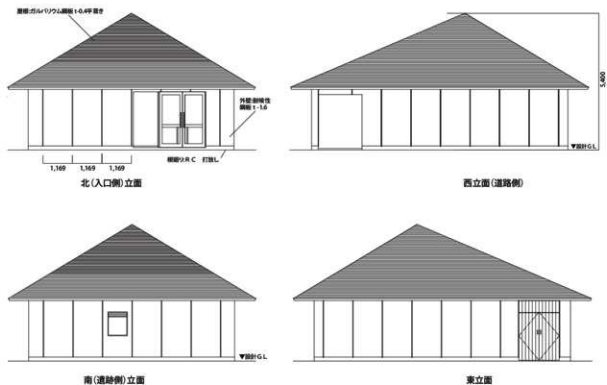
地盤整備は、ガイダンス施設の用地内を真砂土などで埋め立てて造成し、南側の斜面に植生シートを敷設した。建物から向かって左側は、幅14,300mm(14.3m)、長さ約12,000mm(12m)のスペースに目地を付けたコンクリート舗装を施工した。これにより製鉄実験などの体験学習が実施でき、また車両が安定して乗り入れることができる「多目的広場」とした。建物から向かって右側は地表に芝生を張ったスペースで、見学者や地元の人々が利用できる「いこい広場」として整備した。なお、ガ



第128図 ガイダンス施設平面図(上: S=1/800 下: S=1/600)



第129図 建物平面図(上) (S=1/120)・天井伏図および屋根伏図(下) (S=1/200)



符号	形式	仕様
形状		平敷耐震耐力L=1.500 有効開口高さ45°
個数	場所	3 廊下室
見込	端子	35
材質	仕上	ホシバ 木材保護塗料塗装



符号	形式	仕様	仕様	仕様	仕様
形状		無装引き込扉戸・欄干仕様			
個数	場所	1 玄関	1 廊下	1 片倉庫	1 廊下室
見込	端子	40 トーメイ ペア強化ガラスS.A.S	35 型G4	35	35 トーメイ ペア強化ガラスS.A.S 高層窓ガラス用
材質	仕上	ホシバ 木材保護塗料塗装	ホシバ 木材保護塗料塗装	ホシバ 木材保護塗料塗装	ホシバ 木材保護塗料塗装
食物		引手:建物製ユニオン付 S.A.S(ブルー)手取:引付	引手:建物製ユニオン付 ホシバ(ブルー)手取: 赤銅製引手(引付)手取: S.A.S(ブルー)手取	レバー付引手 引手:建物製ユニオン付 引手:建物製ユニオン付 引手:建物製ユニオン付 引手:建物製ユニオン付	下壁ガラス(木製)取付:引付付 手取:建物製ユニオン付
備考			バリアフリーサイン	上壁ガラス(木製)取付:引付付	※各寸法はmm表示

第 131 図 建物立面図 (上) (S=1/150)・建具関連図面 (下)



第132図 建物建築工事状況(1)



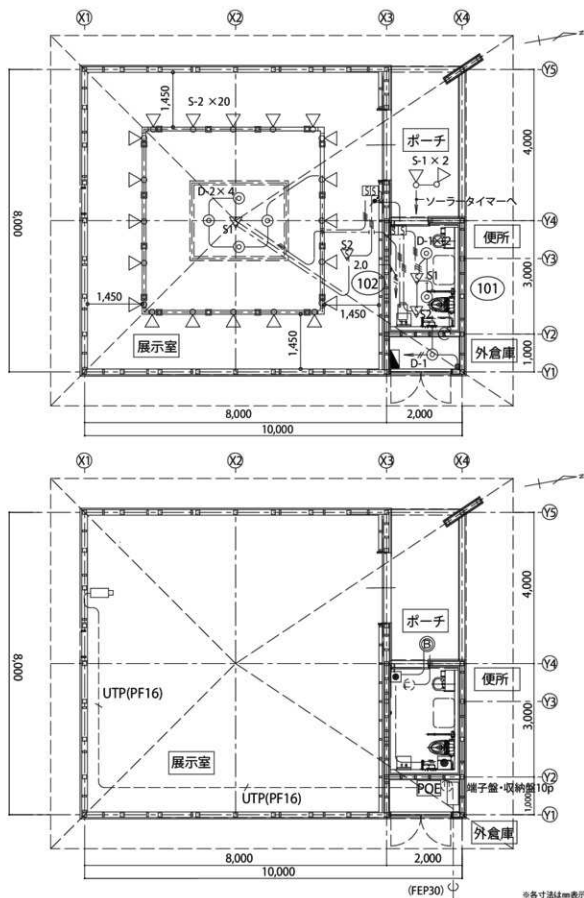
第133図 建物建築工事状況(2)



第134図 建物完成状況(1)

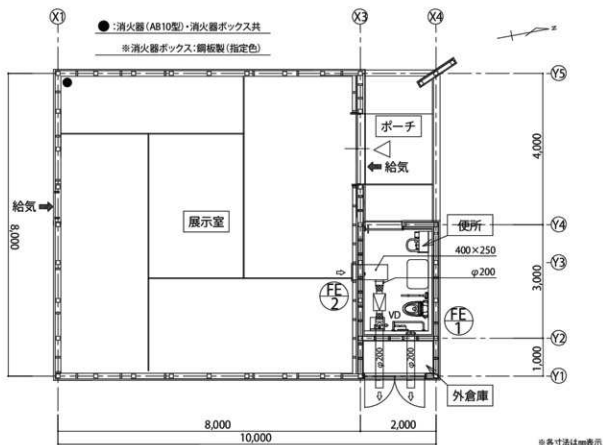
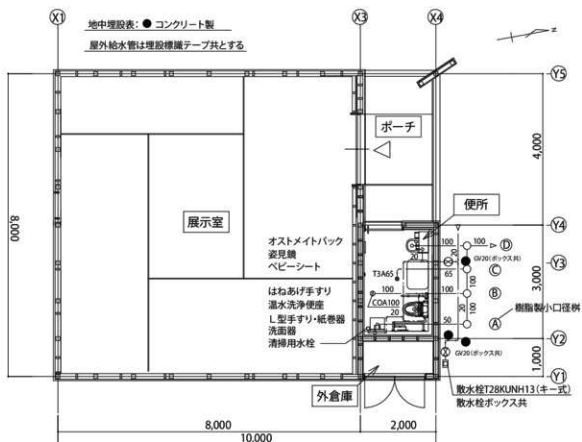


第135図 建物完成状況(2)

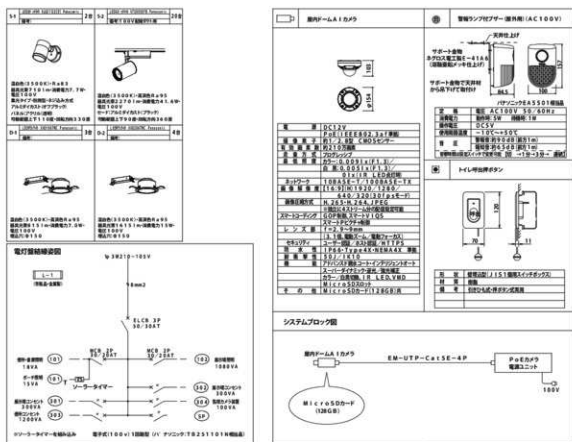


第 136 図 建物電気設備平面図 (S=1/100)

※各寸法はmm表示



第137図 建物給排水衛生設備(上)・換気および消火設備(下)平面図(S=1/100)



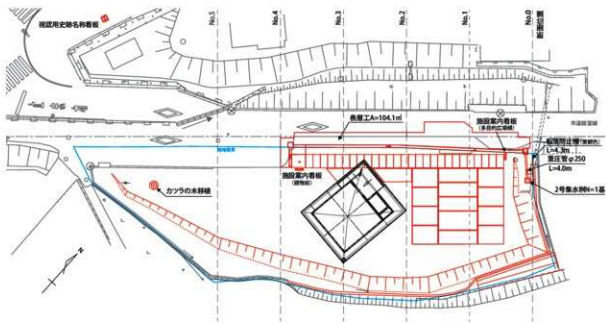
第 138 図 建物電気設備関連図面



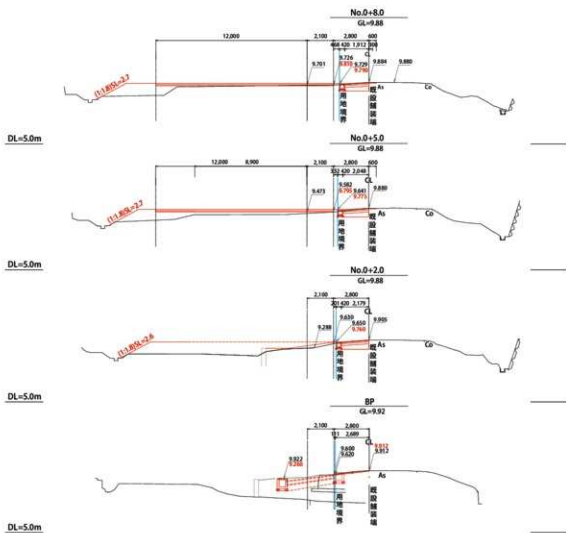
第 139 図 電気設備設置状況 (左: 展示室内照明 右: ドーム型カメラ)



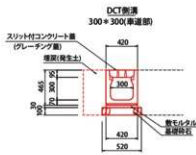
第 140 図 機械設備設置状況 (左: 給排水衛生設備 右: 消火設備)



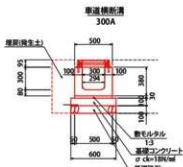
第141図 地盤整備・用地側溝・看板設置工事平面図および地盤整備工事断面位置 (S=1/600)



第142図 地盤整備工事断面図(1) (S=1/300)



数量表 (10m単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
幅型UP溝	300*300 L=2.0m	m	10
コンクリート蓋	幅型溝 300 L=0.5m スリット付	枚	19
グレーチング蓋	幅型溝 300 T.25 L=0.5m 普通型	枚	1
敷モルタル	1:3	m ²	0.13
基礎砕石	RC-40 t=10.0m	m ²	5.20



数量表 (10m単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
幅型溝	300*300 L=1.0m	m	10.0
グレーチング蓋	幅型溝 T.25 L=1.0m 普通型	枚	10
基礎コンクリート	φ db=100mm	m ²	0.3
型枠		m ²	2.00
敷モルタル	1:3	m ²	0.15
基礎砕石	RC-40 t=10.0m	m ²	6.00

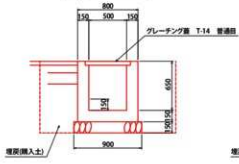
降雨係数



A3舗装構造

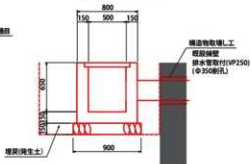


1号集水側口500xH650



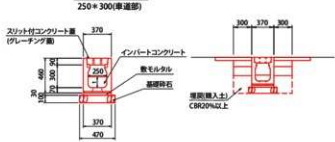
数量表 (1基単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
コンクリート	φ db=100mm	m ²	0.35
型枠		m ²	4.16
基礎砕石	RC-40	m ²	0.81
グレーチング	T.14 普通型	枚	1

2号集水側口500xH650



数量表 (1基単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
コンクリート	φ db=100mm	m ²	0.35
型枠		m ²	4.16
基礎砕石	RC-40	m ²	0.81
グレーチング	T.14 普通型	枚	1

DCT側溝(可変タイプ)



数量表 (10m単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
幅型UP側溝 (可変タイプ)	250*300 L=3.0m	m	2
幅型UP側溝 (可変タイプ)	250*300 L=1.0m	m	1
コンクリート蓋	普通型溝 250 L=0.5m スリット付	枚	5
グレーチング蓋	普通型溝 250 T.25 L=0.5m 普通型	枚	1
インバートコンクリート	φ db=100mm 厚型枠t=1.0mm	m ²	0.12
敷モルタル	1:3	m ²	0.03
基礎砕石	RC-40 t=10.0m	m ²	1.41

溝圧管

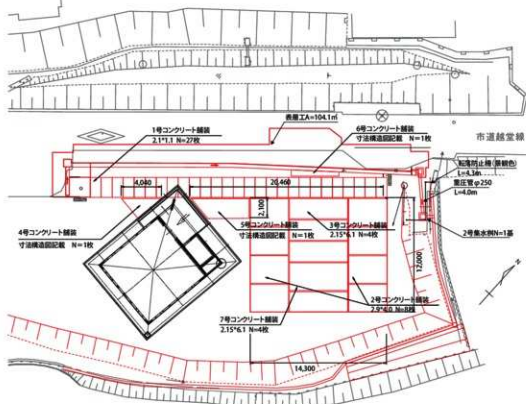


数量表 (10m単位)			
名称	規格・寸法	単位	数量
溝圧管	250	m	5
敷モルタル	1:3	m ²	0.05
基礎コンクリート	φ db=100mm	m ²	0.63
地上型枠		m ²	2
基礎砕石	RC-40 t=10.0m	m ²	4.3

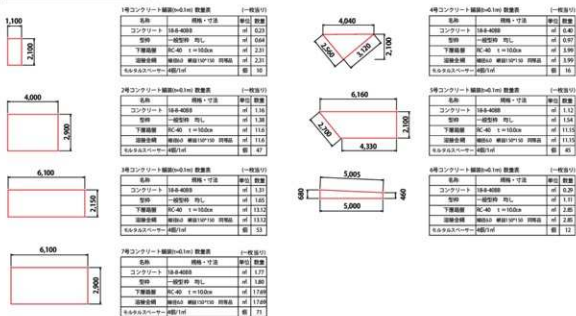
※各寸法はmm表示

第 144 図 地盤整備工事施設物構造図 (S=1/50)

コンクリート舗装 平面図



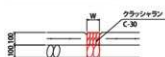
コンクリート舗装 構造図



コンクリート舗装 標準図

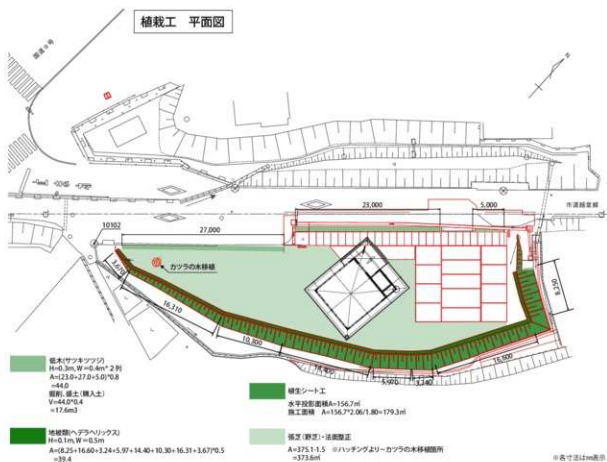
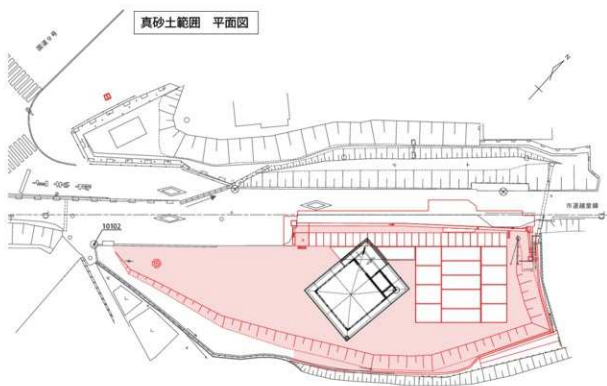


目地砕石 構造図



※各寸法はmm表示

第145図 地盤整備工事舗装平面図(上)(S=1/400)・構造図(1)(中)(S=1/300)・構造図(2)(下)(S=1/30)



第146図 地盤整備工事真砂土範囲平面図(上)(S=1/600)・植栽工平面図(下)(S=1/600)



第147図 地盤整備工事状況(1)



第148図 地盤整備工事状況(2)



第149図 地盤整備工事状況(3)



第150図 地盤整備状況(左:低木植栽 右:カツラの木植樹)



第151図 いちい広場からの景観（左：亀山を望む 右：鶴山を望む）



第152図 用地側溝整備状況

ガイダンス施設の展示室を視覧した見学者が越堂たら跡現地にスムーズに向かうことができるように、施設前に一定の間隔で目地を付けたコンクリート舗装を敷設した。

ガイダンス施設整備地と道路などのアスファルト舗装面との境界には、車両などの進入防止のため低木（サツキツツジ）で植栽を施し、用地南側は斜面であるため安全対策の一環として平坦面と斜面との境界に地被類（ヘデラヘリックス）の植栽を施工した。また、いこい広場の西側には若いカツラの木を植樹し、ガイダンス施設の将来的なシンボルツリーとすることを意図した⁽³⁾。

また、いこい広場からは、越堂鉦のたたら操業の状況を再現した現地整備状況や如来坐像が安置されている亀山、南側に越堂鉦の山内通路に伴うとみられる石垣が確認できるなど、当時の山内の景観を体感できる。なお、いこい広場から国道9号を挟んで南西にそびえ立つ鶴山は、戦国時代に尼子氏と毛利氏の攻防の舞台となった鶴ヶ城跡が立地しており、この地域独自の歴史的風致を演出している。

ガイダンス施設と前面には道路側溝を設けて排水処理を行うが、北東側で用地側溝と接続する場所が垂直に立ち上がり高低差の生じる既存のコンクリート擁壁であるため転落防止柵を設置するなど、ガイダンス施設周辺の環境整備も同時に行っている。

(2) 用地側溝整備工事（第152図）

ガイダンス施設整備地は、幕末から明治初年の越堂鉦山内建物配置図（第5章第1節第66図）では水路が敷設されている様子が描かれ、当時の越堂鉦の高殿石垣底面よりもやや低い位置で田が広がっていたことが調査で確認されている（第5章第1節第80図）。また亀山の山麓にも位置するため、周

辺からの雨水や山からの湧水が流れ込みやすい立地となっている。そのためガイドンス施設周辺の排水処理を行う必要が確認され、用地内に側溝を設けて既設の排水路に接続する整備を実施した。

3 看板設置工事

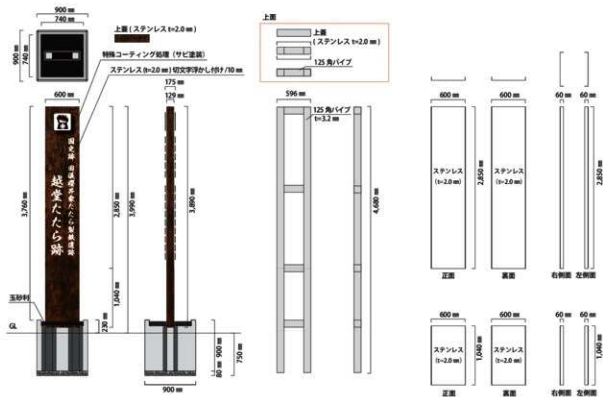
(1) 視認用史跡名称看板 (第153・154図)

越堂たたら跡は国道9号に隣接している。多くの見学者が国道9号を利用してこの場所を訪れるが、越堂たたら跡現地やガイドンス施設の場所は国道9号の地盤からかなり低い位置にあり、やや視認性が低い状況であった。そのため、史跡の名称(史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡/越堂たたら跡)が国道9号を走る車から明確に確認できる視認用史跡名称看板を設置する必要があった。

視認用史跡名称看板は、幅600mm、高さ3,990mm、厚み129mmの大型看板で、国道9号沿い



第153図 視認用史跡名称看板



第154図 視認用史跡名称看板図面 (S=1/200)

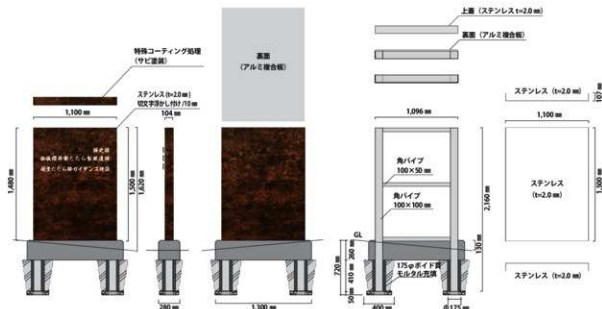
に設置した。看板の表面は、建物の外壁と同じ色調の茶褐色の表面塗装を施す仕様である。なお、同等の色調と高さを持つ看板は、越堂たたら跡から東に3kmほど離れた国道9号沿いのJR田儀駅前にある手引ヶ丘公園風の子楽習館の案内看板であり、国道9号で東から訪れる見学者がJR田儀駅前の看板を先に視認することで、視認用史跡名称看板が視界に入りやすくなる効果が期待できる。



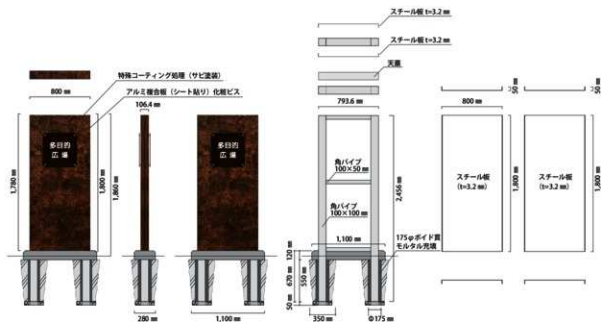
第155図 施設案内看板（建物前）



第156図 施設案内看板（多目的広場横）



第157図 施設案内看板図面（建物前）（S=1/100）



第158図 施設案内看板図面 (多目的広場横) (5=1/100)

(2) 施設案内看板 (第155～158図)

ガイダンス施設は、建物自体やその周辺に名称などを表記する場所がないため、建物前および多目的広場横に案内看板を2基設置した。建物前の案内看板は、幅1,100mm、高さ1,560mm、厚み104mmで、多目的広場横の案内看板は、幅800mm、高さ1,860mm、厚み106mmである。建物外壁の色調と同じ茶褐色の表面塗装を施し、視覚的な統一感を演出している。

4 ガイダンス施設展示製作施工

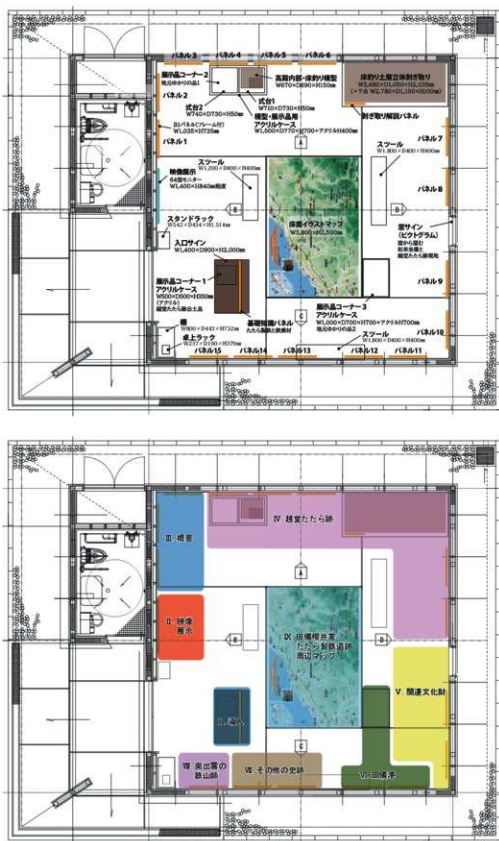
ガイダンス施設の展示内容は、越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りを中心に越堂たたら跡の発掘調査成果の紹介や、田儀櫻井家の製鉄経営の特質および他の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の史跡を解説するほか、越堂たたら跡出土品や地元ゆかりの品を展示した (第159～161図)。これらの展示を通して、越堂たたら跡や田儀櫻井家についての理解を深めるとともに、たたら製鉄遺構の迫力を体感でき、たたら製鉄の歴史的な重要性が学べることを目的としている。

(1) 入口サイン (第162～164図)

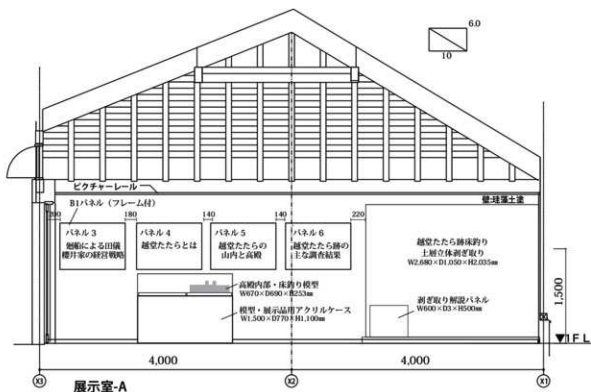
越堂たたら跡のガイダンス施設を訪れた見学者が、たたら製鉄に関する展示施設であることを最初に把握できるように、建物内部の入口扉付近に展示の導入の役割を担う入口サインを1台設置した。

入口サインの法量は、幅1,400mm、高さ2,000mm、奥行き900mmであり、素材は木材を基調として正面にアクリルフード付き展示ケースを備える。入口サインは扉の近くであり、外側から扉越しに内部を見るときに視界に入る位置に据えた。

入口サイン正面は文字による越堂たたら跡の紹介に加え、アクリルフード内部の展示ケースに越堂たたら跡の出土品を陳列することで、より視認性を高める効果を演出した。展示品は、製鉄の原料となった各時期の砂鉄 (越堂鉦1～4期) および炉壁と流れ鉄であり、越堂鉦における製鉄の様子を出土品から具体的に把握できる展示とした。



第159図 展示全体平面図(上)・エリア別平面図(下)(S=1/100)

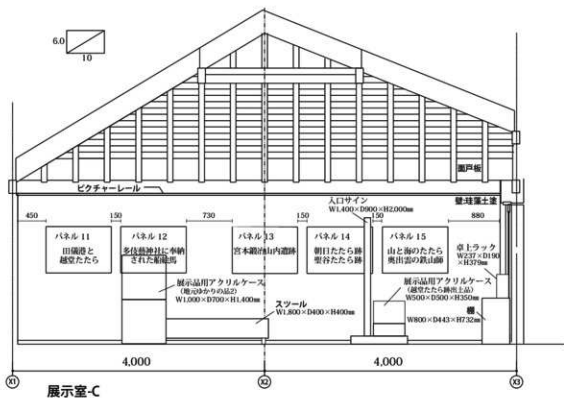


⑩

展示室-A

⑪

⑫



⑩

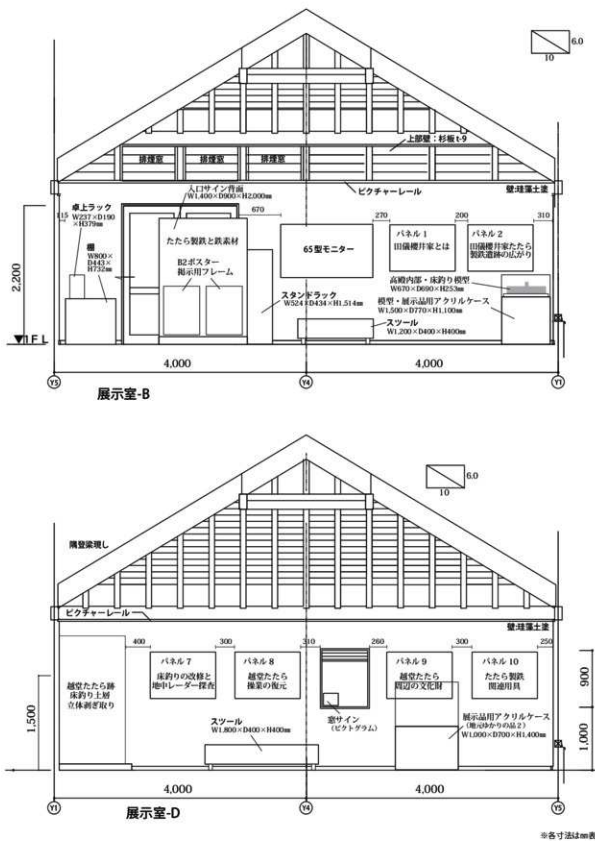
展示室-C

⑪

⑫

※各寸法はmm表示

第160図 展示立面図(1) (S=1/60)

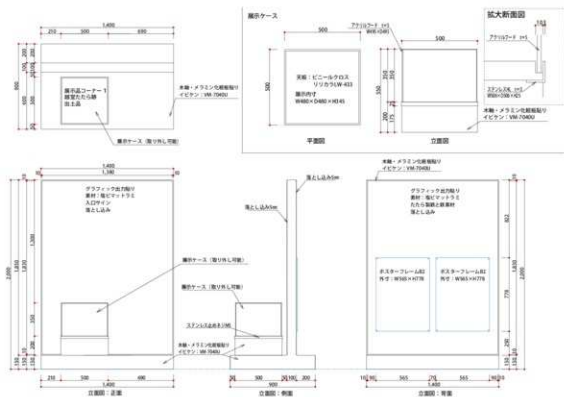


第161図 展示立面図(2) (S=1/60)

入口サイン正面



入口サイン背面



※各寸法はmm表示

第162図 入口サイン立面(上) (S=1/18)・図面(下) (S=1/40)



第163図 入口サイン



第164図 越堂たたら跡出土品展示状況（入口サイン展示ケース内）

入口サイン背面には、たたら製鉄と鉄素材の基礎知識を紹介するマットラミネートの塩ビ出力紙を貼るとともに、アクリルフレームでB2ポスターが掲示できる仕様とした。これにより様々な施設の展示や講演会などの関連情報が広報でき、ガイダンス施設の付加価値を高めることができる。

(2) 映像展示（第165・166図）

入口サインでたたら製鉄の展示施設であると把握した後に見学する展示として、見学順路で左側に向かう場所に映像展示を設置した。映像展示は壁面に65型の液晶モニターを設置し、田儀櫻井家の製鉄経営の特徴および越堂たたら跡の発掘調査成果を踏まえた越堂たたら跡の紹介動画や、発掘調査で取得した写真測量の成果などから制作した3次元映像がモニターで視聴できるように再生ボタンで映像が流れる仕組みにした。

なお、動画や映像は常時流れているのではなく、見学者が映像展示を見たいときに再生ボタンを押すと上映される映像再生装置を設けている。映像再生装置は、タイマー式で任意の時間に電源の起動と終了が設定可能である。また3次元映像データは、別途パソコンなどの画面上で操作することで、高殿全体の詳細な様子を360度あらゆる角度・距離から自由に閲覧することが可能である。

(3) 展示パネル（第167～170図）

発掘調査成果を含めた越堂たたら跡の紹介を中心に、田儀櫻井家のたたら製鉄および製鉄経営と密接に関わる田儀港、そして田儀港の廻船業と関係する船絵馬の解説に加えて、宮本鍛冶山内遺跡などの他の史跡や奥出雲の鉄山師を紹介する展示パネルを15枚作成した。



第165図 映像展示（左：徹底解説！越堂たたら跡 右：3次元映像でみる越堂たたら跡）



第166図 映像再生装置設置状況



第167図 展示パネル設置状況（1）



第168図 展示パネル設置状況（2）



フレーム



パネル1



パネル2



パネル3



パネル4



パネル5



パネル6



パネル7



パネル 8



パネル 9



パネル 10



パネル 11



パネル 12



パネル 13



パネル 14



パネル 15

展示パネルは、幅 1,030mm、高さ 728mm (B1 サイズ) のロール紙の出力を黒緑のポスターフレームに収納し、ピクチャーレールで吊り下げて各壁面に展示した。

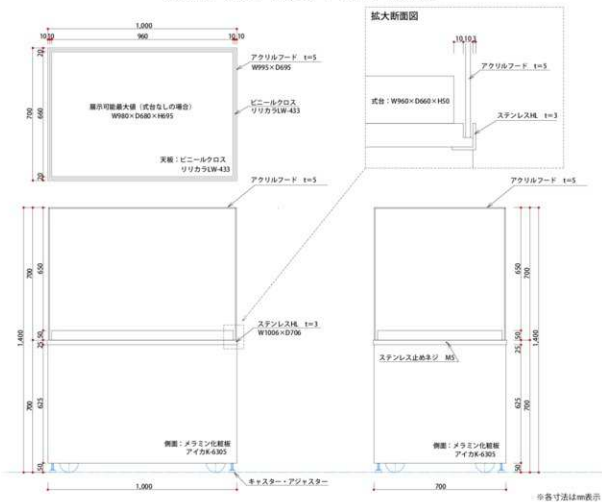
(4) 地元ゆかりの品の展示 (第 171 ~ 174 図)

ダンボールクラフト (北前船) の展示

田儀櫻井家のたたら製鉄は、日本海の海上交通を利用して全国各地に廻船で割鉄や鉄鉄などを販売したことで多くの利益を生み出した。その象徴となる日本海の北前船をダンボールクラフトで表現し



第 171 図 ダンボールクラフト (北前船) 展示状況



※各寸法はmm表示

た作品⁽⁴⁾が多伎文化伝習館に所蔵されており、整備検討委員会での検討を経て田儀港などを紹介する展示パネル付近で北前船のダンボールクラフトを展示ケース内に入れて設置することとした。

廻船問屋関連品の展示

田儀櫻井家が各地に割鉄や鉄鉄などを販売する拠点とした田儀港の廻船問屋の道具や関連文書は現在でも地元の田儀地区に残されている。そのため、地元ゆかりの品である廻船問屋の関連具を展示し、田儀櫻井家と関係が深い田儀港や廻船問屋の理解を促すための展示スペースを設けた。展示には、口田儀の集落周辺の廻船問屋であった井原家所蔵の道具（コタツ、そろばん、方位磁針）や関連文書（久徳丸運賃書出目録）を選定し、展示ケース内に陳列した⁽⁵⁾。

(5) 高殿内部・床釣り模型製作（第175・176図）

越堂釜の高殿内でのたたら操業の様子は、発掘調査成果を解説するパンフレットなどで紹介していた。今回の整備にあたり、操業に関わる人々の様子や操業の状況を立体的に表現した展示や、現在全体の約4分の1が国道9号下に埋没している高殿全体の様子を再現した展示の必要性が整備検討委員会で議論されたため、高殿内部を再現した模型を作成した。またこの模型は、製鉄炉とその地下にある床釣りの断面を解説イラストとともに表示しており、高殿内での床釣りの土層立体剥き取り箇所的位置や床釣りの役割について見学者が視覚的に把握できるように製作した。

模型の材料は、高殿や製鉄炉などを樹脂および木材を加工して立体的に製作しているが、操業を担う村下や炭坂、番子などの人物はアクリル板に印刷したイラストで平面的に表現し、高殿内の構造や



第173図 廻船問屋関連品・模型展示状況

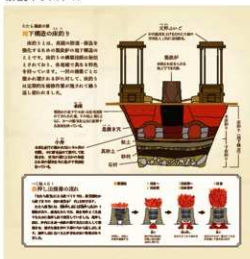


第174図 廻船問屋関連品展示状況



第175図 高殿内部・床釣り模型展示状況

解説イラスト A



解説イラスト D



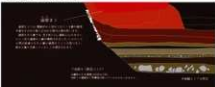
解説イラスト E



解説イラスト F



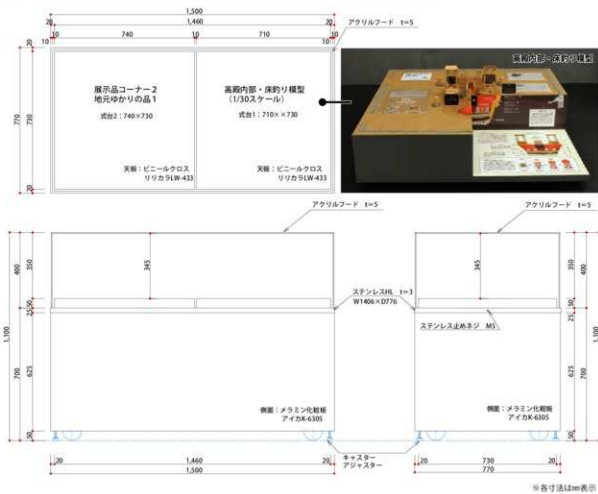
解説イラスト B



解説イラスト C



解説イラスト位置



第 176 図 高殿内部・床釣り模型解説イラスト (上)・展示ケース図面 (下) (5=1/20)

操業の様子を目立たせるように仕上げた。また、村下などの人物はたたら操業中の様子を映し出して
おり、製鉄がから銑鉄が流れ出る状況を再現している。なお模型は、地元ゆかりの品と同じ展示ケー
ス内に設置した。

(6) 床釣り土層立体剥ぎ取り製作 (第 177・178 図)

平成 25 年度 (2013) から平成 29 年度 (2017) に実施した越堂たたら跡の発掘調査では、製鉄が
地下構造の床釣り上部までの調査を実施した。長期間操業を具体的に示す床釣りの造り替え痕跡や地
下の湿気を逃がす息抜き穴の土管など、越堂銑の操業の実態を示す重要な情報を土層断面で確認した。
この床釣りの土層断面を立体的に記録して保存し、その状態を展示で再現するために平成 28 年度
(2016) に土層断面の立体剥ぎ取りを行った。なお剥ぎ取った土層は、文化財課の収蔵庫で直射日光
を防ぎながら保管していた。

立体剥ぎ取り製作の法量は幅 2,680mm、高さが最大で 2,035mm、奥行き 1,050mm である。ガ
イダンス施設の建設に合わせて発掘調査現場の現地で採取した土を使用しながら現地の実物と照らし
合わせて展示用に補修や補彩を行い、剥ぎ取り側面や前面を木軸や塗装にて仕上げ、展示用の土台を
製作した。また、土層立体剥ぎ取りで物理的に剥ぎ取りができていない奥壁面や崩落穴部分は、アル
ミ複合板の写真パネルや解説パネルを設置して、土層立体剥ぎ取り展示の補足情報を表示するスペー
スとしている。



第 177 図 床釣り土層立体剥ぎ取り

(左上：現地剥ぎ取り状況 右上：製作完了状況 左下：土管解説パネル 右下：展示状況)

パネル位置



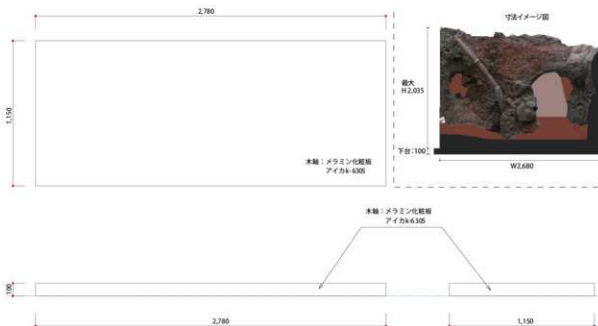
パネルA（小舟内部パネル）



パネルB（土管解説パネル）



パネルC（剥ぎ取り解説パネル）



※各寸法はmm表示

第178図 床約り土層立体剥ぎ取りパネル（上）・図面（下）（5=1/30）



第179図 床面イラストマップ施工状況



第180図 床面イラストマップ (田儀櫻井家たたら製鉄遺跡周辺マップ)

(7) 床面イラストマップ (第179・180図)

越堂たたら跡は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡のゾーニングのなかで全体の導入ゾーンとしての位置づけにある(第1章第1節第10図)。そのため、越堂たたら跡ガイドンス施設を訪れた見学者が他の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡にスムーズに向かうことができるように、展示室の床面中央に床面イラストマップ(田儀櫻井家たたら製鉄遺跡周辺マップ)を設置した。なお、床面イラストマップは実際の方角に近づけるため、入口を北側にして貼り付けている。

床面イラストマップの法量は、幅2,400mmで奥行き3,700mmであり、下地としてPタイルを敷設して表面を平滑に整えた後、その上にエンボスラミネート加工を施した床貼り用出力紙を貼り付けている。また床貼り用出力紙が剥離するのを防ぐため、フレームと床貼り用出力紙の隙間にはコーキングを行っている。



第181図 窓サイン(左上)と設置状況(右上:正面 左下:如来坐像を望む 右下:越堂たたら跡現地を望む)

(8) 窓サイン(第181図)

建物南側の壁面中央にある正方形の窓からは、右手に越堂たたら跡現地整備、左手に田儀櫻井家の6代目当主義民によって造られた如来坐像の場所が確認できるようになっている。それらを窓から確認できることを示すために、見学方向を示す窓サインとして窓ガラス面にビクトグラムのプリントシールを貼って表示した。これにより窓が展示室内の明かり採りのほか、景観を活かした展示として活用することができる。

註

- (1) ガイダンス施設の建物内部は展示室を中心としており、学習スペースは設けていない。学習機能は、越堂たたら跡の近隣にあり、地域における歴史文化の伝習拠点となっている多伎文化伝習館が担うことができ、今後、越堂たたら跡現地およびガイダンス施設と総合して地域の歴史学習を促進することが可能である。
- (2) ガイダンス施設の建物は、用地内の中央で隣接道路の市道に対して斜めになる配置を行った。この配置は、越堂たたら跡の高観配置と方位を合わせており、周囲の景観に馴染みつつも独特の存在感を持たせたほか、細長い用地内の中央に建物を配置することで建物の左右に異なる役割を持つ空間(建物向かって左:多目的広場、建物向かって右:いこい広場)を創出した。
- (3) カツラの木は、たたら製鉄に縁のある金屋子神が降臨したとされ、各地のたたら場において神木として大切にされていた。ガイダンス施設のいこい広場に植樹したカツラの木は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の国史跡指定に

尽力された鳥屋原敏夫氏（旧多伎町教育委員会教育長）から寄贈を受けたもので、元々菅谷鉦（雲南市）の高殿周辺で自生していたカツラの木の株を鳥屋原氏が譲り受け、ご自宅で大切に育成されていた。今回、越堂たたら跡のガイダンス施設の整備にあたり、記念碑的なシンボルにしてはどうかとのご提案をいただいた。

- (4) 北前船のダンボールクラフトは原禎幸氏（出雲市湖陵町）の作品であり、他にも様々な文化財建造物をダンボールクラフトで製作した作品を発表している。
- (5) 文書史料は展示ケース内に直接展示すると、湿気や照明の影響などで傷みが進むため、文書史料の撮影写真を出力したパネルを陳列した。なお、廻船問屋関連の展示品は、井原建幸氏の所蔵である。

第6章 総括

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡整備の方向性と活用の可能性

1 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の特性と史跡のゾーニング

近世・近代の遺跡は、これまで先史時代の遺跡に比べて注目される機会が少なかった。しかし近年、観光名所として賑わう近世城郭や世界遺産に登録された近代化遺産など、近世・近代の遺跡にスポットが当たり、その歴史的価値が評価されつつある。

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、全国の数ある国指定史跡のなかで3例しかない近世・近代のたたら製鉄に関する史跡である。近世たたら製鉄の工程が一貫して把握できる重要な遺跡として歴史的評価を受け、たたら製鉄で著名な鳥根県を代表する近世の製鉄遺跡として全国的に広く知られている。

田儀櫻井家のたたら製鉄の最大の特性は、「山のたたら」と「海のたたら」を同時に営む独自の経営体制に加え、製鉄の原材料の搬入や鉄製品などを出荷した田儀港でつながる「江戸時代の製鉄コンビナート」ともいえる流通体系を構築したことにある。つまり、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は山のたたらと海のたたら、田儀櫻井家の生産拠点の山内景観や製鉄流通の要である港を擁するなど、たたら製鉄の多様な要素が一体的にまとまる遺跡群であると評価できる（第182図）。

また田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、出雲市多伎町を中心として東西約10km、南北約8kmの広範囲に現在15箇所のたたら場・鍛冶屋跡が確認されており、そのなかで4つの史跡が各地に点在する



第182図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡のゾーニングと特性

という特徴的な形態を持つ。これら広域に展開する4つの史跡を含む15箇所のたたら場・鍛冶屋跡について、史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想のなかで、各史跡を中心とした導入ゾーン、中核ゾーン、佐田ゾーンの3つにゾーニングすることで、広範囲にまたがる遺跡群の中長期的な調査・整備計画を明確にすることができた（幡中 2017）。

導入ゾーンについては、今回実施した越堂たたら跡の史跡整備で今後の活用の方向性が具体化しているが、中核ゾーンと佐田ゾーンについては今後調査や整備を本格的に実施することになる。そのため、これらの3つのゾーンにある史跡の特性を整理しながら、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の史跡整備の方向性を検討する必要がある。ここでは、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡における史跡整備の今後の方向性や、それを踏まえた活用の可能性について展望したい。

2 導入ゾーンの史跡整備の内容と役割

導入ゾーンの中核をなす越堂たたら跡は、国道9号沿いに立地するなど田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかで最もアクセスが良い場所にある。越堂鉦は約150年もの長期間にわたり操業された海のたたらであり、流通拠点の田儀港と合わせて田儀櫻井家の経営体制である「江戸時代の製鉄コンビナート」を実現可能にした基幹的なたたら場である。そのため、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の導入部の位置づけにあり、越堂たたら跡の調査成果のほかに、他の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡やたたら製鉄自体への理解を深め、その魅力を伝える役割を担うと考えられる。ここでは、今回実施した越堂たたら跡の史跡整備の内容について、項目ごとに確認していきたい。

(1) 越堂たたら跡ガイダンス施設

ガイダンス施設は、越堂たたら跡の発掘調査成果を中心に展示している（第183図）。展示のメインとなる越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りは、長期間操業を具体的に示す床釣りの造り替え痕跡などが確認でき、海のたたらである越堂鉦の操業の実態を体感できる。

また展示パネルなどでは、田儀櫻井家の解説や田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の紹介を行っているほか、たたら製鉄についても一定の知識を得られるように内容を構成し、床面イラストマップで他の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡にもアクセスできるように主要道路と位置を表示した。これらを見学することで、越堂たたら跡に加えて田儀櫻井家および田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の全体像を把握できる。



第183図 越堂たたら跡ガイダンス施設と展示状況

(2) 越堂たたら跡現地整備

越堂たたら跡の現地整備は、ガイダンス施設で田儀櫻井家と越堂たたら跡の全体像を把握した後に見学すると、海のたたらの操業の様子が具体的に理解できる整備内容とした。具体的には発掘調査の成果と沿岸部の価値鈿の調査記録を参考に製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を実施し、操業当時の海のたたらの様子を再現している(第184図)。加えて、復元イラスト透過式看板を通してイラストと復元製作を重ね合わせると、実際の操業の様子が確認できるように工夫した。

また現地の地表面には、発掘調査で実際に確認した本床・小舟や湯溜まり、押立柱の礎石などの遺構表示を行っており、製鉄炉や天秤ふいごの復元製作と合わせて、実際に確認した遺構の状況から再現された操業の様子までを一貫して把握することができる。

(3) 山内景観と口田儀のまちなみ

越堂たたら跡現地周辺は、高殿を中心として事務所である元小屋や住宅、砂鉄や木炭を保管した砂鉄置場や炭小屋などが設けられ、山内を形成していた(第185図)。現在でも山内通路の石垣や田儀川沿いの水路、金屋子神社跡や如来坐像など山内での生活や信仰に関する文化財が存在する。そのため、現地周辺をめぐることで田儀櫻井家が経営した海のたたらの山内景観を体感できる。

そして導入ゾーンのもう一つの要素である田儀港と口田儀のまちなみは、廻船問屋を営んだ鳥屋尾家の屋敷地や、田儀川と日本海に面して荷物の搬入や搬出に適した建物構造を持つ家屋などが現存しており、江戸時代の港町の様子を今に伝えている。



第184図 越堂たたら跡の現地整備状況



第185図 現在の越堂たたら跡周辺(左)と幕末～明治初年の越堂山内の景観(右)

3 中核ゾーンの史跡整備の方向性

(1) 宮本鍛冶山内遺跡の特質

中核ゾーンは、多伎町奥田儀の山間部で田儀櫻井家が営んだ山間部のたたら場などで構成され、掛樋たたら跡や国史跡の聖谷たたら跡では、発掘調査で田儀櫻井家が初期に営んだ山のたたらの様相が明らかになりつつある。その中心となる史跡は、田儀櫻井家が本拠地を構えた集落跡の宮本鍛冶山内遺跡（出雲市多伎町奥田儀）で、史跡指定の要項となった近世たたら製鉄の様子が一貫して把握できる製鉄集落遺跡である（第186図）。田儀櫻井家が江戸時代初期にこの地で製鉄業を開始してから約250年間にわたり田儀櫻井家の本拠地として栄えた。集落跡にはたたら製鉄に関わる生産関連遺構や人々が暮らした居住関連遺構に加えて、当時の人々の信仰に関連する遺構が一体的にまとまり、山間部での製鉄経営と集落の営みを示す遺構群が当時の山内景観を醸し出している。

(2) 中核ゾーンの史跡整備

宮本鍛冶山内遺跡において信仰に関する遺構は特に良好な状態を保っている。田儀櫻井家の菩提寺である智光院は、田儀櫻井家歴代当主の墓地（田儀櫻井家墓地）や山内従事者などの墓地（智光院墓地）とともに集落入口付近に配置され（第187図左）、たたら製鉄に関わる信仰の対象として重要な位置づけにある金屋子神社（第187図右）は、山内全域を見渡せる丘陵上に築かれているなど、田儀櫻井家のたたら製鉄と当時の信仰を象徴する存在である。これらは文化財的な価値が高く、また現在でも



第186図 宮本鍛冶山内遺跡全景（左）と田儀櫻井家本宅跡背面石垣（右）



第187図 田儀櫻井家墓地・智光院（左）と金屋子神社（右）

金屋子神社の祭礼が行われるなど地元の人々から篤く信仰されている。信仰関連遺構を保全して末永く後世に伝えていくことは、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の歴史的価値を次世代に継承することに大きく貢献できると考えられる（桶中 2020）。

つまり中核ゾーンは、宮本鍛冶山内遺跡に残る近世たたら製鉄の山内景観やたたら製鉄に関する人々の信仰の対象となった智光院や田儀櫻井家墓地、金屋子神社を保全することが重要であり、今後の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体の歴史的価値を維持するうえで中心的な役割を担う。

4 佐田ゾーンの史跡整備の方向性

(1) 朝日たたら跡の位置づけ

佐田ゾーンは、多数の山間部のたたら場・鍛冶屋跡が確認されており、田儀櫻井家が営むたたら場のうち史料上で最も遡る吉野鉦の可能性が高い梅ヶ谷尻たたら跡から、田儀櫻井家が終盤期に経営した加賀谷たたら跡まで、山間部における田儀櫻井家のたたら製鉄経営を通史的に把握できる製鉄遺跡群が展開する。その中心に位置するのは、国史跡に指定されている朝日たたら跡（出雲市佐田町高津屋）である。朝日たたら跡は、田儀櫻井家が営んだ初期の山のたたらであると考えられ、発掘調査から出土した陶磁器や自然科学分析により享保から宝暦年間（1716～1763年）頃に稼働したと想定されている（杉原ほか編 1983）。発掘調査で複雑な造りの床釣りが構築された状況が確認され、神戸川中流域付近に展開する山のたたらで造られた床釣りの実態を把握する嚆矢となった。

(2) 佐田ゾーンの史跡整備

朝日たたら跡は、発掘調査で見つかった高殿や床釣りの遺構は埋め戻されずに現地で調査当時の状況が保全されている。調査後に現地を覆う高殿を模した上屋の展示棟が建設されて周辺の景観に溶け込んでおり、床釣りの様子を実際に見学できる数少ない施設として重要である（第188図）。なお保存されている遺構の表面は、苔や汚れが生じているが現在でも崩れることなく良好な状態を保ち、たたら操業に伴い高温で熱せられて固着した床釣りの堅牢さを如実に示している。

よって佐田ゾーンは、田儀櫻井家が経営した山のたたらで構築された床釣りの実物が朝日たたら跡現地で直接確認できることの意義や、観光資源としての朝日たたら跡の価値づけに焦点を当て、今後の保存や活用方法を反映した史跡整備を検討することが望ましい。



第188図 朝日たたら跡展示棟（左）と床釣り遺構露出展示（右）

5 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の史跡整備と活用の可能性

(1) 各ゾーンの特性を活かした史跡整備

これまで田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の史跡ゾーニングに沿って各ゾーンの特徴を踏まえた史跡整備とその方向性を検討してきた。中核ゾーンは近世たたら山の山内景観が残る宮本鍛冶山内遺跡における信仰関連遺構を中心とした史跡整備、佐田ゾーンは山のたたら様の様相を示す朝日たたら跡の床釣り遺構を活かした整備を進めることで、田儀港の流通を含む海のたたらをメインとした導入ゾーンの越堂たたら跡の整備内容と合わせ、各ゾーンの特性がより一層明確になる。今後は、こうした各ゾーンの特性を活かした史跡整備を具体的に進めていく必要がある。

(2) 史跡の活用とその可能性

各ゾーンの特性に応じた史跡整備を進める一方で、史跡の活用についても検討を進めることが望ましい。田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入部である越堂たたら跡の整備が完了したことで、今後の活用の可能性についても考えてみたい。

各ゾーンの特性を活かした見学ルートの確立

まずは各ゾーンの特性を活かした見学ルートを明確にすることが求められる。現在、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体を周遊する見学者は少なく、宮本鍛冶山内遺跡や朝日たたら跡のみを個別に訪問している状況が多数を占める。それは、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡全体を把握できる施設がなく、これまで個別遺跡の紹介にとどまっていたことが影響していると考えられる。

こうした状況のなか、越堂たたら跡のガイダンス施設が整備され、越堂たたら跡のみならず田儀櫻井家や他の史跡などの情報、そして遺跡位置などが把握できるようになった。そのため、越堂たたら跡を訪れた見学者に対して、個別の興味や関心に応じて宮本鍛冶山内遺跡の山内景観や朝日たたら跡の床釣り遺構の展示棟に向かうことを促す見学ルートの提示が今後の活用で必要になる。

出雲地方のたたら関連施設との連携

出雲地方は江戸時代の一大鉄生産地であり、出雲地方西部で沿岸部に近い田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のほかにも、山間部の奥出雲地方では様々な鉄師が活躍していた。特に三代鉄師と呼ばれる田部家(雲南市)、櫻井家(奥出雲町)、絲原家(奥出雲町)が著名であり、それぞれの地域にはたたら製鉄に関する重要な文化遺産が多数存在する。田部家が経営した菅谷鉦は全国で唯一高殿が現存しており(第189図)、山内も当時の景観を色濃く残す。櫻井家や絲原家には当時の鉄師の住宅が存在し(第190図)、松江藩の藩主とのつながりを示す庭園や建造物、たたら関連の資料や調度品などが管理されており、当地の鉄師の繁栄ぶりを示す文化遺産として貴重である。その他にも、たたら製鉄の歴史と技術を体系的に学べる和鋼博物館(安来市)、現在唯一操業が行われている日刀保たたらや美術刀剣の展示施設である奥出雲たたらと刀剣館(奥出雲町)が存在するなど(第191図)、各地にたたら製鉄の歴史と文化を伝える文化遺産や施設などが点在する(第192図)。

これらの出雲地方のたたら製鉄関連施設のなかで、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は様々な調査が行われて近世のたたら製鉄遺跡としては当時全国で2例目の国史跡となり、たたら製鉄の遺構や近世たたら



第 189 図 菅谷鉦高殿 (左) と高殿内部 (右)



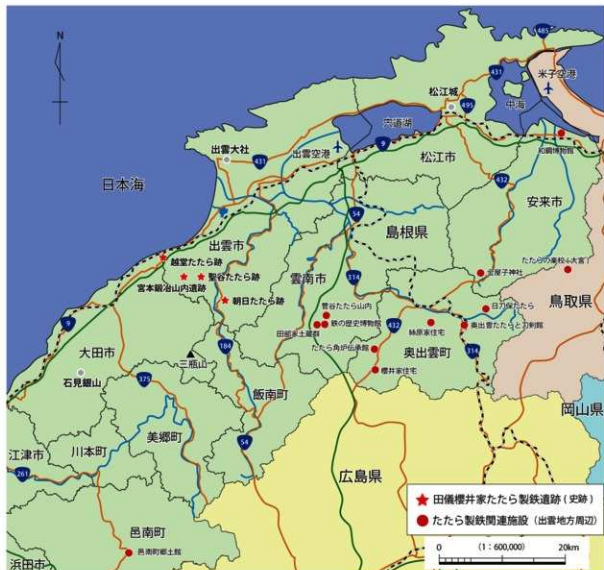
第 190 図 櫻井家住宅 (左) と絲原家住宅 (右)



第 191 図 和鋼博物館 (左) (写真提供: 安来市和鋼博物館) と奥出雲たたらと刀剣館 (右) (写真提供: 奥出雲町定住産業課) から製鉄の集落の様子を実際に現地にて体感できる点で独自性を持つ。こうした特性を活かして、出雲地方の他の施設と連携することで、出雲地方全体のたたら製鉄文化の価値づけに大きく貢献できる。

観光促進からみた史跡の活用

また観光促進の視点から田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の立地を俯瞰すると、国道 9 号に隣接して最もアクセスのよい越堂たたら跡は、年間 600 万人を超える観光客で賑わう出雲大社と平成 19 年 (2007) に鉱山遺跡としてアジアで初めて世界遺産に登録された石見銀山との中間地点にあたる。両観光名所を含めた観光ルートは、鳥根県内の観光ツアーとして定番のルートとなっており、その中間地点に設置された越堂たたら跡のガイドンス施設の意義は大きく、日本海沿岸の歴史観光における中継地点として機能すると考えられ、新たな観光客や潜在的なニーズの掘り起こしにつながる可能性を持つ。



第 192 図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡（史跡）と出雲地方周辺のたたら製鉄関連施設の位置関係

このように、周辺地域の観光名所を含めた視点に立って田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の位置づけを考えることは、これまで実践してきた調査研究や史跡整備の内容が新たな形で評価される可能性を持っていると考えられ、こうした視点で田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を捉えることによって、今後の活用の方向性を具体的に議論することができると思われる。

参考文献

- 杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鏡』佐田町教育委員会
- 幡中光輔 2017「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の整備・活用とゾーン展開」『遺跡学研究』第 14 号 日本遺跡学会 82～89 頁
- 幡中光輔 2020「宮本鍛冶山内遺跡の保存修理にみる史跡整備の課題と展望」『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告Ⅰ－宮本鍛冶山内遺跡 田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究－』出雲市の文化財報告 42 出雲市教育委員会 171～184 頁

第7章 結 語

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、出雲市多伎町を中心として広範囲に展開する製鉄遺跡群である。このなかで国指定史跡となった遺跡が4箇所に点在するという特性を持ち、史跡のゾーニングによって史跡を中心とした各ゾーンの特性を明確にすることが、整備・活用を進めるうえで重要であった。今回実施した導入ゾーンの越堂たたら跡の整備は、史跡整備全体の嚆矢となるもので、今後中核ゾーンの宮本鍛冶山内遺跡および佐田ゾーンの朝日たたら跡の調査や整備を実施する基盤になると考えられる。ここでは、これまでに報告してきた越堂たたら跡整備の要点を整理しつつ、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備事業の今後の課題と展望についてまとめ、結語としたい。

1 越堂たたら跡整備の要点

越堂たたら跡の整備事業は、平成18年度(2006)および平成25年度(2013)から平成29年度(2017)に実施した発掘調査の成果が基礎になっている。今回の現地整備およびガイダンス施設の整備は、越堂たたら跡の調査成果を中心として田儀櫻井家やたたら製鉄についての理解を深め、出雲地方西部の観光拠点や地元の史跡保護活動、そして地域の歴史学習の起点となることを目指した。

越堂たたら跡の現地整備は、発掘調査完了後に埋め戻した地表面上に製鉄炉・天秤ふいごの復元製作を設置しており、復元イラスト透過式看板と合わせて見学すると、たたら場操業当時の様子が再現できるようにした。

ガイダンス施設の整備では、建物の展示室内に越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りを設置して展示の中心とした。また田儀櫻井家のたたら製鉄に関する解説、他の史跡や奥出雲の鉄山師などの紹介も行っているほか、床面中央には田儀櫻井家たたら製鉄遺跡周辺マップを配置し、見学者を他の史跡などに誘導することを目的として整備している。

2 今後の課題と展望

(1) 越堂たたら跡現地整備の課題

越堂たたら跡の現地整備において、製鉄炉と天秤ふいごの復元製作を現地に設置したが、これらは覆屋を設けずに整備を行った。当初は覆屋を建築して製作物の耐久性を向上させる方向性も検討したが、周辺環境や立地などの諸条件から覆屋を設けずに製作物の露出展示を行っている。

天秤ふいごの材質はスギ材を用いており、木製で天秤ふいごを復元することで、より実物に近い風合いを演出することを目指した。その一方で、耐久性が低くなるという問題点が生じたため、部材を含浸処理する方法による防腐処理を施し、耐久性の向上を図った。

なお、こうした純粋な木製の製作物による露出展示の実施例は少なく、今回の現地整備による防腐処理を施した製作物の維持管理に加えて、防腐処理された木製の構造物が経年劣化に対してどの程度の耐久性を持つのかを検証することも重要な課題であり、今後の史跡整備において有益な情報となり

得る。なお、部材は外部から見える部分には釘をできるだけ使わずに木材の組み合わせで構築する構造としており、経年劣化などで傷みが生じた場合は、部材を部分的に取り換えることができる構造に加工している。

(2) ガイダンス施設整備の課題

ガイダンス施設の整備は、越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りを中心とした調査成果の展示のほか、田儀櫻井家のたたら製鉄や他の史跡および奥出雲の鉄山師などの紹介も建物の展示室内で行っており、たたら製鉄を通して出雲市西部域における地域経済の活性化に大きく貢献した田儀櫻井家のたたら製鉄が総合的に学べるため、今後の地域の歴史学習において重要な拠点となり得る。

施設の維持管理は、出雲市佐田町に設置された横見埋没林公園・展示棟と同様に、施設の清掃や点検、建物の開錠・施錠などを地元団体が中心となって行う計画としている。建物の展示室内は、基本的に常駐する職員を配置せずに見学者が自由に入出りできるようになっている。なお展示室内は無人の状態ではあるが、ドーム型カメラを設置して展示室内の様子を記録することで確認が行えるように整備した。

こうした施設の運営について、現在様々な想定を行って開館に向けた準備を進めているが、令和6年度(2024)の開館以後には運営や管理方針および展示内容などに関して新たな問題や改善すべき点が確認されることは十分に予想される。そうした内容に対して、地元団体や見学者などの意見を踏まえて総合的に検討を進め、よりよい施設づくりを目指すことが施設運営における今後の課題である。

(3) 今後の展望

各地に広域に点在する田儀櫻井家の製鉄遺跡の特性を理解するには、現在の出雲市多伎町を中心に山と海のたたらを同時に操業し、江戸時代の製鉄コンビナート体制を確立した田儀櫻井家の製鉄経営の特質を把握することが必要であった。今回の導入ゾーンの整備では、越堂たたら跡を中心とした田儀櫻井家の製鉄経営の全容を把握できる拠点を設置したことで各遺跡に関する理解を促進させ、田儀櫻井家のたたら製鉄の歴史的な背景とその価値が広く浸透する契機になると考えられる。

また、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の今後の展望として、史跡の各ゾーンの特性を活かした史跡整備が重要になってくる。具体的には、中核ゾーンの史跡整備の中心となる宮本鍛冶山内遺跡の智光院や田儀櫻井家墓地、金屋子神社などの信仰関連遺構の保全、佐田ゾーンにおける朝日たたら跡床釣り遺構の露出展示の整備や活用を具体的に進め、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の歴史的な価値の維持や向上を目指すことが求められる。またそうした点とともに、今後も田儀櫻井家たたら製鉄遺跡を対象とした地元の史跡保護活動や地域の歴史学習に貢献できる整備内容を模索・検討して進めることが、史跡全体の歴史的価値を次世代に継承するために必要であろう。

圖 版



越堂たたら跡周辺全景（整備完了後 北から）



越堂たたら跡周辺全景（整備完了後 南西から）



遺跡周辺の遠景（調査完了後 南東から越堂たたら跡と田儀港を望む）



遺跡周辺の遠景（調査完了後 北西から越堂たたら跡と田儀川を望む）



遺跡周辺の遠景（整備完了後 南東から越堂たたら跡と田儀港を望む）



遺跡周辺の遠景（整備完了後 北西から越堂たたら跡と田儀川を望む）



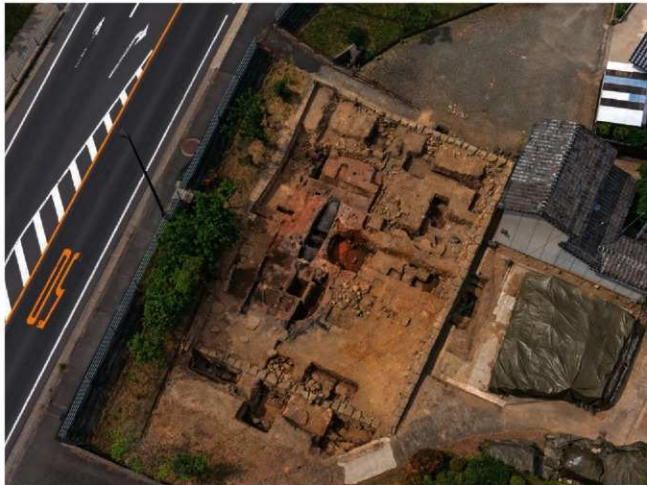
遺跡周辺の遠景（整備完了後 南西から越堂たたら跡と日本海・島根半島を望む）



遺跡周辺の遠景（整備完了後 北西から越堂たたら跡と中国山地・三瓶山を望む）



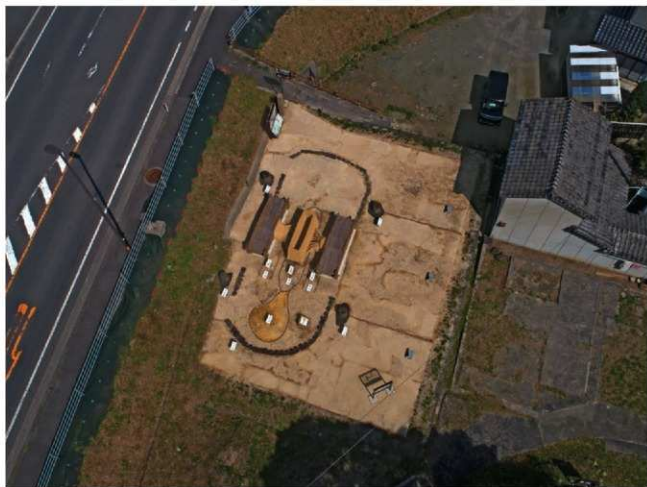
越堂たたら跡と田儀川下流域周辺全体図（オルソ画像）（上が北 越堂たたら跡はトンボの位置）



越堂たたら跡全景 (調査完了後 南東から)



越堂たたら跡全景 (調査完了後 北西から)



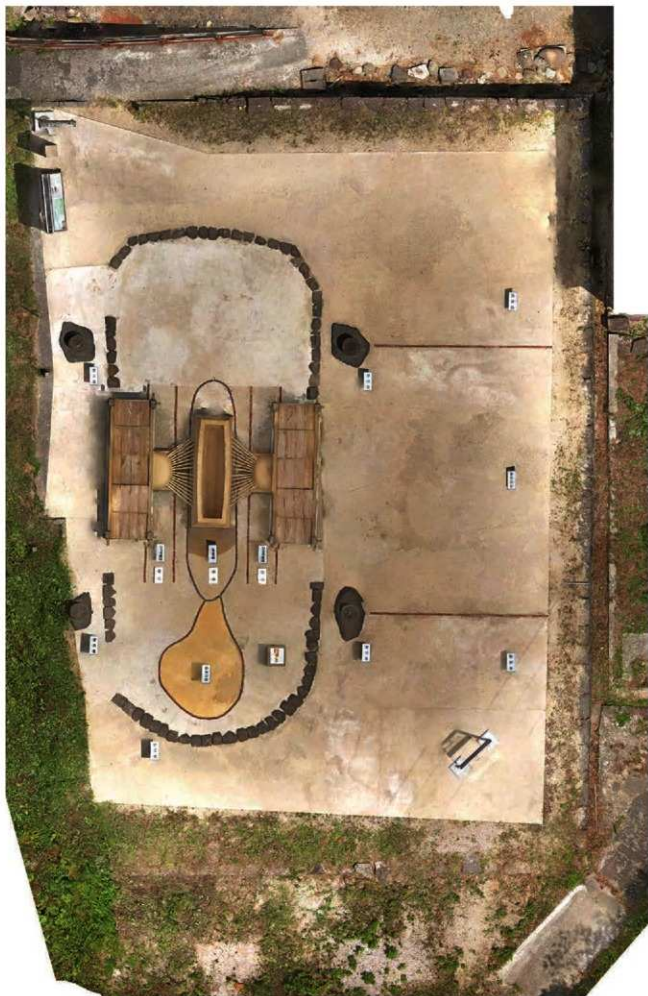
越堂たたら跡全景 (整備完了後 南東から)



越堂たたら跡全景 (整備完了後 北西から)



越堂たたら跡遺構全体図（オルソ画像）（斜め左上が北）



越堂たたら跡現地整備全体図（オルソ画像）（斜め左上が北）



簡易整備完了状況（南東から）



遺跡説明看板（東から）



遺構名称看板・遺構表示（東から）



遺構名称看板差し替え仕様（東から）



遺跡名称看板（2019 年度保存会設置 南西から）



現地整備状況（南東から）



史跡標識（1）（南東から）



史跡標識（2）（北東から）



真砂土舗装施工状況（西から）



説明プレート（北東から）



現地整備完了状況（1）（北西から）



現地整備完了状況（2）（南西から）



現地整備完了状況（3）（北から）



現地整備完了状況（4）（北東から）



現地整備完了状況（5）（南から）



現地整備完了状況（6）（南東から）



製鉄炉・天秤ふいご復元製作（1）（南から）



製鉄炉・天秤ふいご復元製作（2）（南東から）



製鉄炉・天秤ふいご復元製作（3）（南西から）



製鉄炉・天秤ふいご復元製作（4）（北西から）



製鉄炉復元製作状況（1）（モルタル塗り）



製鉄炉復元製作状況（2）（珪藻土仕上げ）



天秤ふいご復元製作状況（1）（部材加工状況）



天秤ふいご復元製作状況（2）（部材組み立て状況）



復元イラスト透過式看板（1）（南東から）



復元イラスト透過式看板（2）（南東から）



遺構表示の追加（土層立体割き取り位置を表示 南西から）



遺構名称看板的の更新（南東から）



関連文化財看板（1）（山内通路石垣 北から）



関連文化財看板（2）（金屋子神社 北から）



関連文化財看板（3）（田備川沿いの水路跡 北から）



関連文化財看板（4）（如来坐像 北から）



現地誘導看板（1）（ガイダンス施設付近 南東から）



現地誘導看板（2）（高殿南側 南東から）



現地誘導看板（3）（如来坐像付近 北から）



現地誘導看板（4）（越堂たたら跡現地 南西から）



ガイダンス施設整備完了状況 (1) (北から)



ガイダンス施設整備完了状況 (2) (西から)



ガイドンス施設整備完了状況（3）（南西から）



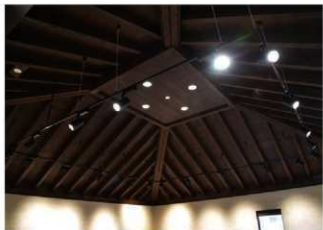
ガイドンス施設整備完了状況（4）（南西から）



建築外観（1）（北西から）



建物外観（2）（南西から）



電気設備（展示室内照明）



機械設備（給排水衛生設備）



地盤整備（1）（低木植栽 南東から）



地盤整備（2）（カツラの木植樹 北東から）



用地側溝整備（1）（南から）



用地側溝整備（2）（北から）



視認用史跡名称看板（1）（南から）



視認用史跡名称看板（2）（北から）



施設案内看板（建物前）（1）（北西から）



施設案内看板（建物前）（2）（西から）



施設案内看板（多目的広場横）（1）（南西から）



施設案内看板（多目的広場横）（2）（北から）



展示状況（1）（入口サイン正面）



展示状況（2）（入口サイン背面）



展示状況（3）（入口サイン展示ケース）



展示状況（4）（越堂たたら跡出土品）



展示状況（5）（映像展示 解説！越堂たたら跡）



展示状況（6）（映像展示 3次元映像でみる越堂たたら跡）



展示状況（7）（展示パネル）



展示状況（8）（展示パネル）



展示状況（9）（ダンボールクラフト）



展示状況（10）（廻船問屋関連品および高殿内部・床釣り模型）



展示状況（11）（廻船問屋関連品）



展示状況（12）（高殿内部・床釣り模型）



展示状況（13）（床釣り土層立体剥ぎ取り）



展示状況（14）（床釣り土層立体剥ぎ取り 土管解説パネル）



展示状況（15）（床面イラストマップ）



展示状況（16）（窓サイン）



越堂たたら跡周辺の越堂橋と権現山 (南西から) (右: 昭和 37 年)



越堂たたら跡周辺全景 (北から) (昭和 39 年)



越堂鉦山内の事務所跡周辺 (南から)



越堂たたら跡を渡る国道 9 号 (北から) (右: 昭和 54 年)



越堂たたら跡の金屋子神社 (左: 昭和 20 年代後半) と越堂橋付近の水路跡 (中央・右 南東から) (中央: 大正期 右: 現在)



越堂たたら跡周辺から口田儀のまちなみを望む (南東から) (昭和 36 年)



口田儀のまちなみ (1) (南東から) (昭和 35 年頃)



口田儀のまちなみ (2) (北東から) (左: 大正 5 年 右: 現在)



口田儀のまちなみ (3) (北西から) (右: 現在)



田儀川と魚見橋 (南東から) (左: 昭和 35 年 右: 現在)





田儀川と口田儀のまちなみ (1) (北西から) (左: 大正期 右: 現在)



田儀川と口田儀のまちなみ (2) (西から) (左: 明治後期 右: 現在)



田儀駅 (1) (左: 南西から) (左: 大正期 右: 現在)



田儀駅 (2) (北西から) (左: 昭和 30 年代 右: 現在)

報告書抄録

ふりがな	こえどうたたらあとせいびじぎょうほうこくしょ						
書名	越堂たたら跡整備事業報告書						
巻次	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅲ						
シリーズ名	出雲市の文化財報告						
シリーズ番号	57						
編著者名	桶中光輔						
編集機関	出雲市市民文化部文化財課						
所在地	〒 693-0011 鳥根県出雲市大津町 2760 番地 TEL (0853) 21-6618						
発行年月日	令和6年(2024)3月29日						
ふりがな	コード		北緯	東経	期間	整備面積	
所収遺跡名	所在地	市町村					遺跡番号
越堂たたら跡	鳥根県出雲市 多伎町口田儀 910番51外	32203	c 17 <small>(昭和製鉄跡)</small>	35° 15' 53"	132° 34' 55"	20180401 ～ 20240329	約 1,706㎡ 要因 史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な整備内容		特記事項		
越堂たたら跡	製鉄遺跡	近世 近代	越堂たたら跡現地整備 ガイダンス施設整備 関連文化財看板等設置		越堂たたら跡の現地整備は製鉄が・天秤ふいごの復元製作などを実施し、ガイダンス施設では越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りを中心に展示した。		
要約	<p>田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、出雲市多伎町・佐田町や隣接する大田市域および雲南市域に展開し、現在4つの史跡（宮本鍛冶山内遺跡・朝日たたら跡・聖谷たたら跡・越堂たたら跡）を含めて15箇所であたら場・鍛冶屋跡が確認されている。そのなかで越堂鉦は日本海沿岸部に立地し、田儀櫻井家の製鉄経営の基幹たたらとして操業された。</p> <p>越堂たたら跡の整備事業は、平成18年度および平成25年度から平成29年度に行った発掘調査の成果を踏まえて実施し、史跡全体の導入ゾーンとして出雲地方西部の観光拠点や地元の史跡保護活動および地域の歴史学習の起点となることを目指した。</p> <p>越堂たたら跡の現地は、発掘調査完了後に埋め戻しを行い、その後に製鉄が・天秤ふいごの復元製作などを設置してたたら場操業当時の様子を再現した。</p> <p>史跡指定範囲隣接地に設置したガイダンス施設は、越堂たたら跡の床釣り土層立体剥ぎ取りを中心とした調査成果や田儀櫻井家のたたら製鉄に関する解説、他の史跡や奥出雲の鉄山師などの紹介も行い、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入部として広く活用できる展示を行った。</p> <p>また越堂たたら跡周辺には、当時の越堂鉦山内での生活や信仰に関する文化財が現在も残っているため、これらの関連文化財の説明看板や誘導看板などを設置し、山内全体の景観が把握できるように整備を実施した。</p>						

出雲市の文化財報告 57

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅲ

越堂たたら跡整備事業報告書

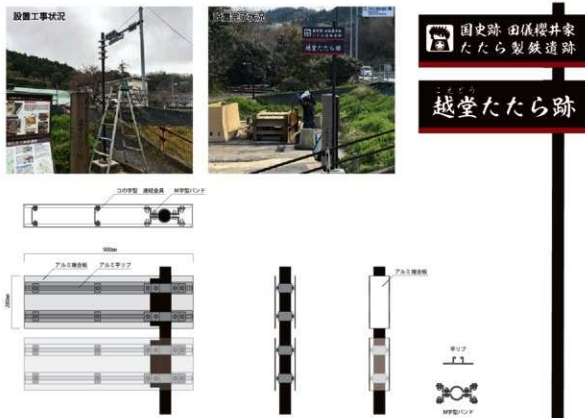
令和6年(2024)3月29日

編集・発行

出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町2760番地
TEL (0853) 21-6618

印刷・製本

株式会社 報光社



第124図 現地誘導看板図面(2) (S=1/20)



第125図 現地誘導看板

(左上：ガイダンス施設付近 右上：高殿南側 左下：如来坐像付近 右下：越堂たたら跡現地) (令和4年度)



埴田右衛門の家紋
(中輪に抱き柏)



櫻井家の家紋
(丸に立ち桐の葉)